

でんしよでしよ!

vol.3

初夏のともしび
橋高有紀 / illustration ひろ

この地球の美しさといったら!
袖希実 / photo 写真素材 足成

moonless stroll
kakua / illustration damo

レーネン山中の魔物

梓寝子 / illustration 立神勇樹

身代わり令嬢の失恋

早瀬千夏 / illustration 女将

魔女の戸棚

相沢秋乃 / illustration あから 孤島に潜む影

紅侘助 / photo 紅侘助

フォルトナはきみに微笑む

-Fortuna in Dice-Kingdom-

楽山やくら / illustration 重森まさみ



はじめに

* オリジナル小説誌 *

新人からベテランまで、ネット小説界で活躍中のみなさんの作品を集めた、オリジナル短編小説誌です。さらりと軽快な作品から技巧が光る読み応えのある作品まで、作家の皆さんが全魂を込めて書き上げた、名作・傑作・快作・秀作の数々をぜひご堪能ください。

* 対象年齢 17 歳以上 *

読者対象として 17 歳以上を想定しております。
描写レベルとしては PG-12 程度ですが、内容に関して対象年齢以下のお子様への配慮はしておりません。
対象年齢以下の方の閲覧を禁止するものではありませんが、低年齢層の閲覧には保護者の方が十分ご注意のうえ適切なご指導をお願いいたします。

作品概要

初夏のともしび 橘高有紀 / ひろ

祖父が遺した田舎家を訪れた真一は、見知らぬ少年に誘われ闇夜を走る。花火が上がる。
祭拍子が聞こえる
現代青春幻想譚

この地球の美しさといったら！ 柚希実 / 写真素材足成

人類の存亡を一身に背負うシュウ。だが、彼の人生の歯車は、冷凍睡眠中の美女を見た時から狂いはじめた。
サスペンスフルSF

moonless stroll kakua / damo

幼子の手を引いて聖美は家を出た。どうしようもない衝動に駆られて……
現代掌編

レーネン山中の魔物 梓寝子 / 立神勇樹

父と大叔父が旅の青年を魔物退治に利用しようとしている！？ 少年は憤りを胸に家を飛び出した！
異世界ファンタジー

身代わり令嬢の失恋 早瀬千夏 / 女将

お嬢様の身代わりとしてお見合いの席に臨んだメイドのジョーン。破談させるはずが、まさかの一目惚れ！？
ラブロマンス

魔女の戸棚 相沢秋乃 / あから

凍えそうな心を抱えて帰宅した深雪。双子の妹達が双子の魔女に助けを求める。「深雪ちゃんが大ぴーんち！」
現代青春抄

孤島に潜む影 紅侘助 / 紅侘助

『神話』に深く魅入られた男が辿る数奇な運命 それは、人が足を踏み入れてはならない世界
怪奇幻想譚

フォルトナはきみに微笑む - For/tuna in Dice-Kingdom - 楽山やくら / 重森まさみ

ダイス・キングダムでは、すべてがダイスの目で決められていた。政治も経済も、そして人の生き死にも。
異色ファンタジー

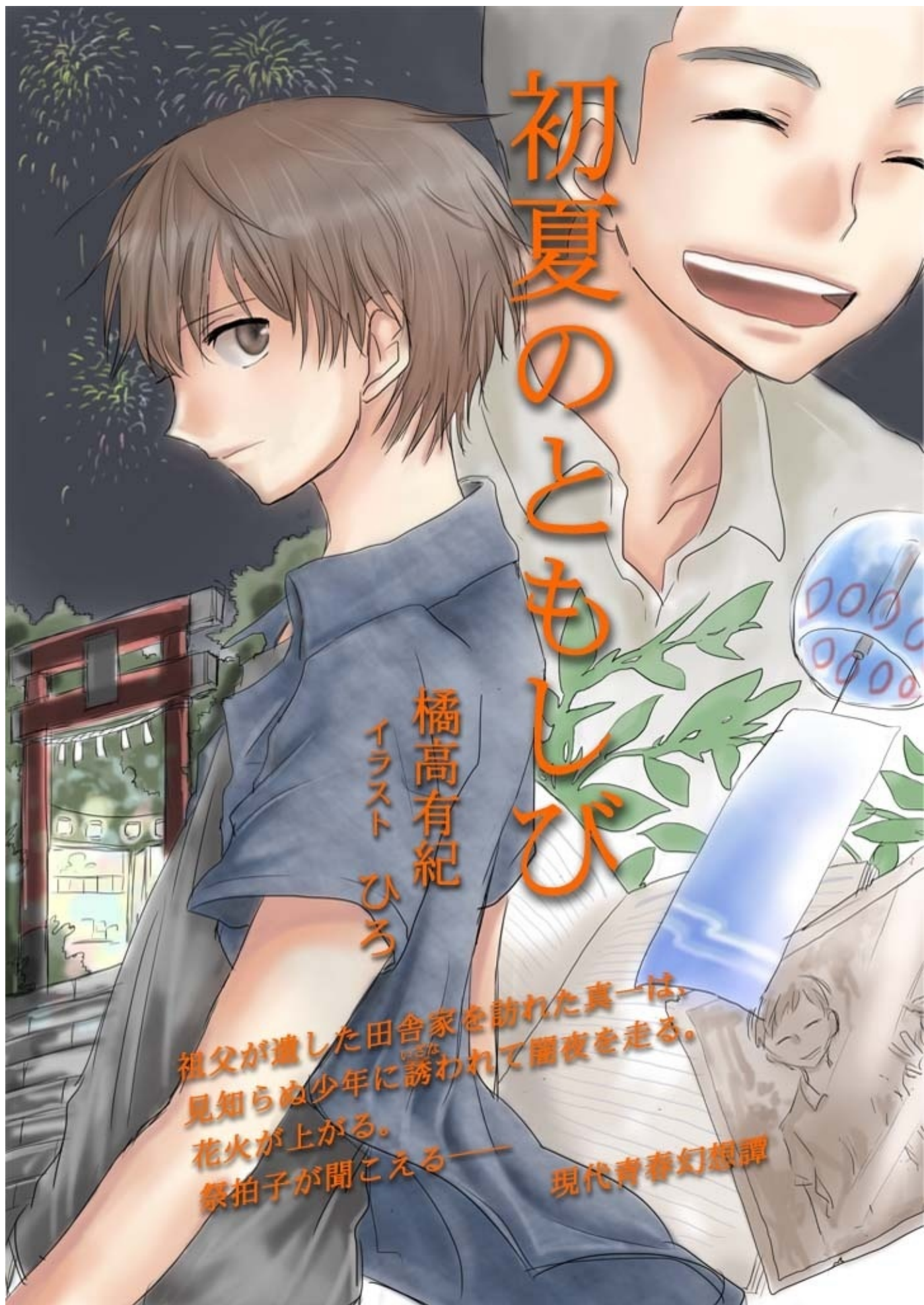
初夏のともじび

橘高有紀

イラスト ひろ

祖父が遺した田舎家を訪れた真一は、
見知らぬ少年に誘われて闇夜を走る。
花火が上がる。
祭拍子が聞こえる——

現代青春幻想譚



緑の山間を、歩いていて、葉の隙間から落ちるきらきらとした光のなか、鞆背負って息を切らせながら。汗をぬぐった指を地図に這わせた。バスを降りてどれだけ歩いただろう。そろそろ目的地のはずである。

先月、祖父が死んだ。二年ほど前から入院し、会うたび痩せていく祖父の最期に、俺は立ち会うことを許されなかった。じゃあまたくるから。そう言って病室を出たときには元気そうだったが……その日の夜中、祖父は息を引き取った。両親の慌ただしさから異常を察したが、家にいるよう厳命されたのだ。

入院中の祖父にだれよりも会いに行ったのは、きっと俺。祖母はとっくに他界していたし、親は仕事があったからだ。顔をみせるたび喜んだ祖父がする話を、なんとなく聞いていた。

(じいさんがいなくなって、ひと月)

だが、俺の生活はなにも変わらなかった。寂しさや悲しさで胸が潰れるのだと身構えたが、心はちっとも動かなかった。祖父の冷たい身体へ触れたときでさえ、だ。現実と夢の狭間にいるような浮遊感に支配され、涙を流すことなく淡々と葬式は終わった。自分でも薄情だと思った。……五年近くを共に暮らした人が、消えたのに。

(人が死ぬってこんなものなのか)

俺も両親も、いつもと変わらない。祖父が生きていたことさえ、やがて記憶の片隅に追いやられ、風化し、忘れさられるのか。

空を仰ぐと、天井のように枝がいっぱい広がっていた。煩いぐらいの虫の音や鳥の声が耳朶に触れるのも、新鮮でうざったい。目に鮮やかな空の青と深い緑が、感傷に浸る俺には煩わしかった。

祖父の記憶の場所へ、やっと足を踏み入れたのだ。通り過ぎる道の些細なことが、想像した通りだった。時おり走りさる汚れた軽トラや、青々とした棚田、畑で働くまばらな人の姿。道端にはびこる雑草と、さびたガードレール。ぽつぽつとあった家屋に、道の途中でみえた古色蒼然とした社……。ざあ、と風が吹いて生い茂る木々を揺らした。

『……とな、よう遊んだんや。元気でなあ、こっちの話聞かん奴で、よう手え引っ張られてな。……みにいったんや。夏には少し早い……をなあ』

懐かしげに、だが棘が刺さったように目を伏せた祖父を思い出す。古びた写真を眺めては何度も話してくれたその顔は、不鮮明なものだった。すでに俺のなかから祖父があやふやになりつつあるのだ。重くなった足を、無心になって動かす。あの写真には、二人の少年が写っていたと、思う。

(そういえばあれ、どこへやったんだったか)

ここを訪れるに当たって探したが、みつからなかった。祖父がいつまであの写真を手にしていたのか。思い出せずにいる。つうつと汗が目の近くを伝った。休み休み歩いたせいか、目的地へ着いたところには昼をずいぶん過ぎていた。

(この古い家が、じいさんの家)

急な坂になっているガタのきた石畳が、小さいが立派な門へ続いていた。その奥に、木々に囲まれた家屋がみえる。ぽかんと呆けて俺はその家を見つめていた。既視感があったのだ。

『……ちやうかったから、……住んどった時期があってなあ。そこで良うしてもろたから、じいちゃん……になったんや。ええとこやで、行ってみいひんか、真一』

祖父の声が、時間を越えて耳朶をかすめていく。

「おおい、坂山さんとこの子おか」

唐突に声をかけられた。振り返ると、隣家から初老の男が出てきていた。男は寺橋ですと名乗り、こちらが名乗る前に名前を言い当てた。連絡をくれたろう、と笑いかけられる。あ、と得心がいて頭を下げた。この家の管理を任せている人である。代わりにうちの田畑を貸していた。共働きの両親にとって、この遠く離れた土地は手に余るのだ。

「少しの間、お世話になります」

寺橋さんは目を細くしてうなずいた。

「ようきたなあ。迷子にならんかったか」

まるで遠く離れた身内が訪ねてきたような、あたたかな対応だった。

案内されるまま戸口の開け放たれた家へ入ると、ひんやりした風が頬をなでた。雨戸はすべて開けてあったので、風が通るのだ。気を利かせた寺橋さんが掃除してくれたらしい。ちりんちりん、と風鈴の音が聞こえてくる。

「おおきくなったなあ。もう中学生か。はは、覚えとらんかもしれんけどなあ、こおんなちいちゃいころ、真一くんきたことあったやろ。よう覚えとんで。修三郎さんが手えつないで歩いとったんや」

寺橋さんは、ごもごもと口を動かしてしきりに話しかけてくれた。祖父のこと、この辺りのこと、注意すべきこと、昔のこと、明日は祭があること。特に祖父の思い出は多く話してくれた。物静かだった祖父は、引っ越してきたばかりの寺橋さんに野菜の世話を教えたいらしい。新たな隣人を喜んで、飲み交わしたこともあると。

「……そうか、もうあの人は逝ってもうたんやなあ」

俺は曖昧に微笑むことしかできなかった。なぜ、この人のほうが祖父の死を悼んでいるのか。身内の俺は、なぜ他人事のようにしてられるのか。郷愁を覚えたのは、ここを訪れたことがあったためか。祖父の昔話は関係なかったのか。

寺橋さんご夫婦のところで夕食と風呂を済ませ、引きとめる彼らに礼を言って祖父の家に戻ったのは、七時を大幅に過ぎたころだった。がらんとした部屋にあがると、すぐさま横になる。歩きづめだったため、身体が重かったのだ。

畳の匂いがした。虫の音やこずえの音、近くを流れる小川のせせらぎが聞こえてくる。ぶらん、ぶらん、と揺れるちゃちな電球は古色を帯びた梁にかかっていた。天井が高く、組みこまれた梁が太く立派だった。元々の家屋を増築・修繕しているせいで、古い梁や柱はあちこちにあるのだ。

なにもすることがなかった。電気こそ届いているがテレビはないし、電波が届かないため携帯も使えない。当然、パソコンもない。文明の利器がなければ暇もつぶせないのか。昔は、この状況が普通だったらしいのに。

(信じらんねえ。メールチェックもできないなんて)

未練がましく触っていた携帯をしまつて、縁側まで転がると、夜空いっぱい星が輝いていた。夜は、これほど明るいものだったか。ここは時間が、やけにゆっくり流れている。ちりんちりん、と聞こえてくる風鈴の音が心地いい。

(こうやって星を眺めたんだ？ じいさん)

祖父は五年前までここに住んでいた。祖母が亡くなってから街へ……俺の家へ移ったのだ。入院するまでまめに戻って、掃除や畑の手入れをしていた。俺は、それを知っていて手伝おうとしなかったし、田舎を疎んじてきた。

今さら訪れたのには理由があった。この家を両親が手放そうとしているのだ。祖父の大切な場所がだれかの手に渡る。そう考えたらいてもたってもいられず、飛び出していた。

(今日は金曜で、明日は祭。日曜に母さんが迎えにくる……。祭が始まるまで、なにをしよう)

行かなきゃいけない。そんな焦燥に駆られても、中学生なんかにはできないことはない。

ちりんちりん、と遠くで風鈴が鳴っている。ああ、そういえば、風鈴は魔除けになるのだと、だれかに教えて貰ったのだった。この家は守られているのだ。

思いをめぐらせるうちになにかが顔に触れて、眠りは妨げられた。いつの間にか眠っていたらしい。起きあがると身体がだるく、節々に痛みが走った。敷いた布団ではなく畳に転がっていたのだから、当然である。

そこで俺は息を詰まらせた。視界の端、縁側に祖父が腰を下ろしている

「じいさ……」

身を乗り出すと、それはなにかの見間違いだったようだ。瞬きの間に消えてしまった幻へ、空虚な笑みが落ちる。祖父はひと月も前にこの世をさったのだ。だれもいないに決まっている。

ちりんちりん、と音がする。自嘲してうつむいた俺は、背後の気配に全然気づかなかった。突然目隠しされて「だーれだ」と問われ、みっともなく悲鳴をあげた。

「うわああっ！」

ひやりとした手がゆるんだ隙に逃げ出し、犯人を振り返った。

「そんなビックリせんでもええのに。久しぶりやなあ、^{しゅう}修」

笑いかけてきたのは少年だった。歳は俺と同じくらいで、今どき見慣れない坊主頭である。汚れたシャツと膝下までの綿パン姿で、太めの眉が田舎くさい。

馴れ馴れしく伸びてきた手を弾き、俺は後ずさった。

「ど、どっから出てきた！ お前だれだ。ドロボウ？ 強盗か？」

そいつは口をぱくぱく開け、驚きに目を丸くし、徐々に冷たい顔つきになった。

「なんや？ お前こそ、だれやねん。修んちやぞここ。そっちこそドロボウちゃうんか。こんなとこでなにしとんねん。くそ、間違おたやろが」

ドロボウだって？ 予期しなかった切り返しに、頭が真っ白になる。ここは祖父の家で、こちらは身内だ。ドロボウ呼ばわりされる理由がない。こいつはだれだ。寺橋さんの身内か と言いかけ口を嚙む。寺橋さんご夫婦は二人暮らしだと、聞いたばかりである。近場にもう二、三件、家は建っていたが……田舎では遅い時間でも気軽に人が訪れるものなのか。

(っていうか、修ってだれ)

まさか、ここにだれかが住み着いているとか

ありえない。もしそうなら寺橋さんが追い払う。

みたところ、武器のようなものは持っていないが……

「ここはじいさんの家だ。俺は孫の坂山真一。ドロボウなわけないだろ！」

俺は手近にあった座布団を投げつけた。

「孫お？ お前が？ そんな話聞いたことあらへんで？」

侵入者は素っ頓狂な声をあげ、座布団越しにまじまじみつめてくる。

「そっちこそ修ってだれだよ、侵入者。強盗じゃないならなににきた！」

「ご、強盗ちゃうわ！ なんでそんなことせなあかんねん！ 俺は、修が帰ってきたんや思て慌てて……だあぁ、もう！ 俺は新崎滋、修は修三郎！ こう言うたらわかるんか！」

俺はまごついた。修三郎、とは祖父の名前だ。新崎という名前も覚えがあった。その瞬間、丸めた座布団が飛んできて、かろうじて受けとめる。

「じゃあここおるんは……えーっと真一？ お前一人しかおらんの？」

「他にだれがいるように、みえるか」

滋がもどかしげに口を開く。

そのとき、ドン！ という音が響いた。心持ち身体が揺れる。驚いて目を周りに向ければ、さらにドン、

と音が続いた。狼狽する俺とは裏腹に「始まりよっつ」と滋が縁側を降りていく。そこから侵入したらしい。確かにどこからでも入りこめるが、雨戸を閉め忘れたことに舌打ちする。

なんの音が尋ねると、「花火！ 祭が始まったんや」という返答があった。は、と当惑する俺の手を、半分座敷にあがった滋が引っ張る。

「こっちきてみ。ほら、あっこんどこ！」

先ほどいがみ合ったのを忘れたような、こだわりのなさに呆れる。だが、指された方角から暗闇を切り裂く光がのぼった。ドン、という音は一拍遅れて聞こえてくる。パチパチパチ、という火花の散る音。視線が釘付けになった少しの間に、次の花火が空を駆けのぼる。我知らず、祭は明日じゃ……と口走っていた。すると、滋が「はぁ？」と怪訝そうにする。

「今日が祭やん。なに言うてるん」

ひょっとして、金曜の夜から土曜の夜まで爆睡状態だったのか。可能性を否定しきれず黙ると、滋が不審もあらわにこっちをみている。

「なぁ。お前……修んとこの親戚やねんな？」

「孫だって言っただろ。そっちこそ、なんでじいさんを知ってるんだよ」

「そりゃあ、うちはずっとここ住んどるし、坂山のご隠居の話も聞いたことくらいあんで。おとんもおかんも、世話なとったし」

ご隠居？ 修三郎というのが祖父のことなら、祖父は田舎でご隠居と呼ばれていたのだろうか。その祖父が遊んでやったのが、この滋なのか。

(なんか、会話がつながってないような)

いっぽうで庭に降りた滋も「そうか、親戚やったら似ているわけやな」と呟いている。そろりと部屋へあがった俺の腕をつかまれた。まだ用があるのか。身を捻ると、滋はにいと歯をみせた。

「どうせやし、一緒に祭行かへん？」

はよう、と引っ張られるまま出たことを後悔したのは、走り出してすぐだった。

「お前なんで、道を走らないんだよ」

滋が先導する近道は、明かりもろくにない暗所である。真っ暗な細い山道や田んぼのあぜを突っ切る背中が、信じられなかった。がさがさ、と茂みが揺れるたびになにかが飛び出さないか　なんてビクつく暇もない。置いていかれて堪るか、と追いつがるので精一杯だ。

(くそ、どこまで走るんだ、あいつ)

祭の場所さえ知らずに飛び出したのだった。今さら帰れと言われても無理な話である。

「だって、はよ行かな祭終わるやん。ほら、あこの明かりみえるか？」

茂みの先に、赤い明かりがちらついた。夜の闇に不思議なほどに明るくみえた。呼吸も乱さない滋が指した場所は、急な傾斜の石段である。大きな赤い鳥居が、その天辺に陣取っていた。

「あ、あそこまで、走るのか」

息を切らせて問いかけると、滋はにっと笑みを作った。俺たちは山ひとつ越えていたのだ。

石段には、花火見物で座る人たちがちらほらといた。仰ぎみた鳥居の向こう側から、赤々した明かりがあふれ、祭拍子や笑い声が聞こえる。辿ってきた道が暗かったせいか、余計に目映い。

「結構人多いんだな。そんな大きい祭だったんだ？」

「そうや、こらでいっちゃんてっかいやっちゃ。知らん人もぎょうさんくるしな。って、お前もそうやん。みにきたんやろ、花火」

なぜか、あの朱の鳥居が異界への門のように思えた。玉垣がぐるりと囲った赤い光の照らす場所へ、別種の世界へ、橋をかける門だと。こちら側は、こんなにも暗く、静かで不気味なのに。

気づいて歩きや。すごい人やからなあ。

そんな言葉を聞いた気がして、思わず振り返った。神社へといたる真っ暗な夜道を、ぼつぼつと明かりが照らしている。そこをすり抜けて門へ吸いこまれていく、人、人、人。見知った顔などいやしない。その間にも、空には色とりどりの光が舞っている。こんな田舎に、と驚くほどの人出である。

(気のせい……？　なんだ、この違和感)

くしゃりと俺は前髪をつかんだ。祭の熱気に早くも当てられたのか、地に足が着かないような浮遊感があった。頭の芯がぼやけているような、じんとした不明瞭さだ。その背にバンと衝撃が走り、覚醒はうながされた。

「ほらほら、ぼうっとしとらんと行くで。まずはラムネやんな」

釈然としないながらもジーンズをまさぐって、俺は固まった。あるはずの財布がなかった。どこかに落としたのか。そもそも忘れてきたのか。ヤバい、と顔に出たらしい。「もしかして金ないん」とあっさり見抜かれた。取りに戻る、と踵を返すと、

「おごったるって！」

驚いて向き直った瞬間、背後の夜空で花火がはじけた。影が足下で大きく伸びた。パチパチパチ……と火花を散らして落ちる花を、滋はみつめて笑う。

「別にええやん。今日は祭やで。それにお前足遅いねんもん、帰っとったら終わってまうわ」

てってって、と降りてきた滋に光のなかへ「はよう」と誘われる。暗がりから、赤い光と祭拍子のあふれる鳥居の奥へ。そこにあったのは石畳に沿って並んだ露店と、田舎では信じられないほどの賑わいだ。提灯の明かりに導かれる人の流れの先に、古びた社がみえた。人波はざわざわとさざめいている。

迷子にならんよう、手えつなごか。

まただ。

雑多な音に混ざって耳朶に触れる、姿なき声のあるじを探した。人影のなかに、それらしい人物は見当たらない。先ほどから違和感がぬぐえなかった。この声はだれなのか。知っている気がするのに。

「おーい、さっきからなにしてるん。知り合いでもあったん？」

言葉を濁した俺へ渡されたラムネは、キンキンに冷たかった。

射的に輪投げ、綿飴に焼きそば、金魚すくい、ピンス焼、リンゴ飴……全部滋のおごりだった。ほとんど一人分や一回分を二人で分けた。オマケしてくれる人もいた。「悪い。帰ったら返すから」と宣言すると「律儀やなあ」と滋が苦笑する。

「こんなん、一緒に楽しいなあて思えたら十分やのに。って、あ！　ほらあっこ、ヨーヨーあんで。あっちは綿飴作らせてくれるんやて！　行くでほら」

えええ、と面倒がった俺の腕を滋が引っ張った。最初から話をまったく聞かない滋のペースだが、一緒にいて不快ではないのが不思議だ。滋の開けっぴろげな態度のせいだろう。巻きこまれるのがいやじゃない。

屋台が切れた社の前では、休憩中の人たちがたむろしていた。座れる場所はすべて埋まっている。そこでターンして、俺たちはまたあの光のなかへもぐった。

ちょうど、浴衣を着こんだ子どもたちが入れ違いに駆けてくる。古びた狐の面をそれぞれつけて、風車や飴を手し、けらけらと笑いながら。それを見送って、あ、となにかを思い出しかけた。振り返ると、転びかけた子どもが、追ってきた親に抱えられていた。何気ない光景に、目が釘付けになる。

「な、時々ぼうっとしとるけど、なあんか懐かしいもんでもあったん？」

「いや……なんか、見覚えあるような気がしたんだ。きたことないはずなのに」

滋は「ふうん？」と興味深げに笑っていた。

一通り露店を回り、最初の石段へ自然と戻る。そこも大勢の人で埋まっていた。けたたましい音と共にあがる花火を眺めるには、絶好のポイントなのだ。

「なあ、修、元気しとるん？」

鳥居にもたれかかって滋が、静かに口を開いた。いつの間にか買ったのか、二本目のラムネをあおっている。

心臓がはねた。祖父は死んだ。そう伝えれば良いのに躊躇ってしまう。

「俺なあ、修に会いたかってん。身体弱かったやろ。……あいつ、向こうで元気なん？ 身体壊しとらん？ 遊びにくる言うとったのに、全然こおへんねんもん。もう三年経つのに」

ほんま薄情やんなあ、と滋が小さく笑うのを横目でみながら、絡まった謎がほどけるのを感じていた。いや、この可能性に気づきながら、俺は逃げていたのだ。その蓋が、開けられていく

聞いたことがあった。

祖父は、子どものころ一時期だけ田舎に住んでいた。身体が弱かったため、療養する目的で静かなこの山に。家族と離れて暮らす彼の世話を頼まれたのは、縁のあった新崎家だった。今でこそ寺橋さんの暮らす隣家は、新崎の人が昔住んでいた……。

たまに家族がやってくるだけの生活でも、祖父は寂しくなかったと話していた。それは友だちが、いつも遊びにきてくれたからだ。そのかいあって、祖父は十二の歳にはすっかり元気になった。身体も街の生活が可能なほど、丈夫に。

その後はずっと街で暮らし、結婚して、仕事を退職し、再びここへ戻ったのだ。祖母が亡くなるまでの数年間を、あの家で。

どうして戻ったの、と祖父にいつか尋ねたことがあった。不便でなにもない田舎にどうして戻ったの、と。そのとき、祖父はどんな顔をしていただろう。

「元気、だよ」

声が、震えた。

新崎という名前に、覚えがあった。祖父の昔話に散々出ていたのだ。お隣に住んでいた少年。そのあたたかい家族。祖父を受け入れてくれた人たち。今、隣にいるこいつは

『友だちとよう遊んだんや。話聞かん奴でなあ』

そう懐かしげにしゃべった祖父の横顔と、色あせた写真が不意によぎる。

「……元気で、やっているよ。いつもここを思い出してるって、言ってた」

言っていた。だから戻ったのだ、と。

街へ帰っても忘れられない場所だったのだ、ここは。祖父が子どものころに過ごしたのは、たったの三年だ。そんな短い期間を、宝物のようにずっと祖父は胸にしまっていた。それは亡くなるまで変わらなかった。入院中だって会いに行くたび、昔話を祖父は繰り返し語り、当時を懐かしんだのだから。

「俺も一緒に行かないかって誘ってくれてたんだ。祭の花火がきれいだからって、ずっと……。それで俺、ここへきたんだ」

何度水を向けられても、俺は行かなかった。学校や塾、部活を優先し、遊びに没頭していた。祖父の誘いなどいつでも行けると軽くみていたから。

なぜそんな風に思っていたのだろう。次があると、当たり前のように。

ぱんぱんと花火が打ちあがる。終わりが近いのか、先ほどから打ちあがる間がどんどん短くなっていた。

傍らで、そうなんや、と滋は大きくうなずいている。満面の笑みが胸に刺さった。

「修が元気ならええねん。ありがとな、真一。花火きれいやろ？ 修もなあ、花火きれいやなあて言うてて

んで。この祭、あいつ好きやってん」

ひときわ大きな花火が空を彩った。反射的に見上げた俺を、滋が突き飛ばす。

その瞬間、鳥居から真っ黒な影が押し寄せた。え、と思ったときには遅かった。血の気が引いた。滋がその波に吞まれる。手を伸ばしたが届かない。滋、と叫んだ。滋、と声の限りに。しかしそんな声は、響いた花火と歓声にかき消された。大きな、大きな花火が目いっぱい映って……やがて視界は真っ暗になった。真っ暗に。

ちりん、ちりん、と風鈴の音がする。

うっすらと瞼をあげると、古びた天井がみえた。がばり、と身を起こして四方を確認し、ここが祖父の家だと思出す。水の音と、蛙の鳴き声が聞こえてきた。辺りがまだ暗い。夜だとわかった。

……今のは、夢？

風が吹きこみ、寒さに肌が粟立った。雨戸は開け放したままだ。ぶるりと身体が震える。ぐっしょりと冷たい汗をかいて、息があがっていた。ぼた、と手になにかが落ちて、自分が泣いていたことを知った。

(手が、届かなかった)

子どもだった祖父がここを離れた三年後、あの祭の日に、滋は消えた。石段から足を滑らせて落ちたのだ。かなりの落差がある石段だ。その年の夏休み、遊びにきた祖父は、一足早い夏の祭に間に合わなかった

(すぐ隣に俺、いたのに)

大切な場所にもかかわらず、祖父が長い間戻れなかったのは、このせいだ。戻ることができなかったのだ。子どもが独立し、祖母と二人きりになって、やっとこの家へ目を向けられたのか。五十年以上の時間を要しても癒えない傷は、祖母が他界し街中へ越してからも、ずっと祖父を苛んでいた。

知っていた、はずだった。

小さなころに手を引かれたあの祭で、祖父は言っていたのだ。ここで大切な人を失くしたと。会えなかったことを後悔していると。言っていた。あの石段で転がりかけた俺を、必死に抱きかかえてくれた祖父が。人が多いから手をつなごうか、と微笑んだ祖父が。ラムネを買ってくれて、滋と同じように二人で回った露店の合間に。楽しいと笑った俺へ向けられた、どこか痛みを伴う微笑も。

滋の満面の笑みが、瞼の裏に焼きついて重なる。あの、ひときわ大きな花火と、押し寄せてきた人影も。どうして忘れていたのだろう。こんな大事なことを、どうして。

俺が滋を助けられたら、祖父は後悔せずに済んだのに。

(なにも、変えられなかった)

変えることなど、できないのかもしれない。

あれが過去なら、変えようがなかったのかもしれない。

(どうして俺だったんだよ。どうして、滋に会うのがじいさんじゃないんだ)

涙が止まらなかった。仰向けに倒れこんで、腕で顔を覆う。祖父に今こそ会いたかった。しかし、もういない。こうだったんだよ、と伝えられたらいいのに、祖父はひと月も前にいなくなってしまった。その喪失感に打ちのめされた。

悲しかったんだ……。

ちりんちりん、と風鈴は風と遊んでいた。夜が、明けようとしていた。

翌日、俺は縁側で古びた帳面をめくっていた。黄ばんだ紙面に綴られた文字を追うたび、重苦しいなにかが胸を塞ぐ。達筆で読み解くことは難しかったが、それに指を這わせる祖父の姿が脳裏にこびりついていた。のどかな昼下がりと合わない心中が、恨めしくなる。

「なあに熱心に読んでるの、真一。呼び鈴押したのに無視してくれちゃってさ。連絡のひとつも寄越さないで」

不意に人影が手元を遮った。ぎょっとなって後ずさる。覗きこんできたのは母だった。庭を回ってきたようだが、まったく気づかなかったのだ。

「え？ 母さん？ え？ くるの明日の予定じゃ……あ！ 俺、まだ帰るつもりないんだけど！ それに連絡は寺橋さんがしてくれたし、携帯は圏外で」

言いながら手にしたものを隠したが、遅かった。にこーっと母は笑ったと思うと、ひょいと俺からそれを奪う。あ、と声をあげたが、連絡をしなかった負い目から強気に出られない。

「すぐは帰らないわよう。おじいさんの家に行きたいだなんて駄々こねた息子が心配で、ちょっと早めにね。ゆっくりきたことなかったし……。で、これは？」

別にいいだろ、返せよ、と手を伸ばしても母は聞きやしない。パラパラと勝手に帳面をめくっている。その表情がふっと変化した。

「これ、おじいさんがよくみてらしたノートね。小さなころの日記だったんだ」

母の声色に懐かしさが滲んでいた。同意をこめた沈黙に気づいたのだろう、小さく苦笑している。それは、今朝方空っぽの筆筒や鏡台、棚などを確認してやっと手に入れた祖父の手記だった。当時の、記憶の断片がしまわれているのだ。

そこから、するりと一枚写真が落ちた。二人の少年が写ったものだ。歳ごろは今の俺より少し下だろうか。坊主頭の片割れが、昨晚夢にみた少年と似ていた。やはり、ここにあった。

ちりんちりと風鈴が鳴る。入ってきた風に、母が髪を押さえた。

「わ、いい風。涼しいわねえ、クーラーいらんのかしら、ここ」

手記を置いて、縁側から母は家へあがりこんだ。土間や梁に感嘆している。どうやらちゃんと家を覗いたのは初めてだったらしい。裏にポンプもあったと言うと、「うそ、どこ？」と母が目を輝かせた。その隙に写真を手記に挟み直し、ふと俺は風鈴をみつめた。

風鈴は、守るものでありながら、『呼ぶ』ものでもある。不意にそれを思い出したのだ。

「じいさんは待っていたのか……？」

それとも、待っていたのは滋のほうなのか。

(そんな、まさかな)

向こうから「真一」と呼ぶ声がある。

「いいところね、ここ。遠慮なんてせず、もっとお邪魔しておけば良かったな。仕事しごとで、あんた送るぐらいしかしてなかったから。お父さんも全然寄りつこうとしなかったし」

それにお母さん、畑仕事なんてさっぱりだからさあ、と母が苦笑する。両親の結婚後、田舎へ引っ越した父方の実家へ、母も気軽には訪れなかったようだ。父も無関心だった。田舎に思い入れがまったくないのだから、仕方ないのかもしれない。祖父の道楽だとかぼしていたのを、知っている。

「母さん。俺、三つか四つのころきたことあるよな」

「やだ、覚えてるの？」

「昨日、寺橋さんに聞いて少しだけ。うろ覚えに近いけど」

そう、と母は笑みを深くし、大きくうなずく。

「あ、そうだ、寺橋さんに挨拶してこなくちゃ」

あんた、ちゃんとお世話になりますって言ったでしょうね、と出ていく母を、引きとめた。

そうだよ。田畑はあるし、少し下ったところの小川はきれいだ。街中より涼しいし、景色も良いし、のどかで、なにもないけどゆっくり過ごすことができる。夜は、散らばったダイヤモンドみたいに星が輝くんだ。しかし、頭のなかでいっせいに浮かんだそれらの言葉、すべて飲みこんで言ったのは。

「母さん、今夜、祭があるんだって。この辺りで一番大きな祭」

あら、と母の顔が輝く。俺は、昨日の不思議を思い返した。切ない気持ちが蘇る。それでも上手く笑えただろうか。

「一緒に行こう。花火がすごいから」

了

文・橘高有紀（きったか・ゆうき）

<http://hakushi.chips.jp/>

少年少女の成長ものを中心に、ファンタジーや恋愛を書いています。

絵・ひろ - イラスト特別提供 -

よろしくお願ひします。

この地球の 美しさといったら！

人類の存亡を一身に背負うシュウ。
だが、彼の人生の歯車は、
冷凍睡眠中の美女を見た時から狂い始めた。
サスペンスフルSF

柚希実

photo

写真素材 足成

地球周回軌道上の宇宙船から伸びた長いアームが、地球の大気を採取してゆっくりと畳まれていく。古いアームは、時々異常な動きを見せながらも船に寄り添い、取り込んだ空気を船内に送り込んできた。

まずここまでは上手くいった。シュウは緊張を逃すため、身体に溜め込んでいた息をすべて吐き出した。視線が落ちて目に入った服は薄汚れている。だが、どうせ宇宙船にはシュウ一人しかいないので、気にする必要はなかった。船内に残っている男物の服はこれが最後だから、どちらにしる着替えようがないのだが。

薄暗い室内、シュウがコンソールに指を滑らせると、気体分析機のシグナルがいくつか点滅を始めた。少しの間を置いてモニターに映し出されてくる分析結果は、この宇宙船が地球を離れる以前の数値にほど近く、人類が繁栄していた頃の状態に戻っていることを示している。

オールクリア。

大気以外の分析が終わっていないとはいえ、その大きく真ん中に映し出された文字に胸が高鳴った。他の分析は、宇宙船の着陸と同時に作動する機械にすべて任せればいい。シュウはマニュアルに書かれていた内容を思い浮かべ、張り詰めていた気を緩めるために、意識して身体の力を抜いた。

シュウは宇宙船で一番大きな、といっても直径二メートルほどしかない丸窓に目を向けた。青い海面と列島が、薄い雲の下に見えている。生まれた時から変わらぬ地球の外観が、今のシュウには光り輝いて見えた。

風に揺れる木々の葉が陽光を乱反射させ、緑の香りが肺を洗う。そうやって身体が自然を吸収するのは何より気持ちがいいと、書物データベースに載っている書籍で目にしたことがあった。地上に降りる手順を習得し実行していくことで、自分もそれを感じることができるのだ。生き残った動物がいるかもしれないし、食べられる植物もあるかもしれない。シュウは、今まで経験したことのなかった新しい世界に対する冒険心が、大きく膨らんでいくのを感じていた。

今からちょうど百年前、『最高水準の科学と地球を愛でる旅』というツアーで、一機の巨大宇宙船が地球周回軌道に向けて飛び立った。パンフレットには、地球が滅亡を迎える時、人類はこのような宇宙船で地球を離れ、新たな地を求めて旅立つことになるでしょう、という煽り文句が踊っていた。そしてその通り、植物による食料と燃料、繊維生成の装置、及び酸素供給装置や、様々な研究施設、教育設備、書物のデータベース、視聴覚施設など、宇宙船の航行と人間の生活に欠かせない物のすべてが搭載されていた。

船の定員は二百名だ。そのうち居住区画には半数の百名が住めるようになっている。そして残り百人は、航行が長期にわたる場合を想定し、三ヶ月以内には冷凍睡眠装置で眠りについて月日を過ごすという筋書きがなされていた。

ツアーは高額だったが人気も高く、募集分は一日で埋まり、搭乗人数は規定の二百名に達した。冷凍睡眠の必要がない三週間の予定で地球を離れた機体は、地球周回軌道をたどり、その窓に様々な角度からの美しい地球を映し出した。

時を同じく、地上では小さな戦争が起こっていた。小国同士の衝突は、平和な観光旅行中の宇宙船内で話題に上がる間もなく、頻繁に勃発していた小競り合いと同じように収まっていくはずだった。いや、戦争は確かに収まった。だが二国間が睨み合いに戻ったのではなく、生物兵器としてばらまかれた死のカビによって、世界中が戦争どころではなくなってしまったのだ。

敵国を滅ぼさずの胞子は季節風に乗って拡散し、その速度は対処法を研究するスピードを凌駕した。二百五十度ほどの熱で死滅するのはすぐに判明したのだが、当然そこまでの高温で地球を包むことはできない。一部分を高温にしても、大気の流れがすぐに胞子を運んできてしまう。一定の時間、紫外線を浴びせるだけで死滅することも突き止められたが、太陽からの紫外線では全滅まで八十年を超える年月が必要

なため、結局人類は為す術もなかった。

すでに出来上がっていた宇宙船が何機かは地球を脱出できた。だが、カビはその機体内でも猛威をふるい、一機、また一機と、容赦なく大きな棺へと変えていった。元々宇宙に出ていた機体もあったが、環境を長く保つことができないものばかりだったため、脱出できた機体と同じように無機質な塊と化していった。ツアーに参加していた人々は皮肉にも、機外にいる人類の滅亡を目の当たりにすることになったのだ。

シュウの乗るこの宇宙船は長期滞在型だが、普通に生活していけるのは百人あまりだ。そのため三ヶ月目を前に、残りの百人は冷凍睡眠につくこととなった。それでも彼らは笑っていた。眠りにつかない人間と違い、いつか地上に帰ることができるという夢を見ていられたからだろうか。

冷凍睡眠時の事件が記録に残っている。途中で起こされることを嫌ったカプセルの責任者が、手動で個別に覚醒させるためのマニュアルを一つ目のカプセルに眠る老人の背に隠したというものだ。その責任者は百個目のカプセルで眠りにつく前に、満面の笑みで言い残したらしい。

眠ることができなかった副船長は、怒りのあまり同じ苦しみを味わえとばかりに、地球へ降りるための自動操縦プログラムを消してしまった。子孫を地球へと望んでいる人々が、手動での着陸方法をかき集めて事なきを得たが、着陸は難しいものになってしまった。

実際、慣れない宇宙での生活に、人口はあっという間に減っていった。宇宙船に搭乗してから生まれた二代目は九人。三代目は三人、四代目は一人だった。そして二十年前、宇宙船の着陸準備の際に起きた事故で三代目の一人、父親が亡くなったため、生き残っているのも一人のみ、当時七歳だった四代目のシュウだけになってしまった。いや、冷凍睡眠についている百人がいるため、完全に一人とは言い切れないのだが。

手動で起こす手段は失われているが、地上に降りさえすれば、冷凍睡眠は自動的にとかれるように設定されている。だが、カプセル使用期間が百年に満たないうちに着陸しなければ、冷凍睡眠が自動でとけなくなってしまう。

着陸に関するマニュアルを読み尽くし、シミュレーションを重ね、シュウは二十七歳になった今日まで、地上に降りるための勉強を重ねてきた。人類の存亡と百人の命がシュウにかかっている。だが、できたのは教育施設と書物データベース上の学習だけだ。実際に操作できるのか定かではないし、衣服を作る機械のように、船のどこかが破損していないとも限らない。無事に降りられる自信はなかった。

シュウは船尾にある冷凍睡眠室へと足を向けた。そこに行けばシュウが蘇らせなくてはならない百人がいる。その顔を眺めれば、地上に降りる勇気が出るのではないかと思った。

父親が亡くなった後、寂しさのあまり冷凍睡眠室をのぞき見たことがあったが、それ以来、一度も見に行っただけでなかった。怖かったからだ。冷たく小さなカプセルの中で青白い光に包まれている人間は、宇宙に送り出した遺体と同じように見えた。

だが様々な勉強をした今は、カプセルの中身が遺体ではないことくらいは自然に理解できている。

使われずに古くなったドアは、それでもシュンと小気味よい音を立てて道を空けた。縦に長い部屋の中央、二列に整然と並んでいる冷凍睡眠のカプセルが、部屋に青白い光を放っている。

シュウの予想通り、昔見た時の恐怖はわき上がってこなかった。というよりも、どんな感情も浮かんでこなかった。カプセルはただカプセルとして横たわり、内包されている人間は命のない人形のように見えた。

シュウは止まっていた足を前に踏み出し、カプセル上部から見える個々の顔をのぞき込んだ。

マニュアルを持っているだろう老人、中年の男、中年の女。次に見た子供のところで、つま先側にあるプレートに気付いた。No.4・3・学生・7歳、とある。シュウは、前の三人は何とあっただろうかと戻って確認した。

No.1・1・科学者・70歳、男。

No.2・1・調理機器整備技師・34歳、男。

No.3・2・調理師・30歳、女。

職業は必要な時に起こすためかもしれないと想像がついた。ただ、通しナンバーらしい数字の次、二番目の数字が分からない。シュウは謎を抱えたまま、プレートと顔を確認しながら再び歩を進めた。

No.5・1・生物学助教授・41歳、男。

No.6・2・美容師・24歳、女。

No.7・1・映画監督・55歳、男。

No.8・2・女優・28歳、女。

No.9・1・アートディレクター・49歳、男。

No.10・2・特殊メイクアーティスト・41歳、女。

No.11・3・学生・13歳、男。

No.12・1・工学科技師・31歳、男。

No.13・1・工学科技師・38歳、男。

そこまできてシュウは、家族が分かるように番号を振っているのかもしれないという考えに至った。数字が一に戻ったところから一番大きい数字までが一つの家族なのだと思う。

だがシュウは、家族というものがよく分からなかった。自分が生まれて一年ほどで母親が亡くなったという記録があった。唯一記憶に残る家族である父親も、シュウが七歳の時に亡くなっている。

時を止めた彼らとシュウの家族は、どちらが幸せだっただろうとシュウは思考を巡らせた。

厳しい環境で命を落としていった眠らなかつた人たちと、地球で生きることを夢見続け、今もまだ眠っている人たち。シュウが生き残っていなかったら、夢は夢だけで終わってしまう。そんなことすら知るよしもなく。

だが、これから地上に降りて安穏とした生活が送れるとも限らない。廃墟になった建物は残っているだろうが、厳しい自然環境が待ち構えている。それでも宇宙での生活を知らないだけ、カプセルの中の方が幸せだったのではないだろうか。

彼らが今見ている夢を想像しながら、シュウは二番目の数字を確認しつつ部屋の奥へと移動していった。

不意にシュウの足が止まった。部屋の一番奥にあるカプセルに目が釘付けになって動かない。明らかに他を見た時とは違う感情が溢れてきた。

今まで見てきた数々の画像を含め、ここまで綺麗な女性を見るのは初めてだった。色白の肌はまるで血が通っているように赤みが差し、金色の髪はカプセル内の青白い光さえ柔らかく反射している。今すぐに起き上がっても不思議ではないほど生き生きとしているのだ。

そして、なぜか彼女だけは服を身につけている。興味を持ったシュウは、カプセルを回り込んでプレートをのぞき込んだ。

イブ、アダムと共に

通しナンバーもなく職業もなく、ただ芝居の台詞のような一言が書いてある。内容からして、イブとアダムが人の名前だろうということは想像がついた。その名をどこかで聞いたような気はするが、それが誰なのかは分からない。

ふと隣のカプセルに目が行った。そこには No.50 の数字が振ってある。発作的にもう一列を振り返ってカプセルを確認した。綺麗に並んでいる。もう一列も五十一台のカプセルがあるということは、全部で百

二台ということになる。

船内人口は搭乗時から完全に管理されていたし、搭乗人員は二百人と記録にも残っていた。冷凍睡眠の装置を増やせたとしても、黙って人間が増えるということはないはずだった。

記録の曖昧さがシュウを苦しめた。人口の記録すら不確かなのだ、地上に降りるための手順もどこか抜けているかもしれない。

だが反対に、シュウの降りたいという気持ちは高まっていた。無事に地表に着いたら、地球の自浄作用に守られた環境で、彼女を自分の家族にしたいと思ったのだ。

シュウはカプセルが並ぶもう一列の方へと足を向けた。まっすぐ端のカプセルへと向かい、そのプレートを見下ろす。

アダム、イブと共に

想像していた言葉に奥歯を噛み締め、その顔へと目をやった。男だ。やはり服を着ていて色白で、生気の残る顔をしている。その顔をどこかで見たような記憶があるとシュウは思った。すぐに、乗員の残した美術の書籍だ、と思い付く。そこに載っていた宗教画と呼ばれていたらしい絵画に描かれていたような女々しい顔だ。

彼らは何らかの理由があり、追加で冷凍睡眠に入ったのかもしれない。新しいカプセル二台から伸びた、だらしなく床を這うコードがそれを示している。そして、並びが違うために数字で家族だと表せないから、こんな文言を記したのだろう。

それにしても、身体の管理をするために、装置には裸で入るはずが、服を着たままなのは不自然だ。その上、睡眠時の顔色がよく見えるほどの改良が、短期間で行えるものだろうか。それも記録にはなかったはずだ。だが、確かに彼女は眠っている。

今一度彼女のカプセルをのぞき見ると、シュウは冷凍睡眠室を後にした。

その足でシュウは船内の記録を集めてある部屋に来ていた。人間二人と冷凍睡眠のカプセルが増えたことについて、どこかに載っていないかと、もう丸一日物色し続けていた。だが、すべて調べ終わった今でも、その記録を見つけることはできていない。むしろ死んでいった人間たちの記録がしっかりしているため、二人増えているという事実だけが謎を深めていった。

ならば、とシュウは工学作業室へと向かった。修理のために冷凍睡眠装置の部品が二台分、一通り揃っているはずだ。それがなくなっていれば、正体が分からない二人のために組み立てたのだと推察できる。

だが、そこには皮肉な状況が待っていた。カプセルの外側部分と、部品も半分ほどがなくなっている。だが、あと半分は何かを組み立てた跡を残したまま放置されていた。床には金属らしき粉や、何か樹脂のような物が散っている。他の部品があって冷凍カプセルを作り上げたのか、それとも別の何かを作ったのか、専門知識がないシュウには分からなかった。

これだけ大きな出来事だ、もしかしたら記録に残さなくても口で伝わると考えたのかもしれないとシュウは思った。だとしたらアウトだ。シュウが一人になった当時は、まだ七歳だったのだ。最後に残っていた父からも、何も聞かされてはいなかった。

だが、アダムとイブが登場する書物だけはデータベースから発見できた。神が作った最初の人間だなどと記されていた。そんな大仰な名を使って家族だと主張するなど、思い上がりも甚だしいと思う。

イブ、アダムと共に

アダム、イブと共に

蘇ってくる二枚のプレートにあった言葉に、シュウの嫉妬心が煮えたぎった。彼らは地上に降りて二人

で暮らすという同じ夢を、今この時も見ているのだ。

このままでは無事に地上に降りたとしても、あのアダムという奴がイブと一緒に暮らすことになってしまふに違いない。だがアダムだけを始末したとしても、一斉に起き出す人間らの中に、イブを狙う奴が現れるかもしれない。

始末、などと思っている自分の思考にハッとした。身体が震えるほどの動悸が、シュウを揺り動かす。

心も震えている。そんなことをしていいわけがない。だが、できることなら彼女と一緒に暮らしたい。その気持ちを振り払えず、シュウはなんとか落ち着こうと奥歯を噛み締めた。

大きく息をつき、手元の古い資料から顔を上げると、円形の窓の外に美しい地球が見えた。太陽が百年の歳月をかけて浄化してくれた地球だ。とにかくあそこに帰るのだ。きっと地球もそれを望んでいる。

すぐ側の天井に、後から設置された電灯のコードが垂れているのが目に入った。二つの新しいカプセルからも、だらしなくコードが伸びていたのを思い出す。

あのコードを外せばアダムは死ぬだろう。軽く蹴飛ばすだけでそれは叶う。いや、蹴るのではない、うっかりつまずくのだ。そうすればアダムのカプセルは動きを止める。もしも二つのカプセルが連動しているようなことがあれば、イブだけを助ける努力をすればいい。

シュウは熱に浮かされたようにフラフラと工学作業室を出た。

この宇宙船を地球に着陸させたら、一番に彼女と地上に降り立とう。そして彼女と切れない関係を作るのだ。他の百人が起きても、その誰もが彼女を手に入れようなどと考えないように誰よりも早く、早くだ。

シュウは、ただ自分の夢のみをブツブツと自らに言い聞かせながら歩みを進めた。

冷凍睡眠室の空気は、前よりも幾分冷たく感じた。室温は変わっていない。シュウの体温が変わったのかもしれない。

シュウは二列に並んだカプセルの間を奥にあるコードに向けて進んだ。シュウの頭で、鼓動が痛いくらいにガンガンと音を立てている。

つまずくんだ。つまずくだけだ。悪いのは俺じゃない。そこにコードがあったからだ。むしろ転んで被害を受けるのは俺の方だ。

無意識に早くなったシュウの足がコードを直撃し、一瞬フラッシュのような光が辺りを包んだ。つんのめって転んだシュウは、頭をもたげてアダムのカプセルを振り返った。ちぎれたコードがヘビの抜け殻のように落ちている。

立ち上がって中をのぞいた。アダムは身体をけいれんさせていた。カプセルのどこかがショートしているのかパチパチと音を立て、その音が静まると同時にアダムも動きを止めた。

イブの無事を確かめていなかったことにハッとし、シュウは慌てて彼女のカプセルに駆け寄った。変わらぬ美しさでそこにいた彼女に、ホッと胸をなで下ろす。

後は宇宙船を無事に着陸させるだけだ。そうすれば百一個のカプセルが人間を起こしてくれる。新しいカプセル故、最初に起きるだろう彼女を連れて、真っ先に彼女と地上に降りればいいのだ。地表の分析をするためとでも理由をつければ完璧だ。

シュウは喜色満面、冷凍睡眠室からコックピットへと急いだ。

地鳴りのような音を立て、宇宙船の動力が冷凍睡眠室へと行き先を変えた。円形の窓の外には砂地と水平線が見える。反対側の窓を見やったシュウの目に、木々の葉が揺れているのが映った。

無事に降り立ったのだ。やり遂げたという満足感に、シュウは声を立てて笑った。そのまぶたに彼女の美しい姿が浮かぶ。アダムの反応が早かったということは、彼女もすぐに起きるだろう。シュウは早々に冷凍睡眠室へと向かった。

起き上がるところを見られるかと思っていたが、回復はシュウの予想以上に早かったようだ。まっすぐな廊下の中ほどまで進んだ辺りで、彼女が部屋から出てくるのが見えた。

長い金髪が柔らかく空気と戯れ、水平線に近い海のような色の瞳は、真円のカパーションカットに磨かれた宝石のように輝いている。

ただその表情は硬かった。アダムという家族を失ったのだから仕方がないが、いつか笑みで溢れさせてやるとシュウは思った。彼女はシュウを認めると、冷たい表情のまま一礼した。

「もう動けるんだ？」

喉の震えを飲み込み、勇気をふるってかけた声に彼女は、はい、と短く答えた。

「すぐに任務に向かいます」

「任務？」

「土壌の採取と分析です」

そう言うと彼女は歩き出そうとする。一人で行かれてしまっは予定が狂う。

「手伝うよ」

「そのような命令をお受けでしたらお願いします」

彼女はまた一礼すると、着替えることもせず外へと続くハッチのある小部屋へ向かって歩き出す。シュウは慌てて彼女の後に続いた。

昇降機が地上に近づき、シュウと彼女は地表に降り立った。振り返ると宇宙船は上手く砂地に着陸している。これなら何か起こった時も再び宇宙へ逃げ出せるだろう。早々に調査を開始した彼女を尻目に、シュウはあちこちに触り、匂いを嗅いだ。

何もかもが新鮮だった。砂はサラサラと暖かく、海の水はぬるぬると指にまとわりつく。手を拭きながら森に近づくと、足元は砂から黒っぽい土へと変化してきた。

海の匂い、砂の匂い、土の匂い、幹の匂い、葉の匂い。鼻を近づけるとそれぞれに主張してくるその匂いは、絶妙なブレンドでシュウの肺に侵入し、百年の間使い古した空気を隅々まで洗い流していく。

ふと白い花が目についた。五枚の花弁を持つ繊細な容姿は、彼女の髪にこそふさわしい。シュウはおそるおそる手を伸ばして花を手折り、彼女を振り返った。

森にほど近い場所の土を左手のひらに乗せたまま、彼女は突っ立っていた。シュウが近づいても微塵も動かない。その土を持ち帰って分析するなら、何か入れ物に入れなくてはならないだろうが、何一つ道具を持っている様子がない。不思議に思いつつも、シュウは彼女の髪に花を飾ろうとした。だが彼女は、それを奪うように手に取り、花に視線を落とす。シュウも釣られるようにその花に見入った。

「質量 3.249g、8 株のカビが認められます」

「何を言って」

なんの冗談だと笑おうとして、彼女の目に釘付けになった。眼球からレンズが伸びたのだ。シュウは開いた口がふさがらず、だが呼吸器が凍ってでもいるように息苦しさが増していく。

彼女はそのレンズをシュウに向けるとレンズの出し入れをして、シュウのあちこちにピントを合わせている。

「あ、アンドロイド……？」

「はい。土壤の採取と分析をプログラムされております」

彼女はそう言いながらレンズを動かし続け、シュウを舐めるようになぞっている。

シュウは何もかもに合点がいった。

大気を分析する際のマニュアルにあった、宇宙船の着陸と同時に作動する機械、それがアダムとイブだったのだ。冷凍睡眠カプセルは着陸で作動するのだから、流用もたやすかったのだろう。地上に最初に降りる二体だから、アダムとイブという名前をつけられたのかもしれない。

気付くと同時に、冷凍カプセルのプレートにあった職業が脳裏に蘇ってきた。そこには工学科技師が何人か連なっていた。詳しくは書いてなかったが、ロボット工学だったのかもしれない。

そして、映画監督、アートディレクター、特殊メイクアーティスト。勉強の合間に見た映画と呼ばれる映像のメイキングで、ロボットに皮膚をかぶせているものがあつた。シュウの見たのは恐竜と呼ばれる生き物だったのだが。

「衣服に2株、頭髮に1株、口腔内に1株のカビが認められます」

カビを体内に入れることは死を意味する。シュウは必死に唾液を吐き出そうとした。だが口を開けていたせいか、喉の奥までカラカラに乾いていて思うように吐き出せない。

「ど、どうしたら」

「住人に被害が及ぶといけませんので、一度周回軌道に戻ります。再度の着陸は、分析結果を踏まえての計算次第になります。船の外壁の点検が必要ですので、アダムの修理をする時間も考慮に入れてください」

彼女はシュウに背を向け、宇宙船へと歩き出した。

「俺を置いていく気か」

シュウは必死で後を追ひ、彼女の肩を掴んだ。彼女はゆっくり水平に振り返る。

「いえ、そのようなつもりはございません。先ほどのハッチ部分には、カビを除去する装置が設置されていますので」

「除去？ どうやって？」

「ハッチ内で私と一緒に300度の熱風を浴びていただきます」

シュウは呆然としているはずの自分が、なぜか笑っていることを自覚した。カビは体内で菌糸を伸ばし、およそ一週間で人に死をもたらす。だが、そのカビを除去するには身体を燃やすしかないというのだ。シュウの命は、どっちにしても詰んでいる。

地球が浄化したかったのはカビではなく、醜い気持ちを持った人間だったのかもしれない。それならば宇宙船で焼き尽くされるより、このまま地球に浄化してもらいたいとシュウは思った。

「俺はここに残るよ」

「承知いたしました」

即答した彼女は、廊下で会った時と寸分変わらない礼をすると、シュウに背を向けてサッサと歩き出した。彼女の遠ざかっていく後ろ姿は、金色の髪が陽に映えて美しかった。もうすぐその外見も燃えてしまうのだろう。昇降機が上昇し、彼女は三百度の熱風が吹き荒れる小部屋の中に消えた。

ふとシュウは、宇宙船が飛び立つ時に噴出される熱のことを思い出した。ここにいたら結局宇宙船に焼かれてしまう。シュウは全力で駆けだした。

これで間違いなく孢子は身体に取り込まれてしまっただろう。身体に菌糸が張り巡らされていくことを想像すると気がおかしくなりそうだったが、今はそれよりも逃げなくてはいけないことが、シュウにとって救いにすら感じられていた。

どれだけの間走り続けただろう。もう大丈夫だろうかと振り返った時、宇宙船がうなりを上げ始めた。熱と音をいくらかでも防げればと岩の陰に隠れる。熱は距離が取れたからか思ったほどではなかったが、耳をふさいでも防ぎようがないほどの轟音が地面を揺るがし、巨大な宇宙船が重たい身体を持ち上げて飛び立っていく。

首を出せるほど音が収まった。岩陰から顔を出したシュウは、小さくなっていく宇宙船よりも、その後に残っている森まで浸食した丸い焼け跡を眺めていた。

そして自分の中にも同じような焼け焦げがあることに気付いた。

アダムは死んではいなかった。シュウが殺したはずの男もアンドロイドだったのだ。彼女が言ったように修理をすれば動くだろう。そして彼女と作業を永遠に続けるのかもしれない。

アンドロイドなら実際殺したことにはならないと思うと、シュウは意味もなく安心した。だが、シュウが行動したプロセスは変わらない。自浄作用が働かないシュウの中では、その焼け焦げが永遠に残るのだ。だが、そんな焼け焦げが在るも無いも関係なく、地球はシュウの身体を受け入れてくれるだろう。

あの百人が地上に降り立って百年経った頃、一体何人の人間が残っているだろうか。人間よりもカビを選んだ地球の自浄作用を、彼らはきっと甘く見ているに違いない。

シュウが想像していたように、地球は美しかった。そう、地球自身を守り続けているこの自然こそが美しいのだ。シュウはその一部に帰っていける嬉しさと、母の胸に抱かれる時の嬉しさは同じような感じだろうかと、無意識に重ね合わせていた。

疲れからなのかカビのせいなのか、思うように動かなくなった身体を下葉のベッドに横たえる。木漏れ日がまぶたを柔らかく撫でていく。この地上で土に溶ける夢を見ながら、シュウは静かに目を閉じた。

文・柚希実（ゆずき・みのる）

<http://fayerie.rdy.jp/>

主にファンタジーを書いています。現在は他のジャンルにも挑戦しています。少しでも楽しんでいただけたら嬉しいです。

写真・写真素材 足成

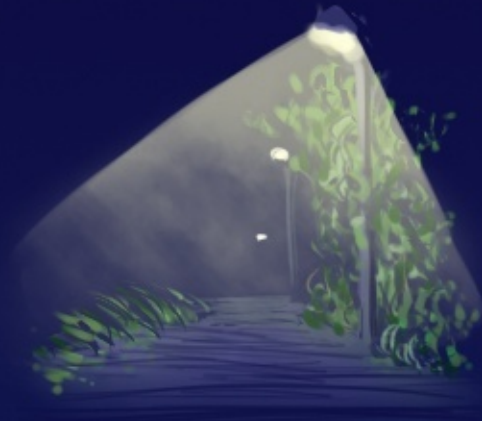
<http://www.ashinari.com/>

写真素材を無料で提供しているサイト「足成」さんから写真をお借りしました。

写真の撮影者は工藤隆蔵さんです。

幼子の手を引いて聖美は家を出た。
どうしようもない衝動に駆られて……

現代掌編



moonless stroll

k a k u a

illustration
d a m o

娘の、小さく柔らかな手は、聖美の左手をぎゅうと握って離さない。あたたかなそれを、聖美も強すぎないちからで握り返した。

聖美のローファーのヒールがかつりと音を立てる。けれど、小さなスニーカーの足元では、枯れた草を踏みしめる音がする。さくり、さくりと。無言の歩みのうちに、娘はその感触に楽しみを覚え始めているらしい。

「……綺麗な音、するね」

そう話しかけると、娘はうん、と頷く。涙のあとの残る頬を軽く撫でると、ふわり、嬉しそうに娘は笑った。好きなだけ踏んでおいでと聖美はその手を離す。認められた、と思うのか、踏みしめる足音はスピードを増した。

聖美は静かに空を見上げる。月も星もない淀んだ空が、目の前に広がっていた。

肌寒い、夜だった。

真冬には程遠いはずなのに、体の芯から冷えてしまいそうな夜だった。

「……おつきさま、みえないね」

ぼつりと、小さな声がした。いつの間にか、枯れ草を踏む足音は止まっている。

月が好きな娘は、小さく、残念そうに呟く。うん、と聖美は答えて、ひどくあたたかな手を引いて先を促す。

「今日は、隠れてるね」

「さみしいねえ」

その言葉に、聖美は一瞬、どう答えていいのかわからなくなった。けれど娘は聖美を見上げて、ねえ、と重ねて同意を求める。頑是なく。だから聖美も微笑んだ。

「そうね、淋しいね」

微笑んで発したつもりの声が思ったよりも暗くなり、また互いの間に沈黙が落ちた。夜の散歩は再開され、草を踏みしめる音と、ヒールの音だけがそこに横たわった。

家よりも田んぼが多いこの道では、街灯と街灯の間は離れている。街灯と言っても、薄暗い裸電球が笠をかぶっただけのものも多く、道はどこも薄暗い。道の端にある、ふたもされていない溝は深くはなかったが、落ちればそれなりに危ない。けれど、聖美も娘もこの道を歩くことに慣れている。懐中電灯もなしに、二人は歩く。

「疲れた？」

沈黙に耐えかねて、聖美が声をかける。娘がはっと顔を上げた。そして、笑う。

「ううん」

その気遣いの透ける仕草に、聖美はひどく悲しくなる。

「眠い？」

「まだねむくない」

「そう」

三歳に満たない子供の、妙に大人びた気遣いを、悲しい、と思う。

「眠くなったら、言ってね」

「うん。まだ、だいじょうぶ」

もこもこに着膨れた娘は、鼻歌交じりに歩き出す。聖美は心のうちでそっと語りかける。

(……ごめんね)

この淋しい田舎道を、こんな暗くて寒い夜に、幼い子供と散歩するなんて、正気の沙汰ではないと聖美自身もわかっていた。けれど。

あの、背中が。

あの背中が、無機質な携帯の画面に浮かんだ四文字が、どうしようもなく頭をよぎって、足を家に、向けさせない。

聖美は空を仰いだ。月もなく、どんよりと重い空。

夫は、子供の泣き声が嫌いだ。

それは、娘が生まれるまではわからなかったことだった。

子供が泣いたからと言って、怒り出すわけではない。暴力を振るうわけでもない。ただ、舌打ちをして眉をひそめて、ヘッドフォンをしてテレビを見始めるだけ。

そう、それだけ。

あやしてくれるわけでもなければ、泣き止んだとしてもねぎらいの言葉ひとつかけてくれるわけでもない。その癖、さも今まで待っていてやったのだから、とでも言いたげに、コーヒーを淹れてくれたの、小腹がすいたのと言うばかりだった。

「おかあさん、のどかわいた」

「うん……、じゃあ、コンビニまで、頑張ろうか」

「うん、あのね、あるけるの」

「そっか、うん、すごいねえ」

ほとんど娘が泣くことがなくなった今でさえ、ほんの少し娘が寝ぐずるだけで、夫は不機嫌になる。夫の不機嫌を感じ取る度に、聖美は焦り、苛立つ。聖美が苛立つ度に、娘の泣き声は大きくなる。

どうして、と訊ねたこともある。どうしてゆるせないの、と。もっと優しくしてあげて、と懇願したこともある。明確な返事があったことなど一度もない。

その度に喧嘩をしていた頃を、むしろ懐かしく、いとおしく聖美は思い出す。

もう、喧嘩などしない。喧嘩になど、ならない。

怒る気力はとうに消えうせて、ただ、娘と二人、夜道を散歩するのが日課になった。

泣かないように。機嫌が悪くならないように。苛立たずに済むように。

今では、疲れて眠った娘を抱えて帰っても、夫は何も言わなくなっていた。おつかれさまも、小言も、小さな要求ですらも。だから聖美も、何も言わない。

そのことに、ただただ、慣れていった。

淋しさも怒りも、僅かな苛つきでさえも磨耗して、聖美はただ、諦めた。

そうして、二人で、夜の散歩を繰り返す。

「肉まん食べちゃおうか、二人で」

「とうさんにもかう？」

「どうしようかなー」

最初から買う気などない癖に、冗談めかしてごまかして、聖美は娘の手を引く。あたたかい、小さな手を。

(いったい、なんのために)

聖美は娘と二人で小さな声で歌う。娘の好きなお散歩のテーマだった。舌足らずな娘の歌声を聴けば聴くほど、情けなくて悲しくて、空しい。

(なんのために、わたしたちは)

しずかに胸のうちで、考えた。

耳の中には、がしゃん、という音が響いている。

玄関の扉を開けるための唯一の鍵は、既に聖美の手の内にはなかった。

馬鹿なことをした。

どうしようもなく、馬鹿なことをした。

それは、聖美にもわかっている。

でも。

でも、と、言い訳をしようとすると同時に、聖美は思い出してしまう。

あの背中を。

あのメールを。

たった十数分前のこと。

外に出る準備はできていた。いつものように。

普段から荷物をつめたままのママバッグは重かった。けれど中身をつめかえている余裕もなく、そのまま左肩にそれをかけ、ぐずり始めた娘をなだめすかして、靴と、昼間、衣装ケースから出したばかりのジャンパーを着せて抱き上げた。娘ごと包むようにして、自分の肩にもショールをかけた。

それでも、寒いと感じる夜だった。

寒かったから、娘を連れて外に出るのが嫌だった。遠くまで歩くことが嫌だった。乾かしきれていない髪のまま外に出るのが嫌だった。聖美は娘を抱いて玄関で躊躇した。

イヤホンをかけた背中が、振り返らない。どんなに見つめても振り返らない。聖美は、ねえ、と声をかけた。

「ねえ、聞こえているでしょう？」

いつもなら、絶対にしないことだった。

寒いからここにいたい、いいでしょう？ その科白を用意して、嫌そうな顔をされることも覚悟して、声をかけた。

「ねえ。おとうさん」

けれど、振り向くことのない背中。

聞こえないのだろうか。

けれど、履いた靴を脱いで、その肩を叩く気にはなれなかった。

だからと言って、このまま部屋を出る気にもなれなかった。

聖美が動けずにいるうちに、娘はぐずぐずと泣き出してしまった。まだ、簡単に眠りそうにない。夫が振り向く様子もない。外に出るのも嫌で、ここにいてもいいのかと訊ねることすらできなくて、左肩にかけたママバッグが重くて、聖美は途方に暮れた。

「大丈夫。大丈夫だから」

声をかけながら、ゆらゆらと子供を抱いたまま体を揺らす。うえ、と、苦しそうにしながら、それでも泣き続ける娘の背中を、ぼんぼんと叩く。小さな声で鼻歌を歌う。夫は何も言わない。振り向かない。

このままここにいてもいいだろうか 聖美がそう思い始めたその時、メールの着信音が鳴った。いつもはバイブにしてあるはずの電話が鳴り響いたのに驚いたのか、娘の泣き声が、より大きくなる。不自由な状態で、それでも何とか携帯電話をポケットから引きずり出して、メールを開いた。それが、一番手っ取り早く音を止める方法だったから。

それは、夫からだった。

うるさい

たった四文字の。

けれど、手ひどい拒絶。

うるさい

聖美の耳は、一瞬何も聞こえなくなった。

娘の泣き声すらも。

しんとした意識の中を、その四文字だけが、夫の声で巡る。

決して激昂することのない、冷やかな声で巡る。

うるさい。うるさい。うるさい。

ざわりと胸が騒いだ。

全身を、熱いものが駆け抜けるのを、聖美は感じる。

熱い、熱いものが。

そうして、聖美はそのまま玄関を出た。娘は泣いていた。小さな体を抱えたまま、部屋に鍵をかけた。そしてその鍵を、聖美は、郵便受けに叩きつける勢いで投げ入れた。

無機質なグレーの扉についている郵便受けの中で、がしゃんと不恰好に鍵は音を立てた。

その音が、耳から離れない。

がしゃん。

大きな音がした。

あの音が、どれほど部屋の中に響くのか、聖美はよく知っている。

少し厚いだけの郵便ですら、隣の部屋の郵便受けの音ですらも驚くほどの音を立てることを、聖美はよく、知っている。夫の耳にも届いたはずだった。十分に。

それでも、なんのアクションも起こさないのなら。

(意味が、あるの?)

メールひとつ、電話ひとつ、鳴らないのなら。

聖美は考えずにはいられない。

(わたしたちは、じゃあ、なんのために)

頭の中に降ってくる言葉を、とめることができない。

もう、部屋に戻ることもできない自分の馬鹿な行動の意味を。

鳴らない電話の意味を。

「おかあさんチョコレートもたべたい」

「ちゃんと歯磨きするならね」

「えー……」

いつも通りに答えてから、歯磨きをする場所には帰れないのに、と、つきそうになるため息を、娘に気付かれないようにそっとそっと噛み殺した。

(わたしたちは、どうして)

(一緒にいるの)

(意味があるの?)

むき出しの裸電球が、じじ、と小さな音を立てた。それさえ聞き取れるほど、この道は静かだ。

「はみがきするよ」

娘の声が、彼女にとっての一大決心を告げる。

「そう。えらいね」

だから、聖美も、決めた。

決心しようと、思った。

「えらい？」

コンビニまで。

コンビニに着くまでに、何もなかったら。

「えらいよ。それならチョコレート食べても大丈夫だね」

「やったあ」

聖美の手を引いて先を急ごうとする娘に気付かれないうちに、目じりの小さな涙を拭った。

着信を見落とすことのないように、聖美は携帯電話を手の内に握った。僅かな振動でも、決して逃すことのないように。

コンビニまで辿りつくには、少しだけ大きな道路に出ることになる。

夜の道路を小さな子供を連れて歩く自分の姿が、車のドライバーたちにどんな風に見えるのか、考えるだけでつらかった。

左側の歩道を歩きながら、右手は携帯電話、左手は娘の手を握りしめる。右肩にかけた鞆が重い。それでも、聖美は微笑を絶やさないことだけ注意していた。

娘は上機嫌で、また、歌い出している。

大きな道路になった分、かえって話し声の大きさは気にする必要がなくなって、聖美は娘と一緒に歌い始めた。

明るい歌を。

娘が不安にならないように。

泣き出さないように。

そして何より、自分自身を、騙すように。

嬉しそうにコンビニを目指す娘の足の速度は衰えることはない。

(わたしたちはどうして一緒になったの)

電話は鳴らない。

追ってくる足音もしない。

見慣れた白い車も、来ない。

(どうして)

考える。問いかける。

どうして、と。

どうして迎えに来てくれないの。どうしてメールのひとつも、電話のひとつも、くれないの。どうして。どうして。どうして。

「チョコレートとね、ジュースとね」

「うん」

「にくまんもね」

「うん」

少しずつ、少しずつ近付いてくる店の明かり。

暗い夜道で、そこだけがひどく眩しい。

手を引く娘の足取りはいっそう軽くなる。

(コンビニに、着いても、)

(なんの連絡も、なかったら)

未だ鳴らない電話を強く握りしめる。

(母に、電話をしよう)

肩にかけたママバッグの中には、いつも入れたままになっている娘の着替えと、紙パンツ一枚入っている。財布もある。

携帯電話も、ここにある。

チョコレートと肉まん、飲み物を買って。

電話をしよう。

(これから行くから、と)

(ごめんね、と)

快く受け入れてくれるかどうかはわからない。

それでも。

(電話を)

右手の電話は、鳴ることがない。

駐車場にも、車はなかった。

眩しい光は、もうそこまで近付いているのに。目の前にあるのに。

コンビニの自動扉は、聖美の逡巡など知らぬとでも言いたげにずっと開く。

もう、家の扉は開かないのに。

「いらっしやいませ！」

元気な声に迎えられ、聖美はほっと息をつく。店の中の暖かさと明るさと、迎え入れてもらえることの喜びに包まれ、体が弛緩した。

電話は、鳴らなかった。

最後まで。

けれど、この場所に着いてしまったことの悲しみよりも、喜びが勝った。

勝ってしまった自分が、悲しかった。

聖美は、震える喉から深く息を吐く。

絶対に泣き出したりしない。娘に泣き顔を見せたりなんてしない。絶対に。

「チョコレート、選んでおいで」

「うん！」

お菓子売り場まで一緒に歩いた後で、聖美は微笑して、娘の手を離す。

「おかあさん、外で電話してくるから……」

「まってる！」

娘は、お菓子棚の前で座り込む。

お菓子を選ぶ時、彼女はひどく真剣だ。鼻歌交じりにひとつずつ吟味していくから、いつも時間がかかる。幸い、他に客もない。

聖美は外へ出ようとレジの前を通る。感じのいい若い男の子に小さく会釈をした時、レジ前の煙草がふと目にとまった。

懐かしさに、聖美は僅かに唇で笑む。もう何年も手に取ったことはなかったけれど、記憶の中の色や柄と全く異なるところがない。

夫が嫌ったから、聖美は煙草をやめた。

付き合い出して一番初めに、夫が聖美に頼んだことだった。

だっていつかは子供産むでしょ

だから早いうちに、やめる方がいいでしょ

そう言ったのは、あの人の方だったのに。

結婚を望んだのも。

子供を望んだのも。

あの人の方が、先だったのに……。

考えるより先に、店員にその名前を告げていた。

(もう……)

暖房の効いた店の中にあったせいか、手渡されたその箱は、少しだけ、あたたかく感じられた。

ただそれだけの優しさに、泣き出しそうになる。

(もう、来ない)

夫も、電話も、……メールひとつでさえも。

ライターとその煙草だけを買って、聖美は店を出た。

申し訳なさそうに隅の方に置かれている灰皿の元で、何年かぶりに煙草に火を点けた。

深く煙を吸い込むと、白い灰の部分が、じわじわと増えていった。

(どうして)

前の道路を走っていくテールランプと、煙草の炎と。

滲んだ視界に、赤くきらめくそれらが、美しい。

耳の中ではまだ、がしゃんと音がする。

携帯電話を、ポケットから出して見つめた。

(どうして、なにも……)

鳴らなかった電話に、聖美は心の中で話しかける。返答はない。

例え、目の前に相手がいても返答はなかつたらう、と聖美は思い直す。

かかってくることのない電話。

振り返ることのない背中。

恨み言をぶつきたい相手は、もう、自分に興味が無いのだ。

鍵を返されても、部屋に戻って来られないとわかっていても、追いもしないほど。

(わたしたちは、なんだったの……)

久々に吸った煙草のせいで、視界がゆらゆらと揺れている。

そんな風に、煙草のせいにして、聖美は、視界を滲ませる。

はらはらと、涙は、落ちた。

今だけ。

今だけだから、と、煙草のせいだから、と、聖美は誰にともなく言い訳をする。

深く、煙草の煙を吸い込んだ。

煙と共に、そして流れては消えていくテールランプと共に、感傷的な気分を消し去ろうと努力する。

煙草を吸い終えるまでの五分ほどの時間で、聖美は涙を止めた。

袖口で涙を拭いて、聖美は店の中を振り返る。

チョコレートを片手に、ジュース売り場の前に立ち、真剣に悩んでいる娘の姿を認め、聖美はふと笑う。

大きく、深呼吸する。

喉の震えを無理矢理押さえつけてから、電話をかけた。

電話の向こうから、訝しがるような響きを含んだ、けれど、懐かしく、あたたかい声がした。

「お母さん？」

なに、と答えた声に、なるべく素っ気なく、何事もなかったようなふりをして、聖美は告げる。

「これから、そっちへ行こうと思うの」

電話の向こうで、母はただ、そう、とだけ答えた。

それ以上、何も、言わなかった。

いたたまれなくなって、聖美は付け足す。

「……ごめんね……」

母は、うん、と答えただけで、何も訊ねない。

聖美はそのまま、続ける。

「夜行バスに乗る。朝には、着くから」

また、そう、とだけ、答えが返った。

どちらももう、話さない。けれど、じゃあ、と切ろうとした電話の最後の最後、聞き逃すかもしれなかったタイミングで、母が言った。

気をつけなさいね。

その言葉に、頷く声を返すことさえできない。僅かにでも口を開いたら、泣き出しそうだった。

聞こえないふりのまま、聖美は電話を切った。

携帯をポケットにしまって、聖美はまた、煙草に火を点ける。

ひとつずつ、今からやるべきことを思い浮かべる。

タクシーを呼ぶ。

そして、夜行バスの予約をする。

娘と買い物をして、出かけることを話して。

向こうに着いたら、父と母に話をして。

すべては、それから。

やらなければならないことは、たくさん、ある。

短くなった煙草を、ぎゅうと灰皿に押し付けてから、聖美は顔を上げる。

声を震わせないように深呼吸をして、涙のあとを残さないように綺麗に拭いて、また、店の中を見る。

子供用の小さなカゴに、チョコレートとジュースを入れた娘が満面の笑みで新しいお菓子を選んでいるのが見えた。こちらに気付いて、手を振る。

小さく手を振って、聖美はそれに応えた。

目の前の道路を、赤いテールランプは流れては消える。

けれどもう、それは揺らめかない。

ただ、流れて、消えていくばかりだった。

耳の中で、がしゃん、と、音がしても。

文・kakua（かくあ）

<http://m-pe.tv/u/?kakua>

なんとなく割り切れない、よくもわるくも現実的な、でも青臭い小説を書いています。

絵・damo（だも）

<http://applechair.sakura.ne.jp/circuit/>

何かすこしでもお手伝い出来ればと思い、参加しました。

作品の彩りになるような表紙になっていれば幸いです。

父と大叔父が旅の青年を化物退治に利用しようとしていた？
少年は憤りを胸に家を飛び出した！ 異世界ファンタジー



レーネ
山中の
魔物

梓寝子

Illustration 立神勇樹

秋も半ば過ぎの、ある日。少年が一人、急な山道を登っていた。

レーネン山越え道沿いに魔物が出て人を食らうという噂が、麓の町では囁かれるようになっていた。

今、少年が登っている道は山越え道の裏道で、魔物が出るといわれているあたりへと出る最短の経路である。

少年の行動の発端は、昨夜、父に就寝の挨拶をするために執務室へ行った時にある。

その時、父と大叔父が会話していた。

「確かに、町の維持のためには、街道に魔物が出てもらっては困る。とはいえ、あの青年に魔物が討てるのか？ そもそも、あれは、本当に魔道士なのか？」

「修行中の身かもしれませんが、あのフードを着けているからには、彼もれっきとした魔道士会の魔道士です。それに、魔物を討ち果たしてもらう必要はないので。魔物と出遭って、どの程度の魔物であるか分かる結果を出してくれるだけでよいのですから。討伐の方策については、それから考えればよろしいのです」

「それもそうだな。しかし、彼が魔物に出遭うという保証はあるまい」

「それについては、手立てが。魔物寄せの術をかけた物を持たせて出立させればよいのです。彼は、あの程度の者。それに気づくことはありませんまい」

それを耳にしてしまった少年は、その行為は人の道に反する行為ではないかと思った。しかしその場で、その思いを父親達に向け、口にすることができなかった。なぜならば、未だ若輩の身で町の維持に関するような政治向きのことに口を差し挟むのは、憚られることのように感じられたからである。

少年は夕刻、青年を玄関広間で見かけていた。くるくるとカールした長い髪が印象的だったのでよく覚えている。彼の装いは、一応、魔道士。背は低く、体格には不似合いなほど大きな頭陀袋を肩からかけていた。その格好はどう見ても、魔法使いの助手。ところが、背中には、魔道士会の正式な魔道士であることを示すフードがだらしなく下がっていた。

自室に下がった少年の胸には、青年を騙して利用するということに対して罪悪感が湧き上がっていた。

少年は、どうしたらよいものかと頭を悩ます。そして、青年が出発した直後に、魔物寄せのことを教ればよいのだと思い至った。

次に少年は、どうやって伝えたらいいのかとか、父上や大叔父様に気取られないようにするにはどうしたらいいのかとか、具体的な方法に考えを廻らせる。すると、興奮を催し、なかなか寝つかれなかった。そうして、やっとうとうとし、目覚めた時には日が昇っていて、青年はかなり前に出発してしまっていたのである。

少年は、青年が魔物に出遭う前に追いつこうと急ぐ。

魔物は人を食らう。よって、人が生きて行くためには魔物を倒さなければならない。そして、町には守護魔道士がいて魔物から町を護らなければ、人は安心して生きて行けない。

それは、少年にもよく分かっていた。しかしながら、町を護るために見ず知らずの旅人を危険にさらすということは、容認できなかった。その理由は以前、交易街道の宿場町の守護魔道士はその町の人々だけではなく、そこを通る旅人の安寧も護るのが務めと、町の守護魔道士である大叔父自身に教えられていたからである。

町の近辺に出没する魔物は、絶対、倒さなければならない。だが、そのために、旅人を利用していいという理由にはならない。それでも、魔物は倒さなければならない。しかし……といった、相反する思いが、少

年の胸の内でも何度も堂々巡りのように巡り続ける。

そうして、青年が魔物と出遭う前に追いつけるだろうかという不安が増大し、寝過ごしてしまったことへの後悔が疼く。

突然、少年は瘴気に襲われた。それは、魔物の瘴気だった。

少年は防御結界を張る。結界の周囲で、瘴気の渦が荒れ狂う。

少年は、幼い頃から魔道に関する才能を現していた。一族の者達からは次代の守護魔道士にと期待され、大叔父の手解きで魔法を習い始め、中級の魔法もほとんど使いこなせた。

しかし、瘴気の渦は、少年が魔物の魔力として漠と抱いていたものを遥かに超えていた。

少年は、恐怖に竦み上がる。恐怖心を必死に押さえこんで、大叔父から教えられた魔物退治の基本を思い起こす。魔物の本体を探し出して、それを撃ち砕くこと、と。

少年は印を組み、神経を集中して呪文を唱え、周囲を探查する。だが、瘴気の渦の激しさに乱され、魔物本体の気配すら探り出せない。少年は、焦りと自分の非力さを強く感じた。

少年は頭が真っ白になりそうだった。それでも奥歯を食いしばり、探查に集中する。

臆ではあったが、魔物の本体の位置を捉えた。少年はそれに向け、炸裂閃光槍を放つ。

が、しかし、炸裂閃光槍は瘴気の渦腕の一つに当たり、一瞬で消え失せた。

少年は、渦巻く瘴気の只中に投げ出されていた。全身に痺れを感じる。

いつしか、少年の総ての感覚が失せていた。そうして、意識も。

と、唐突に、少年は横から激しい衝突の痛みを襲われた。それと同時に、消え去りかけていた少年の意識が、一気にもどる。

「済みません！ 大丈夫ですか？ お怪我はありませんか？」

慌てている様子だが、どことなく間の抜けた口調の声がする。

少年の真横に、青年がいた。更に、ついさっきまであたりを覆い尽くしていた瘴気は、消え去っている。

少年は呆然として、周囲を見回す。

周りにある物は、弁当の包みと青年の頭陀袋。それに加え、その中から撥ね出たと思われる多数の物品のみだった。

「御免なさい。道を間違えた上に、路肩を踏み外し、斜面をころころと転がり、止まらなくなりまして……。それで、君にぶつかってしまいました。本当に、済みませんでした。どこか、具合が悪いところはございませんか？」

青年は少年をだきおこし、服についた土や枯れ葉を叩き落としながら、体を上から下まで、隅から隅まで、しげしげと見回す。

青年のあまりな心配ぶりに、少年は呆れる。そして、急激かつ不可解な状況変化への疑問も忘れて答えていた。

「いえ、大丈夫です」

「そうですか。よかったです」

青年は安堵の溜息をついた。それから、首を傾げて下から少年の顔を覗きこんできた。

「ところで、君……。君とは、どこかで、会ったことがあるような……」

「あ、はい。私は、麓の町の町長の息子で、カーネンと申します」

「ああ！ 昨夜お世話になった！ それで、ですね。さりながら、なにゆえ町長様の御子息様がたったお一人で、こんなところにいらっしゃるのですか？」

青年の問いに、少年はついさっき自分が陥っていた状況と、その後の激変を思い出す。

少年は印を組み呪文を唱え、改めて周囲を探查する。

探查は、左手前方に強力な邪気を捉えた。

邪気は、探查に触れた途端、増大する。

「ま、魔物が……」

「カメちゃん!? それも、海亀さん！ でも、こんな山中に、なぜ？ それも、大きな樹の股にひっかかって！ 可哀相に……。今、降ろしてあげるからね」

少年がゆびさすかたを見やった青年は、魔物へ向け歩き出す。

青年が近づくにつれ、邪気が凝集している空間に物体が現れた。

物体は、青年がいったように樹の股にひっかかっている巨大な海亀と化す。

更に青年が近寄り、樹の股へ手を伸ばした時には、巨大な海亀は、掌へ載るほどの小さな海亀へと変じていた。が、強烈な魔物の気を放ち続けている。

「そ、それは、魔物！ そんな物を……」

「魔物？ この、可愛いカメちゃんが!?」

掌の上に魔物海亀を載せた青年は、少年の方へ振り返る。

「そんな顔することないと思うんですけどねえ、僕は。このカメちゃんだって、生物の構成員。人間と同じ生き物。この世界と一緒に住んでいる仲間ですよ」

青年は掌上の魔亀へと視線を転じ、甲羅を指先で優しく撫でつつ話しかけ始めた。

青年の行いは、信じられない行為だった。使い魔ですらない野の魔物を愛玩動物のように愛撫するなどという行為は、まったく想像すらできない行為である。

少年は呆然と見やる。が、この状態をずっと続けているわけにはゆかない。

「ま、魔道士猊下……。お救い頂き……」

掌上の魔亀に向かって語りかけている青年へ、少年は声をかけた。

「はあ？ 魔道士猊下？ ……いやですねえ！ そんな呼び方しないでくださいよ」

青年は掌上に魔亀を載せたまま、少年の方へ向けもどってくる。

「申し遅れてしまいまして、僕の名前はメルといいます。それから、僕は、錬金術師ですよ」

「錬金術師!？」

少年は大きく目を剥く。

「でも、そのフードは、正式な魔道士会の魔道士であることを示す……」

少年は、青年の背に下がっているフードをさす。

「あ、これ？ これは、卒業の時にもらった……。そうか！ これが、トラブルの元だったんですね！」

青年は合点したように頷く。そして、魔亀を無造作に懐へ入れると、フードを取り外した。それからあたりを見回し、転がっていた頭陀袋を拾い上げて肩にかけると、頭陀袋の中へフードをつっこむ。

「僕は、一応、魔道士学校を卒業しているんですけど、それは、卒業したというよりも、追い出されたといった方が、正解なんですよ。何せ僕は、極簡単な魔法文字さえ読めないんですから」

青年の言葉に、少年は言葉を失った。

少年は、呆けたように青年を見つめ続けていた。が、今ここにいる理由を思い出し、ことの次第を青年へ向けて告げた。

「そうだったんですか！ そんな落ち込んだ顔しないでくださいよね！ 僕も、あの歓待は何かしら妙だなあとは、思っていたんですよ。本当に昨夜は大変御馳走になりましたからねえ。ですけど、僕って、お腹がいっぱいになればそれで幸せってたちですから。わけが分からないまま、君のお屋敷で一夜を過ごさせて頂きました。でもねえ、空腹だと何にだって、腹が立ちますよね」

青年は、肩から下がった頭陀袋の上へ向け声をかける。

頭陀袋の上には、いつの間にか、小さな海亀が乗っていた。

「ケロンちゃんも、お腹が空いていたんでしょう。こんな山中で身動き取れなくなっていたんですものね」

青年はそのまま、頭陀袋の上へ向けしゃべり続ける。

「お昼ご飯には少し早いけど、僕もお腹空きましたし、一緒に食べましょう！ ケロンちゃん。僕、お弁当、持ってるんですよ。ええっとねえ、お弁当……。どこ？ お弁当は……。あつ、あそこに！」

青年は転がっていた弁当包みを取り上げ、周りを見回して手近な大樹の根元に座りこむ。それから、海亀が乗った頭陀袋を足元に置き、手にしている弁当の包みを解いた。

「このお弁当、とっても美味しそう！ それに、沢山あるし。カーネン様も食べませんか？」

いわれて少年は、急に空腹を覚えた。考えてみれば、朝食を食べていなかったのだ。

「あの、いいんですか？」

「いいですよ！ 食事って、大勢でする方が楽しくって美味しいものですからね。特に、外でのお弁当はね！ ケロンちゃんも、そう思うでしょ？」

青年は、頭陀袋上の海亀へ同意を求める。

海亀は首を伸ばし、大きく頷いた。

「ほらほら！ ケロンちゃんもその方がいいってっていますよ」

「はい、魔道……。あ！ いや、その……。メル……様」

「そこへ座ってください、カーネン様。それから、僕のことは、メルでいいですよ。『様』なんて要らないですからね」

「あの、メル。その、私は、カーネンと……」

少年は青年の傍へと歩み寄り、腰を下ろした。

「じゃ、カーネンは、この蓋をお皿代わりにしてくださいね」

少年は、差し出された弁当の蓋を受け取る。

「で、何が食べたいですか？ どれも美味しそうですからねえ。迷いますよねえ！ まずは、パンを分けましょうかね。はい、これ」

青年はパンを大きく三つに割り、一つを蓋の上へ置く。

「これ、ケロンちゃんのね！」

青年は、もう一つを頭陀袋の上へ置く。

「で、次は……。これ！ ケロンちゃんのところは狭いから、一先ず僕のところへ置いておきますよ。食べながら、順番に出すからね。で、今度は……」

次々と分けて行く青年の様子はまるで、少年も頭陀袋上の海亀も旧知の友人とでもいうような気さくさである。

青年の親しげな雰囲気巻きこまれるように少年は、訊いていた。

「それは、さっきの魔物。魔物海亀…….ですよね？ それで、『ケロン』というのは、その魔亀の真名なのですか？」

「さっきのカメちゃんですよ。『ケロン』というのは、真名ではありません。僕が、勝手にそう呼んでいるだけです。このカメちゃんを見た途端、太古の本の挿絵で見たアーケロンを連想しまして。ですから、アーケロンのケロンちゃん、と」

少年は、青年の答えに驚く。

名付けをして捕獲したのなら、魔物の完璧な捕獲制御ということになる。それも、極短時間 魔物へと近づいて行った間という驚異的な短い時間 で、なしえたことになる。

だがその間、青年は呪文を唱えていた様子はなく、印も組んでいなかった。

更に、使い魔にした魔物を「ちゃん付け」にして呼ぶという話を聞いたことがない。

それ以上に、魔道士のローブを着た錬金術師という例など、聞いたことが無いどころか、論外だった。そして、太古の本というものも、一般的というにはほど遠い。

少年は、青年を困惑の面持ちで窺い見る。

「さっ、食べましょう。頂きます」

青年は少年の視線に気づいた様子もなく、食べ始めた。

青年の食事を促す言葉を待っていたかのように、頭陀袋上の魔亀が目の前のパンに噛りつく。

「頂きます」

一瞬遅れたが、少年も咬いて食べ始めた。

青年は黙々と食べていた。が、残りが半分ばかりになった時、問わず語りを始めた。

「僕の国ではね。長男が家を継いで、下の子は、自由に職業を選べるんですよ。それで、僕は長男ではありませんでしたので、錬金術師にしました」

「どうして、そんな変な職種を選んだんですか？ 錬金術って、禍々しい太古文明の系譜を引く、とても怖い術なんじゃない？」

「そうですね。こちらの大陸では、そういった感覚が一般的ですよ。ですが、錬金術は面白いですし、その理論は結構、役に立つんですよ。ですから、僕の国では、錬金術研究もされているんです。というか、太古の研究というべきでしょうかねえ」

「研究……。太古の……。ですか……」

食事の手を止め、少年は首を傾げる。そして、小さく溜息をつき、動かした視線の先に、頭陀袋上の魔亀が見えた。

魔亀は、青年が手に持って差し伸べている骨つき焼き肉に噛りついていた。首を引っ繰り返すように横に向け、噛みついている。

「何だか、館で飼っている猫みたいな……」

少年は微笑んでいた。

「そうですね。可愛いですよ。カーネンもケロンちゃんに何か食べさせてみます？」

青年は自分の弁当の中から、揚げ芋を一つ差し出してくる。

「あ！ えっ……。はい」

少年は受け取っていた。ためらいつつ、魔亀の顔の前へ揚げ芋を近づける。魔亀は即座に食いつき、一口で飲み下す。次いで、少年へ向けて首を上げてきた。

少年は、身をすくめる。

一方、魔亀は目を瞬かせ、鼻の穴を大きく膨らませて少年をじっと見つめてきた。

その顔に可笑しみを催し、少年は小さな鼻息音を立てて笑う。

魔亀も鼻息を小さく鳴らし、芋をつまんでいた少年の指へ鼻面から首横をすりつけて来た。

「本当に、何だか、猫と一緒にみたい。魔物のはずなのに、可愛い！」

魔亀がすり寄せてくる首筋を、少年は指でそっと撫でながら、青年を見やる。

「でしょう！ ケロンちゃんは、とっても可愛いですよね！」

「あ、あのう……。メル。その、ケロン……ちゃんの、ケロンという名前の意味……というか、由来というのか……あーけるんというのは何なんですか？」

「ケロンちゃんの元アーケロンというのは、太古の本に出ていた絵なんですよ。でね、アーケロンは、太古のそのまた太古 昔々の大昔に、存在した生物なんだそうです」

「え？ ……ええっ!？」

少年は大声を上げる。

「太古、そのまた太古……って……」

少年は口を大きく開いたまま、青年の顔を見つめる。そんな少年の様子などお構いなしに、青年は自分の話を続ける。

「僕はね、太古の錬金術関係の本を読むのが大好きだったんです。で、そんな古い文書を読んでいたある日、その中に『東の果てに、家の屋根も壁も道までもが黄金でできている黄金の国ジパングがある』という件を見つけましてね。黄金の国というものが気になりまして、色々調べ始めたんです。そうしたら、『この国は、太古の錬金術がそのまま、未だに生きているところだ』ということが書かれている本がありましてね。黄金の国というのが面白いと思っていたんですけど、今度は、それ以上に、太古そのままの錬金術といわれるものに興味が生じましてねえ！ それで、僕は、黄金の国を目指して、国を出てきたのです。でねえ……」

青年は、少年には信じ難い話を次々としゃべり続ける。

それでもいつしか、理解を超えた、煙に巻かれるような話に引きこまれ、少年はよく分からないまま、質問をしたり、感心したりしていた。

こうして、弁当が空になってからも。更に、真昼時になり、峠の尾根筋に注ぐ明るい日差しが暑くなり、少年が上着を脱いで傍に下がってきている枝にかけてからも、まだ、二人は楽しく会話を続けていた。

少年は、右手やや後方から魔力の揺らぎがやって来るように感じ、その方向を見やる。

右手の斜面下に、人の等身大くらいの魔亀がいた。それは間違いなく、小さな海亀となって頭陀袋の上にはいたはずのケロンである。

驚き、思わず立ち上がった少年の視野に、木々の向こうから弓矢でケロンを狙う人々の姿が入ってきた。

ケロンは口を大きく開き、人々へ向けて瘴気を噴き出そうとしている。

「ケロン！ 駄目だ!! 人に向けて瘴気を吹きかけちゃ、駄目っ！ 死んじゃう！ 殺しちゃ駄目っ!!」

少年はケロンに向かって駆け出す。それと同時に、少年は印を切り、呪文を唱えケロンの前方 木々

の間から弓矢を構えている人達との間へ対物障壁を張る。

「んっ!? カーネン! ケロンちゃんがどうかしましたか?」

緊迫した声と隣で起こった急な動きに、青年は立ち上がる。

青年は体の向きを急いで変えようと焦ったのか、枝にかけられていた上着へと頭をつっこむ。

体の均衡を崩した青年は頭からすっぽりと上着を被ったまま、斜面をころころ転がる。

一斉に放たれた何十本もの矢は、総て障壁に当たり、跳ね返される。

少年の制止の声に応じて攻撃を止め振り返ったケロンに、少年は安堵する。と共に、その理解力に感嘆する。

だが、少年の安堵も感嘆も束の間。右横手、山側の高いところで剣呑な魔法の気が立ち昇る。

少年が視線を振り向けた先には、ケロンへ向け炸裂閃光槍を放とうとする大叔父の姿があった。

少年が制止の声を上げる暇もなく、大叔父は炸裂閃光槍を放ち、ケロンはそちらへ振り向きざま、大きく開口して巨大な火炎球を放つ。

大叔父の放った炸裂閃光槍が、火炎球の中心へとくいこみ、炸裂する。

火炎球は、炎の竜巻のようにうねり舞い、下降風のように弾ける。

少年は息をのみ、固まってしまった。視界は、一瞬のうちに紅蓮の炎と弾け飛ぶ光の束に覆い尽くされる。

そのまっただなか。頭に上着を巻きつけたままの青年が立ち上がり、暢気な声を上げた。

「御免なさい! カーネン。また、君の服を泥だらけにしてしまいました……」

その途端、周囲を覆い尽くしていた炎と光は、立ち上がった青年を渦の求心点として吸収中和されていた。

そうしてあたりは、先程とまったく変わらない秋の山中だった。

少年は固まったまま、目線だけで青年を見やる。

少年のそんな様子にまったく気づいていないのか、完全無視なのか、青年は上着を左手でぶら下げ、右手でぱんぱんと叩きつつ、少年に向けて近寄ってくる。

「本当に御免なさいね。僕、生来の粗忽者でして……。申し訳ございません」

青年のそっかには、再び小海亀と化したケロンがついてきている。

「この上着、洗濯した方がいいみたいですねえ……。本当に、御免なさい。迷惑ばかりかけて、その上、お手数をおかけ致します」

上着を差し出し、頭を下げる青年。少年は、差し出された上着を受け取る。

「い、いえ、それは……」

少年はやっとそれだけいった。

「そ、その指輪!? ま、魔導師の印章……」

少年の背後から声がした。

少年が振り返った視線の先には、館の兵を従えた大叔父がいた。

大叔父は、何かを見つめている。

そこには、青年の頭陀袋から転がり出たままの雑多な物品と共に、指輪が転がっていた。

「ご、御貴殿は、魔導師であられたのか……。誠に御無礼を……」

「はあ!? メルが、魔導師……。魔導師って魔道士の中で最高階位の人で、魔道を学び始めてから最低でも、二十年から三十年は研鑽を積み重ねなければなれないんでしょう! それに、メルは、自分は錬金術師だと……」

再びの大叔父の言葉に少年は、傍らの青年を改めて見つめる。

「あっ、いえ！ 私は、錬金術師です！」

青年はというと、さっと足元のケロンを懐へ入れ、あたりに散乱していた荷物を掻き集める。そして、拾い上げた魔導師の印章共々、それらを無造作に頭陀袋へ詰めこみ、頭陀袋を肩へとかける。

「昨夜といい、このお弁当といい、大変御馳走になりました。ありがとうございました」

錬金術師という言葉に啞然としている町の守護魔道士に向け、青年は深々と頭を下げた。

青年は返答を待つことなく、直ぐ傍を流れている溪流へと下る。その水際へ屈みこむと、懐からケロンを取り出し、その顔を流れの方へ向け降ろした。

「ケロンちゃん、君は、海亀なんだから、海へ帰らなきゃいけませんよね。海亀は、海でないと、生きて行けないでしょう！ 寄り道しないでちゃんと海へ帰るんですよ。間違っても、今度は、山なんかへ登ったら駄目ですからね。元気でね！」

青年は、流れの中にケロンを押し出す。

流れの中からケロンは、首をもたげて青年を見やった。が、次瞬、大きく体を捻って流れの中へと潜って行った。

消えたケロンへ向け、青年は手を振り続けていた。

しばらくして青年は、振っていた手を止め、くるくるとカールした長髪をふわりと揺らして振り向いた。

「猊下。峠越え道は、こちらでよろしかったでしょうか？」

「え？ あっ！ さ、然様で……」

未だ先程来の驚愕から醒めきっていない大叔父の曖昧な返答に代わり、少年が答える。

「そこを左に真っ直ぐ行けば、レーネン峠に出ます。峠には、道標があるから、その矢印に従って行けば、迷うことはないと思いますよ」

「そうですか。ありがとうございます。さようなら！ カーネン！ とっても楽しかったです。お元気でね！」

青年は歩み去りながら、大きく手を振る。

「さようなら！ メル！ お元気で！」

少年も大きく手を振って応える。そして、青年の影が木々の中に消え去ってしまった後も見つめ続ける。そうしていると、無意識のうちに、ふっと呟いていた。

「魔物も、人と同じ生き物」

それを聞き咎めたように不審の表情を向けてくる大叔父へ、少年は、何か遠いできごとでも思い出すかのような口調でいう。

「あれは、死を覚悟する程の瘴気を放っておりまして。彼は、その瘴気の塊へ向け、何もせず、真っ直ぐに近づいて行きました。すると、そこには、魔亀が出現しておりまして。それから、ただ手を伸ばして持ち上げたんです、それを。そして、いわれました。これだって生物の構成員。人間と同じ生き物。この世界と一緒に住んでいる仲間、と。あの魔物を、愛しむように掌へ載せて、撫でてやりながら……」

「あの、魔導師殿が……」

二人は期せずして魔亀が消えて行った溪流を見やる。

魔亀の消えた溪流は、澄み切った流れに色づいた山々の紅葉を映しつつ、いつもと変わりなく瀬の音を谷間に響かせながら、駆け下っていた。

文・梓寝子（あずさ・ねこ）

小学校時代から欠席が多く、学校へ行けない日々が発生した他愛も無い妄想から生まれた「'異世界' 世界の物語」を綴っております。

絵・立神勇樹（たつかみ・いさぎ）

http://isag.sakura.ne.jp/isagi_t/

くうねるあそぶ、をモットーに、読んだり書いたりしています。小説のジャンルは、ミステリ、刑事モノ、軍モノ、ファンタジー、現代もの、近未来ものなどなど。です。

Pixiv はこちら。

<http://www.pixiv.net/member.php?id=120784>

Twitter はこちら。

http://twitter.com/intent/user?screen_name=isagi_t

身代わり令嬢の失恋

お嬢様の身代わりとして
お見合いの席に臨んだけれどメイドのジューン。
破談させるはずが、まさかの一目惚れ!?!
ラブロマンス

早瀬千夏

イラスト女将



エルダー家に奉公するハウスマイド、ジョーン・アダムスの朝は早い。

彼女は六時に起床すると午前用の仕事着である、サーモンピンクのプリントドレスを着て、丈夫な麻地のエプロンの紐を結ぶ。石炭運びや暖炉掃除で汚れてもかまわないように。

裏階段を下りて地下の石炭置き場に行くと、シャベルでバケツに黒い塊を入れた。両手で持って、ふたたび同じ階段を上がる。

二階に到着すると、ずらりと部屋が並んでいた。あるドアをそっと開ける。ここはエルダー家の次女の部屋で、ジョーンの担当のひとつだ。だから用があればいつも駆けつけるし、掃除もまかされている。

ゴム底靴の足音を立てないようにそっと入室し、細心の注意を払って暖炉の火をおこす。マッチを擦って藁に点火し、小粒の石炭を燃やす。そして大きな石炭に早く燃えうつるようふいごで風を送った。ぼうっと炎が大きくなり、石炭が赤々と熱を帯びた。

のんきに温まっているひまはない。ほかの部屋も回って火をおこさないと。

ジョーンは入ってきたときと同じように、足音をしのばせて部屋を出ようとしたのだが。

「おまちなさい、ジョーン。おまえに大切なお話がありますの」

驚き振り返ると、白い寝間着姿のお嬢さま、ライザが立っていた。長い三つ編みを垂らし、冷ややかな目でこちらを見つめている。

あたし、なにかまずいことをした？

ジョーンの心臓が激しく鼓動する。

失態を犯した覚えはないが、自分が気がつかないうちに、あるじの不興を招いてしまったのかもしれない。白い糸くずがベッドの上に落ちていたのをお嬢さまに責められ、解雇されたメイドの話聞いたことがある。ジョーンがエルダー家に奉公する少しまえのできごとだ。

「なんでございましょう、お嬢さま」

ごくりとつばを飲みこみ、ドレスの裾を広げ、かしこまったジョーンは返事をした。

「おまえ、手は汚れてないでしょうね？」

「はい」

「ねえ、これを着て欲しいの。あと、その頭のキャップも外してくれないかしら」

そう言いながらライザがクローゼットを開け、淡いピンクのドレスを放り投げた。ふわりと裾が広がり、ジョーンの腕のなかへ落ちてゆく。

「あ、あの、どうしてあたしがお嬢さまのドレスを？」

「いいから、早く試着なさい。サイズが合えば、計画を実行できますわ」

「ですから、どうして……」

「口答えせず、言うとおりになさい！」

あるじであるライザの言いつけにそむくことはできない。もし、してしまえば、解雇という最悪の道がまっている。

ジョーンは白いレースキャップとエプロンを外し、仕事着のプリントドレスを脱ぐと、おそろおそろライザのドレスに袖を通す。

背中ボタンをライザの手で留められ、三面鏡のまえに連れていかれた。

「ああ、思ったとおりね。おまえ、わたしに似てますわ。茶色の瞳と髪、それに背丈も。歳はいくつなの？」

「十八です」

「まあ、奇遇。歳もいっしょですわね。これなら、問題ありませんわ」

得心したように、ライザは満悦の笑みを浮かべていた。

しかしジョーンは納得できない。

あたし、なにをさせられるの？

心臓がばくばくして、その日の奉公のあいだ、ずっと気が気でなかった。

ジョーンはライザ令嬢の侍女として、ハムネット・パークへ同行していた。目的地を目指す馬車のなかで、お嬢さまと向かい合って座る。

がたがたと揺れる車内から、薄曇りの空が広がり、羊たちが草を食む光景が見える。のんびりとした典型的な田舎の風景だ。

牧歌的な風景を眺めるも、ジョーンはちっとも落ち着かなかった。さっきから緊張のあまり、喉がかわいてたまらない。だんだんと見たことがない森や村に入っていくうち、鼓動の音がライザに聞こえてしまうかと思うほど早くなった。

ハムネット・パークといえば、プライス准男爵一家の住まう屋敷である。郷土であるエルダー家よりも広い領地を持ち、農場も大きい。ただ歴史は浅い家系で、十九世紀初頭に爵位を買い取ったことでも知られている。

そのプライス准男爵にはひとりの息子と四人の娘がいて、娘たちみな結婚して屋敷を出ている。そして跡継ぎである長男は大学を卒業して三年目。そろそろ縁談があってもおかしくない歳だ。

「その縁談というのが、メアリお姉さまのはずだったのに、一足先に男爵さまと婚約されたの。男爵さまは貴族でしょう。それに比べて、プライス家は准男爵とはいえ平民。お父さまもお母さまも、もちろん大喜びですわ。もちろん、男爵さまと婚約のほうですわよ。社交界でうまく立ち回られていたお姉さまらしいですわ」

ブルーグレイの落ち着いたドレスを着たライザが、ほう、と青いため息をつきながら、馬車で話してくれた身代わり事情だった。

侍女として同行しているジョーンは、先週試着した淡いピンクのドレス姿である。ふつうならば、侍女が地味な衣装を選ぶのだが、「これはジョーンにやったのよ。型が古くて着られやしないわ」と、強引にライザが押し通して着せた結果だった。もちろん、エルダー家では身代わり作戦であることはふせている。怪しむ者もいなかった。

「だから今度は、妹のわたしに縁談が回ってきたのよ。でもね、プライス家って成り上がり一家でしょう。それだけならまだしも、イアン・プライス氏ってあまりいい噂をお聞きしないのよね」

「あの、もしかして遊び人とかでしょうか……」

ジョーンの率直な問いに、ライザは眉をしかめる。

「それならまだいいですわ。ひどい内気で社交界に出られないし、お母さまであるレディ・プライスがそれはもう強くて、言いなり状態だそうよ。肖像写真を送ってくださらないほど、お姿が期待できないのも非常に不安ね。でも次期准男爵ですもの、お父さまったらこんないい縁談はないっておっしゃるのよ。最悪！」

最悪、のところでライザは思いっきり、馬車の床を足で踏んだ。車内が大きく揺れた。

あるじのあまりの怒りっぷりに、ジョーンは震え上がる。

「だから、おまえにたのみたいの。イアン・プライス氏とふたりきりになったとき、思いっきり下品なことを言うてくださらない？ 百年の恋も冷めるようなのを。残念ながら、わたし、農村も下町も知らないでしょう。氏にきらわれるようなふるまいができる自信がございませんの」

ええ？ もし身代わりってことがばれたら、最悪どころじゃない展開になるんじゃないか……。

ジョーンはそう言いたかったが、相手があるじなのでぐっとのみこんだ。

「なあにそのお顔？ ふふ……別人だと知られるのが怖い、と思っているの？」

心のうちを言いあてられ、赤面せずにいられない。

「だいじょうぶですわ。最悪な印象を残して、二度とお会いしなければよろしいんですもの。氏は社交界に出られないし、もちろんわが家にいらっしゃったこともないんですもの。これからも、きっと、ね」

希望をこめた物言いが、ジョーンを不安にさせる。いくら相手が屋敷にこもっているとはいえ、大芝居を打つような真似をしてもいいのだろうか、と。

ああ、どうか、無事丸く縁談が壊れますように！

震える指で、ジョーンは祈るしかなかった。

いっぽうのライザは涼しい顔をしたまま、窓の景色を見つめている。

ジョーンの不安をよそに、だんだんとハムネット・パークの屋根が見えてきた。

どっしりと威容をたたえる白い石の階段を上がると、これまたゴシック様式を象徴する優美で繊細な花と蔦模様が彫刻されたドアがまちかまえていた。ジョーンは足の震えを感じる。

奉公しているエルダー家の正面玄関を使ったことはない。使用人がそこから屋敷に入ってしまうだけで、不注意ではすまされない罰がまっているためだ。

あ、あたしがここにいていいのかしら……。

ライザについてきて欲しかったが、彼女は今、にわか侍女になっているため、一足先に裏口からなかに入っている。たよることは不可能である。

喉のかわきを覚えながら、呼び鈴を引っ張った。

一分もしないうちにドアが重い音を立て、時代遅れのテールコート姿の男が顔を出す。

「ようこそ、いらっしゃいませ」

あらかじめライザに指示されたとおり、バッグから取り出した名刺を銀盆の上に置いた。

禿げ上がった中年男が名刺を確認する。物腰低く、ジョーンをなかへと案内する。

「ミス・エルダー。少々おまちくださいませ。奥さまに取り次いでまいります」

「は、はい……」

エルダー家より立派な玄関ホールだ。屋敷の執事にすすめられるままソファに腰かけ、ジョーンは落ち着かない数分間をすごす。

ドーム状の天井には天使の絵が描かれ、壁には絵画、マントルピースには彫刻、食器棚の陶磁器などがこれでもか、と青い顔をした客人を出迎えていた。

白地に青の模様が描かれた皿だが、たしかあれはアリタヤキといって相当高価なはず。もし掃除中に落として割ったら、給金の前借りどころじゃすまされない代物だ。扱いには細心の注意を払いなさい と、初めて居間の掃除をするまえに、メイド頭である家政婦から忠告されたのを思い出した。

それが一枚どころじゃなく、目で追って数えてみたら二十八枚もある。

とってお金持ちなのね、プライスさんのところって。

ジョーンはほう、とため息をついた。

同時にこんな思いが胸にわいてくる。

なのにライザお嬢さまったら、縁談をぶち壊すおつもりだなんて。なんてわがままなのよ。あたしたちなんてこのドレスすら給金を貯めても買えないほど、貧しいのに。内気でも不細工でも若いんだし、いいじゃない。

「おまたせいたしました、ミス・エルダー。奥さまがおまちです。こちらへどうぞ」

声をかけられたジョーンは心臓が止まりそうに驚いた。足音を立てず執事がやってきたのである。

「は、はい……」

慌てて歩き出したものだから、自分のドレスの裾を踏んでしまったことに気がつかず よろめいて床にたおれた。

「ミ、ミス・エルダー！ だいじょうぶですかっ！」

うわずった執事の声。

床に手をついた状態でたおれたため、怪我はないようだ。ゆっくりと立ち上がって、にっこりと微笑んでみせる。

「だいじょうぶですわ。おほほ……」

「ご気分がすぐれないとか？」

「いいえ。健康そのものですわ！」

と、拳をにぎって元気いっばいのポーズを作ったのだが。

「……」

目が点になっている執事。

いけない。つい反射的に！

またもジョーンはひきつった微笑でごまかすしかなかった。

頭を打ったのかと思ったのだろう、「油断はいけません。医者を呼んでまいります」と告げて、執事は玄関ホールを全速力で去っていった。

「きみ、落とし物だよ」

背後から声がして、振り返る。花の刺繍がされた赤いバッグを、青年に手渡された。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

青年は笑みを返す。

ジョーンが一瞬にして頬を染めるほど、彼は端正な顔立ちをしていた。輝く金髪に透き通るような青い瞳。だが背丈のある痩身は、薄汚れた農夫の格好で台なしになっていた。

屋敷で奉公している園丁にちがいない。ジョーンが転んだのを目撃して、ようすをうかがいにやってきたのだろう。

相手が使用人だと認識したとたん、ジョーンの緊張がゆるむ。

「あの、このお屋敷の若さまって、どんな方なんですか？ あたし、縁談とかそういうのまだ興味なくて」

園丁らしき青年は、一瞬、眉をしかめるのだが、すぐまた微笑を取りもどしつつ答えてくれた。

「おお、それはさいわいですね。ここの若さまも、まだご結婚に興味がないようすですよ。適当に世間話していれば、無事、向こうからお断りするはずです」

ジョーンの目頭が熱くなる。プライス家へ向かう道中で始まった悩みが、彼のひと言で氷解したからだ。

縁談をどう穏便にぶち壊せばいいのか、ずっとそればかり考えていた。

「ああ、よかった。よかった……。これであたしの荷が軽くなる……」

「よほどご結婚がいやなのですね。たしかにお偉いさんたちは、家柄や血筋やそういうややっこしいものからんで、結婚相手を決めるのが一般的でしょうし。あなたの気持ちもわかりますよ」

「あなた、園丁なのに、好きなひとと結婚できないの？」

「園丁？」

「ちがうの？」

「ちがう……どこるか」

青年はいったん言葉を切り、微笑んで言った。

「僕の仕事は庭いじりと野菜作りです。たしかに園丁ですよ。あなたがそうおっしゃってくれて、思い出しました。あはは」

と、陽気に笑うものだから、ジョーンもつられてちょっとだけ笑った。

「それでは、ミス・エルダー。僕はもどります。ごきげんよう」

「ええ、ごきげんよう」

軽快な足どりで青年は玄関ホールを出ていった。

庭に向かうのだろうが、正面玄関を利用するなんて、見かけによらずずうずうしい園丁である。

執事が呼んでくれた医者診察はすぐに終わり、心配顔だったレディ・プライスの表情が安堵に変わる。お茶の支度をしているから、呼ぶまで客間で休むよう言われた。

階下にいたライザも侍女として、ジョーンを見守っていたのだが、レディ・プライスが退室するなり、苦い言葉を耳打ちする。

「あまり奥さまのまえで悪目立ちしないで。エルダー家の評判が落ちてしまいますわ。あくまでもこの若さまを失望させるのが、目的ですよ」

「はい、お嬢さま」

「いい、計画を台なしにしたら、わたしが許しませんから」

「はい、お嬢さま」

「しっかりなさいな。おまえにはわたしのお気に入りのドレスを与えたのだから、その恩を忘れないで」

「はい、お嬢さま……」

ジョーンは複雑な気分になる。

いつ、あたしがドレスが欲しいなんて言ったのよ？

身代わり作戦に同意したわけでもなく、立場が弱いから仕方なく実行しているにすぎないのに。

「階下って居心地悪いわ。このわたしに気安く話しかけてくるから、無視して編み物をしているのよ。なにが『お高くとまってる』だわよ。気分が悪いっらないわ。この件がなかったら、叱り飛ばしてやるのに。さんざんな縁談ね」

厳しいまなざしを残したまま、ライザは客間を出ていった。居心地が悪い階下にもどるために。

それから五分もたたないうちに執事がやってきて、居間へ案内してくれる。

屋敷の居間は女主人の聖域とされている。くつろいで編み物や刺繍を楽しむだけでなく、大切な客人を茶会に招く部屋でもあり、居間の美しさと居心地のよさが女主人の評価につながる。

だからレディ・プライスの趣味に満たされた居間は、彼女そのものを体現しており、そこはジョーンをときめかせるほど華やかだった。

部屋のいたるところに切り花が飾られ、アネモネや薔薇の香りに包まれている。大きな窓からさんさんと日光が降りそそぎ、白で統一された家具たちが居間をいっそう明るく見せていた。ワイン色の壁にごちゃごちゃ絵画を飾っているエルダー家とは大ちがいだ。

「さあ、おかけになって」

「は、はい」

後ろで控えていた従僕が椅子を引き、ジョーンが腰掛けると、執事がお茶をカップに注いだ。

ひと口飲んだだけで、その香しさに夢心地になる。こんなおいしい紅茶、階下にいるとまず飲めない。

「ミス・エルダー。このまえお会いしたのは、何年まえだったかしら。まだあなたはとっても小さくて、ずっと家庭教師にしがみついていたのが忘れられませんわ。お姉さまはお元気？」

「ええ、元気です」

「つい先日、男爵家とのご縁が決まったとお聞きしましたわ。さぞかしおきれいになられたでしょうね。お会いできなくて残念ですわ。ごいっしょにいらっしゃればよろしかったのに」

「姉は忙しいものですから」

「縁談のお話、いやだったらお断りしてよろしいのよ。イアンったらとんだ変わり者で、当分、結婚するつもりはないって言いはるの。そんなこと主人が許さないって、わたしは説得しているのですけれど、とても強情で、手を焼いていますの」

「そうなんですか」

「ええそうよ。社交界にも一切顔を出さないし、わが家にはイアンしかいないでしょう？ だからといって無理に結婚をさせても、そのあとが問題ですわよね。うまくいかないふたりを見ているのも、耐えられないでしょうし……。あら、愚痴になってしまいましたわね。失礼あそばせ」

「はあ……」

ライザが言っていた噂は真実だったらいい。長男イアンはとんだ変わり者のようである。そのイアンに結婚願望がまったくなくて、ジョーンにはかえて幸運だ。

あの園丁さんも同じこと言ってたわね。

それにしてもイアンという御仁はとんだ、困り者らしい。毎日こんなおいしい紅茶が飲めるというのに、なにがそんなに不満なのだろう。

かえて興味をわいてきたジョーンだったが、ひどくお腹がいっぱいになった。

あまりのおいしさに立て続けに四杯も紅茶をおかわりし、タルトやスコーンを食べてばかり。奥さまとまともな会話らしい会話をしていなかった。

これはいけない、と話題をふろうとするのだが……。

あたし、このひとたちと、共通点がなにもない！

階下やメイド仕事の話ならともかく、社交界の噂なんて知りもしない。

ない知恵をしぼってようやく出た言葉がこれだった。

「あの、レディ・プライス。素敵なドレスですわね」

「まあ、お褒めいただき光栄ですわ。ミス・エルダーのドレスはもっとお似合いですわよ。このまま舞踏会へお出かけなさったら、たくさんの貴公子から、プロポーズをされるんじゃないわ。うふふ」

「うふふ……」

どう切りかえしてよいのかわからず、ひきつた笑みを浮かべるしかなかった。

そんな窮屈なお茶会に、ようやく主役が姿を現す。

「まあ、イアン。あなたどうしていつも、お客さまをたくさんおまたせするの」

「仕方ないだろう。夏場は庭の草取りで忙しいんだ」

ジョーンは息をのむ。

なぜなら、フロックコート姿で入ってきた青年紳士は、あの園丁だったからだ。

そしてあまりの失言を思い出し、顔から湯気が出そうなほど赤面するのがわかった。

「だましたつもりはなかったんだが。格好が格好だったからなあ」

「とってもお似合いですもん。わかるほうがすごいわ」

「エプロン姿でいるほうが長いから、たしかにそうだろうな」

イアンはそう言って、照れくさそうに笑った。

ジョーンはプライス家の若さまであるイアンに連れられ、屋敷の庭を散歩していた。

イアンが手入れしているという庭は、初夏の花々にあふれ、風が吹くたび新緑の木々が葉をざわめかす。さわやかな空気がふたりのあいだを駆けぬけていった。

「居間に飾る花は僕が育てているんだ。見てみるかい？」

「プライスさんが？ ええ、ぜひ！」

花々や木々が生い茂る自然庭園の小路をしばらく歩いていくと、ぱっと景色が開けた。色とりどりの薔薇が咲いている。地面だけでなく、アーチを形作った蔓薔薇が、ジョーンを出迎えた。

どこを見ても薔薇、薔薇。これだけの数を管理するのは、大変にちがいない。しかも手入れが行き届いているようで、どの薔薇も鮮やかな色をしていた。

「なんてきれい！ エルダー家の薔薇より、いきいきしてる！」

「きみのところのお屋敷の園丁が苦手なのかな」

「お野菜はたくさん作ってるわ。お花まで手が回らないって、ときどき愚痴っているのを人づてに聞いたことがあるの」

「まあたしかに、食べるのが優先なのはわかるな。人手が足りなかったら、僕もそうしていると思うよ」

「ねえ、もっと見ていいです？ 奥にあるオレンジのとかかわいい」

「もちろんだとも。あれは貴重な品種で、今年初めて大きな花をつけてくれたんだ。切り花にするには惜しいけど、僕だけ鑑賞するのももったいないって思っていたところだよ」

オレンジ色の薔薇を愛でているジョーンへ、イアンが一輪の黄色い薔薇を手折ってさし出した。振り返り、ジョーンは素直に薔薇を受け取る。

イアンの指先から血がにじんでいるのが見えた。ハサミを持っておらず、棘だらけの茎を素手で手折ったからにちがいない。

「だいじょうぶです？」

指を舐めたイアンは、苦笑する。

「刺がささったぐらいどうってことない。ここまで感激してくれたんだ、その気持ちのお返しと思ってくれたらいいさ」

「あ、ありがとうございます」

また頬が熱くなった。

こんなあたしのために……。

優しく接してくれるイアンだが、自分の正体を知ってしまえば手のひらを返すのは目に見えている。

そもそもだましているのは、この自分。

複雑な気持ちになった。

上流階級の紳士と接点のないはずのジョーンだったが、なぜかイアンだと話がはずんだ。季節折々の花だけでなく、彼は農作業のこともよく知っていた。ジョーンの実家も農家だったため、奉公するまえの話をするだけで彼は楽しんでくれる。

もちろん、自分がメイドであることはしっかりふせて。

「でね、パイを作ろうとしたら、かぼちゃが腐ってたから、母さん慌てちゃって。仕方なく、裏の庭で作っていたブロッコリーの葉っぱを煮て、パイの具にしちゃった　そうよ。それがおいしかったの。だからうちのメイドの実家は、真っ青なパイがいつも出てくるんですって。こんなのお屋敷にいたら食べることがないから、とっても興味があったの。だから話を覚えてて……」

なんとか伝聞形式にしてイアンに話すと、彼も興味を持って答えてくれる。

「へえ、それはうまそうだ。今度、料理人に話して作ってもらおうか」

「ちょっとだけベーコンとチーズを入れるのがコツなの」

「もちろん、それも伝えておこう。よかったら、今度、僕といっしょにピクニックでもどうかな」

「え？　あたしと？　とんでもないです！」

「遠慮はしなくていい。結婚願望がないのなら、しばらく個人的に会うだけでいいんだ」

ジョーンは断ることしかできなかった。

もし承諾してしまうと、ライザとの約束を破ってしまう。

「ごめんなさい」

「そう……」

気まづくなったふたりは、無言のまま屋敷にもどる道を歩いた。青と紫の矢車草の花壇までやってくる。

イアンは優しく花々を見つめ、縁談を断っている理由を教えてくれた。

「このとおり、僕はまったく紳士らしくない。社交界に興味もないし、上流階級の世界にいても落ち着かない。庭仕事をしているほうが、ずっと楽しいんだ。せっかくどこかの令嬢が嫁いできて、話が合わなくて寂しい思いをさせてしまうだろう。だからといって、身分ちがいの女性と結婚するわけにもいかない。だから独身主義を貫くのが、ささやかな僕の　」

そこで言葉が切れる。

矢車草に触れていたイアンの手が、ジョーンの手のひらを包んだ。

震えが走るほど、ジョーンはどぎまぎした。

「よかったら、また会っていただけませんか。こんなにお話がはずむとは、予想していませんでした」

「あ、あの……あたし……」

「さきほども言ったように、結婚がどうこうは考えなくてもいいです。ただ、お話をしたいだけです。それでもいいませんか？」

「……」

「それともほかに好きなひとが？」

いいえ。

と、ジョーンは答えようとしたのだが、「はい」と言うしかなかった。

「そうか。それは悪いことをしたな。僕の言ったことは忘れてください。さようなら、ミス・エルダー」

ジョーンをその場に残したまま、イアンは背を向けた。彼もひどく恥ずかしく、逃げるように駆け足で去って行ってしまふ。

ジョーンはひとりで屋敷の居間にもどったが、帰る時間になってもイアンは姿を現さなかった。

プライス家の屋敷に帰ったジョーンは、淡いピンクのドレスを脱いで仕事着に着替える。慌ただしい時間をもどってきた。

いつものように暖炉の掃除、部屋の掃除、廊下の掃除、玄関の掃除と、モップやブラシ片手に忙しく動き回る。ただちがうのは仕事の合間、ふとした瞬間にイアン・プライス氏のことを思い出すことだ。

今ごろ、どうしていらっしゃるのかしら。薔薇のお手入れね、きっと。

就寝まえ、屋根裏部屋にもどったジョーンは、薄茶色 かつて鮮やかな黄色だった薔薇をトランクから取り出しては、そっと叶わぬ恋に思いを寄せる。隠してしまうほどに、だれにも触れられて欲しくなかった。

日にちがたてば忘れてしまえると思ったのに、気持ちはつのるばかり。だれに話すこともできない。もし知られてしまえば紹介状無しで解雇されるだろう。ライザとの約束を破ってしまったのだから。薔薇はすっかり色あせ、ある日、いつものようにトランクから取り出したら、無残にも碎け散った。茶色の屑がぼろぼろと、ベッドの上に散る。

部屋をシェアしている同僚メイドが顔をしかめる。

「いいかげん、そのゴミを捨ててちょうだい。薔薇なんて庭に行けば、いつでも見られるじゃない。おかしなジョーン」

「うん……」

この恋は終わった。

ジョーンは淡い思い出の残骸をかきあつめ、涙をのんで窓の外に投げ捨てた。はらはらとゴミが散り、裏庭に落ちていった。

薔薇を捨てた翌日の午後、ジョーンはライザに呼び出された。彼女の部屋に入ると、一通の手紙を広げて見せられる。

「ねえ、おまえ。縁談を壊したんじゃないの？」

「しっかりお断りしました」

「そう？ そのわりには、熱心な手紙を届けてくださるのだけれど」

上流階級独特の流麗な筆記体だったが、ジョーンは目を凝らしてなんとか解読を試みる。

「あら、おまえ、字が読めなかったのね。いいわ、わたしが読んでさし上げる」

筆記体じゃなかったら読めたのに、と心のなかで反論するジョーンに、ライザは淡々と文書を口にした。

ミス・エルダーへ

あの話はなかったことにしたはずですが、あなたがおっしゃっていたことがどうにも納得できず、こうしてお手紙をさし上げたしだいです。

好きなひとがいるとあなたは僕におっしゃいましたが、それは真実なのでしょうか。

大変失礼ながら、僕はにわかには信じることができず、慣れない社交界に顔を出しています。

目的はもちろん、あなたが好きだという御仁を探すため。

誤解を承知で申し上げますが、決して、その御仁と話をつけるとか、そういう破廉恥な行動をするためではありません。

ただ、あなたが好きな御仁がどんな立派な紳士なのか、僕自身の目で見てみたかったのです。

そうすれば僕もあなたのことをあきらめきれると思ったから。

しかし、探せば探すほど、あなたにそれらしき御仁がいる気配がないのです。

では、あのとき僕にお断りになったのは、ただ理由をつけるためだったのでしょうか。

薔薇をさし出したとき、あれほど喜んでいたのも、ただ僕に気を使われたためでしょうか。

玄関ホールで初めてお会いしたとき、とてもそんな演技ができるご婦人だとは、思えなかったものからです。

もし、あなたのお気持ちが変わりましたならば、もう一度、僕と会ってください。

決して無理強いはいたしません。

あなたのお返事があることを、神に祈ってペンを置きます。

イアン・プライス

「……だ、そうよ。ずいぶんと、ご熱心なこと。なにかしくじったのおまえ？」

「きちんとお断りしました」

「じゃあ、なに、この手紙は！ わたしは不細工で内気な紳士と結婚なんかしたくないの！ それをおまえは泥足で踏みにじって！」

ライザの怒気にジョーンは圧倒されそうになったが、「不細工で内気」という言葉に耐えられなかった。知りもしない相手を悪く決め付けることに。

「お嬢さま、イアン・プライス氏はとても立派な御仁です。社交界が苦手なのは事実ですけど、それ以外はまったくちがいます」

「なんですって？」

ライザの目が大きくなる。俄然、興味を持ったのか、ジョーンの腕を取って揺さぶった。

「不細工じゃないって、まともなお顔なのね？」

「とてもハンサムでした。背も高かったです」

「そんな？ 信じられない！ なぜお写真をよこしてくださらなかったのかしら」

「結婚するつもりがないからだ、あたしにおっしゃいました」

「まあ、どうして？ 内気でもないようね、お手紙を読むかぎり」

「詳しい理由まで、あたしにはお話ししてくださいませんでした」

「そう、そうなの。へえ、そうだったの。だからおまえ……そうね、それだと無理がないわね。あなた、プライス氏に惚れたのね、メイドの分際で」

「……」

ジョーンはぎゅっとくちびるをかみしめ、拳をにぎった。全身を貫くような怒りと震えが走るものの、ライザが言うのが真実なのだからどうしようもない。

しょせん、メイド。

「わかったわ。報告ありがとう。そうね、作戦変更ね」

ここでライザに退室を命じられ、黙って部屋を出るしかなかった。

その夜、ジョーンは悔しさのあまり、声を殺して泣いた。同僚が気がつかないほどぐっすり眠っていたのが、不幸中のさいわいだ。

エルダー家の客間では奇妙なお茶会がもよおされていた。すでに知り合いだったはずのふたりだが、顔をあわせてみると初対面である。

招待者であるライザ・エルダー嬢は優雅な手つきでポットを持ち、客人のカップに紅茶を注ぐ。この場に召使はいない。ライザがふたりきりになりたいのだと、母であるエルダー夫人に話しておいたからだ。

にこやかな笑みを作りながら、ライザがひとりの青年紳士のまえにカップを置いた。

「ごきげんよう、ミスター・プライス。はじめまして は、不自然ですわね」

イアンは額に指をやり、記憶の糸をさくように視線を斜め上へ向ける。

「僕はあなたとお会いした覚えはないんだが。それよりライザ嬢は？」

「ここにいないのには、事情がございますの。まず、お茶を召し上がれ」

「はあ……」

落ち着かないようすで、イアンが紅茶を飲むのだが、視線をあちらこちらに動かす。まるでライザなど眼中にないかのように。

一瞬、ふたりの視線があった。ライザの頬が赤く染まる。

もし執事が給仕をしていれば、思っただろう。ライザお嬢さまは、大天使の絵画から抜け出したような、美青年紳士に一目ぼれされたにちがいない、と。

紅茶もそこそこに、痺れを切らしたイアンが早口で話を切り出した。

「ライザ嬢からお手紙をいただいて、僕はお宅へまいりました。あなたはお姉さまでしょうか。事情って、体調をくずされているとか？」

「わたしがライザよ」

「は？」

光輝く金髪のイアンは青い目をぱちぱちさせ、失笑した。

「あはは。ご冗談を。僕の家へおみえになったライザ嬢は、あなたではない。それより、ほんとうのライザ嬢はどこにいらっしゃるのです？」

「これからわたしがお話しいたしますわ。簡単なことよ。あのライザは、わたしの身代わりでしたの」

「ええ？」

またもイアンは眉根を寄せ、あぐり口を開ける。事情がのみこめないと言いたげに。

扇子を広げたライザが、ゆっくりと口もとへやりながら、悲しそうな表情を作った。

「わたし、まだ結婚する気がございませんでしたの。これから社交界というときに、すぐに将来の夫を決めたくありませんわ。だから、初めからお断りするつもりで、メイドを身代わりにやりましたの。あとからメイドにあなたさまの印象を聞いてみたら、お会いしなかったわたしがまちがっていたのだと気がついたしだいですよ。決して、ミスター・プライスのことがきらいだったわけではないことを、ご理解いただけますわよね」

ライザが言い終わるまえに、テーブルのカップが小刻みに揺れた。イアンがテーブルを両手で叩いたのである。

「理解もなにもない。僕は僕の会った、ライザ嬢と話すためにきたんだ。あなたでは、まったく話にならない！」

「あの身代わりはメイドよ。お話なんてさせるわけないでしょう」

「つべこべ言わず、そのメイドを連れてきたまえ！」

「あなた正気？ メイドよ？」

「じゃあ、言い方を変えよう。僕はライザ嬢の身代わりをした、婦人とお話をするためにここへ来た。これでいいだろう？」

「まあ、意固地なお方……」

ライザの扇子を持つ手がかすかに震え、かみしめたくちびるにはじんわりと血がにじんでいた。

「さあ、どこにいる、彼女は？」

「教えるわけございませんでしょう」

「僕が会った令嬢は、じつは替え玉でした。なんて言いわけに気分が悪くならないと思っているのかい？」

「それは謝りますわ。もちろん」

「じゃあ、彼女に会わせてくれたまえ。ならば許してやる」

「まあ……許してやるって。まるでわたしが罪を犯したみたいなことをおっしゃるのね」

「この僕をだましたのだぞ。それだけではなく、母上までも。本気で謝罪をする気があるのなら、まずきみがわが家へ出向いて頭を下げるのが、物事の道理というものだ」

「さきほども申したはずですわ。まだ結婚したくなかったの。だからメイドを使ってやりすごそうとしたんですの。それだけのことなのに、なぜそこまでお怒りになるのかしら。わたしの気持ちを汲んでくださらないの？」

「だめだ。きみとは話が合わなさすぎる」

「残念ですわね。わたしも同じことを思っていましたの」

ライザはテーブルの呼び鈴を鳴らす。執事がやってくると、「プライス氏をご帰宅なさるわ」と告げる。

「最後にひとつだけききたい。彼女はまだこの屋敷で奉公しているのか？」

「とうにひまをやりました。残念ですこと」

「そんな……」

「それでは、ごきげんよう。あなた社交界がとってもおきらいなようですし、二度と、お会いすることはございませんわね」

イアンは手袋を取ると、別れのあいさつもいまま、客間を出ていった。

客間に残ったライザは椅子から立ち上がる。イアンが使ったカップを床に乱暴に落とし、ありったけの力をこめて踏みつけた。無残に割れた陶器のかけらが、絨毯の上に散らばる。

黙って光景を見守っていた執事が、あとでそっと掃除をするも、絨毯をぬらした紅茶の染みがとれることはなかった。

ああ、イアンさま……。

屋敷の屋根裏部屋の窓から、ジョーンは愛しの青年紳士を見送っていた。窓は小さく、しかも高い位置にあったから、椅子の上に立ってようやく表が見える具合だった。

彼の乗った馬車が庭園を抜けて門を出る。だんだん見えなくなるにつれ、失望が胸をおおった。

ジョーンは思った。ライザは婚約したにちがいないと。

だが、ライザはお茶会が終わったときから、ひどく不機嫌になった。夕食まえ、世話をしている侍女を、髪のスきかたが悪い、と難癖をつけて殴ったほどだ。

階下で涙する同僚を見ていたら、プライス氏との縁談はまったくうまくいかなかったのだと察するにはじゅうぶんだった。

きっと、お嬢さまもイアンさまに恋をされたんだ。

ジョーンはあるじが失恋したことに、ほっとする。とてもではないが、祝福できる気分ではない。メイドとはいえ、ジョーンもひとりの女としての誇りがある。

だがあのずる賢いお嬢さまのことだから、失恋の痛みを自分にぶつけるのも予想できる。面倒になるまえに、さっさと転職したほうがいいに決まっている。

翌朝、ジョーンは職業紹介所へ行くために、家政婦に休暇願を出しにいった。ちょうどそのとき、配達されたばかりの電報を、従僕が家政婦室に持ってくる。

「ジョーン、あなたによ」

家政婦から手渡された電報に目を通す。母の危篤を告げる内容だった。

「早く、実家に帰りなさい」

心配顔の家政婦にそう告げられ、ジョーンは急いで屋根裏部屋で身支度を整える。トランクに身の回りのものを詰め終えると、階段を下りて裏口へ向かった。

「馬車が来ているぞ。ジョーン、おまえが呼んだのか？」

執事にそう言われ、裏庭から表へ出ると、辻馬車が一台停まっていた。

「いいえ、あたしじゃありません」

「じゃあ家政婦か。用意周到で感心するな」

分厚いマントを着込んだ御者が大声で、行き先を告げる。ジョーンの故郷の村だった。

トランクを抱えて、ジョーンは走った。馬車のドアを開け、乗りこむ。

「おまえさんとこのおっかさんが、危篤だってな。ぶっ飛ばすぜ！」

御者が大声でそう合図すると、せわしく車輪が回り出した。

「あら、わたしじゃないわ」

そのとき、裏口に駆けつけてきた家政婦が執事に言った。

馬車が動く音に混じり、ほんのわずかだったが、ジョーンの耳にはそう聞こえた。

一頭立て馬車は街道までやってきた。十字路にさしかかると、猛スピードで東へ走り始める。

郷里は北だ。御者にまちがいを報せるため、ジョーンは大声で告げた。だが、耳が遠いのか、マントに身をくると御者はジョーンの訴えもむなしく、どんどん東へ進む。とちゅう、休憩を挟むこともないまま。

さすがにジョーンも不安になってきた。

ライザが失恋した翌朝の電報、だれが呼んだかわからない辻馬車、そして行き先をはっきりと告げたにもかかわらず、べつの方角へ進む旅路。

あたし、罠にはめられたんだ！

犯人はわかりきっていた。

ひどい、ひどすぎる。

好きで、身代わり令嬢をつとめたわけじゃないのに！

だがここで泣いても、事態がよくなることはない。さいわいなことに、馬車には自分しか乗っていないし、御者さえなんとかすれば窮地を脱することができそうだ。

ジョーンはない知恵をしぼり、馬車を停めるために叫んだ。

「お願い、停めて」

御者は反応しない。

「じゃないと、ここでおしっこをするわよ。朝からずっと我慢してたんだから！」

それでも御者は無言だったが、さすがに馬車が糞尿で汚されるのは我慢がならなかったのだろう。じょじょに速度を落とし、街道を外れ、ある村のなかへ入っていく。

宿屋のまえに停まると、低い声で御者が言った。

「早くすませてこい。もし逃げたら、承知しねえぞ」

怪しまれないよう、トランクは車内に残した。ジョーンは宿屋に入るなり、おかみに助けを求める。

「助けてください。あたし、人さらいに捕まったんです！」

「とっとと出ていきな。商売のじゃまだ」

おかみが冷たく言い放ったが、ここであきらめるわけにはいかない。

ジョーンは必死に訴える。

「だったらお金は払います。貯めた給金が入っている通帳も持ってます。それでも足りなかったら、またここへもどって払いにきます！」

侮蔑のまなざしを流しながら、おかみがため息をつく。

「あんた、なんにもわかってないんだね。ここは港町に近い。荷揚げされる商品はモノだけじゃないんだよ。

で、そこの船員や港の人夫がうちのお得意さまさ。商売上がったりの噂を流されちゃ、困るんだよねえ」
「……」

たのみの綱が切れたジョーンは、呆然と立ち尽くすしかなかった。逃げようにも、この小さな村では、味方をしてくれる者などいないだろう。

そのとき耳に、時を告げる鐘の音が入った。

教会が近くにある。商売とは無縁なそこなら、もしかして……。

ジョーンは宿屋を出ると、教会へ向かった。御者が背後から叫ぶ。

「おい、逃げるな！」

「あたし、売られるんでしょ？ 遠くへ行くまえに、神さまにお祈りをしたいの」

「そうか。ばれちまったか。じゃあ、しっかり祈っとけ。逃げたらどこまでも追いかけて、ぶっ殺すからな」

身を震わせながら、ジョーンは教会のなかへ入る。小さな聖堂にはだれの姿もない。そのとき、鐘の音が止んだ。急いで鐘楼へ上がってみると、狭い螺旋階段を下男が下りてくるところだった。

「なんか用？」

まだ幼さの残る少年に、ジョーンは助けを求める。

「だったら、牧師さまに相談してみるよ」

「ありがとう！」

「でもべつの村へお出かけになっっていて、帰られるのは夕方なんだ」

「ええ、そんな……」

「ぼくはかくまうつもりはないからね。連中、怖いから、いやなんだ」

絶望感に泣き崩れるジョーンだったが、少年に背中を押されるようにして、無理やり教会を出る格好になる。

すでに御者が待機しており、ジョーンは馬車に押しこめられ

背後で鈍い殴打の音とともに、男の小さな悲鳴が聞こえる。

ジョーンが振り返ると、御者が地面にたおれていた。

「よかった。間に合った……」

鍬を握りしめたイアン・プライス氏がいた。急いで駆けつけたらしく、荒い息をついている。

なぜ、彼がここに？

そんな疑問など今はどうでもいい。

「こいつが目を覚ますまえに、馬車で逃げよう」

「ええ」

農夫の格好をしたイアンが御者台に飛び乗ると、ジョーンもすぐさま車内に入った。

馬の尻に鞭があてられる。馬車は速度をあげて、来た道を引き返していくのだった。

「初めは教えない、と言っておきながら、そのあと、ひまをやったとライザ嬢は答えた。おかしいな、と客間を出たあとで僕は思った。だから、帰宅したふりをして変装したあと、こっそりエルダー家の裏口にもどったのさ。きみがまだ屋敷にいることに賭けてね」

ジョーンはイアンとともに奪った馬車でハムネット屋敷にもどった。玄関ホールに入るなり、屋敷をしっかりと見張るよう、イアンが執事に命ずる。その後、着替えもそこそこに、居間で茶を飲む。

じつはメイドだと知らないものだから、ジョーンの待遇は令嬢そのものだ。かえってこちらが気恥ずかしくなる。

ひどく落ち着かない自分を案じたのだろう。イアンが、薔薇の咲く庭園に連れてきてくれ、ことのしだいを話し出す。

オレンジの薔薇を見つめながら、ジョーンは相づちを打ち、微笑む。本人を眼前にすると、とても恥ずかしくてたまらない。

「あたしが裏口を使うのを、まっけていてくださったんですね」

「ああ。朝、きみが青い顔をして、馬車に乗りこんだのを見た。声をかけるひまもなかったし、母親が危篤だというのもおかしいと思った。偶然にしてはできすぎているじゃないか。だから馬車のあとを追うために、屋敷の馬を失敬したというわけだ」

「プライスさん、あたしのために……。でもあたしは……」

「きみが無事でよかった。ずっと会いたかったんだ」

背後から抱きしめられる。恋が始まった日から、求めていたぬくもりがじんわりと、身体を包みこむ。

ジョーンはここで言わなくてはならない、と決意する。いつまでもごまかすことは、イアンに嘘をつき続けるのと同様だ。そんな罪深いことは許されない。

たとえこの恋が終わろうとも。

「あの、じつはあたし」

すうっと深呼吸をし、ジョーンは告白する。

「令嬢なんかじゃありません。ただのメイドなんです！」

言った。言ってしまった。

でも後悔はしていない。だってあたしは。

「知っていたよ」

「ええ？」

「初めて会ったとき、言ったろう？ 血筋とか家柄とかそういうのに縛られたくないと」

「で、でもあたしは」

「僕が社交界に顔を出さないのはね、結婚するつもりがなかったからだ。プライス家に小さな復讐をするために」

「復讐って？ ほんとうのご両親じゃないんです？」

「まあそういうところかな。僕の母親は、父の愛人だったんだ。メイドだった母と恋があったのかどうかは知らない。でも跡継ぎができないからという理由で、十二年まえ、僕はここへ連れてこられた。たくさん、母さんにお金を渡したのを見たし、今さらどうしてだ、と腹立たしかったのさ」

「そんな……」

母親がメイドだったから、自分と話が合ったのだ。社交界よりも花を育てるのが好きな理由が今わかった。

「でも、いつまでも意地を張っていても仕方がない。きみと出会って、そう思い始めた。ずっといっしょにいてくれないかな」

耳もとでそう囁かれ、ジョーンはまた顔が熱くなった。

「はい、プライスさん」

「イアンと呼んでくれたまえ」

「はい、イアンさま」

「じゃあ僕も 。ん？ ええと、あ ！」

腕を放したイアンが、決まり悪そうに頬をかく。

真顔で向かい合った相手に、ジョーンは問われた。

「きみの名前は？ まさかライザ・エルダーじゃないだろう」

「ああ、そういえば……」

ふたりはどっと笑う。大切なことをすっかり忘れていたと。

ひとしきり笑ったあと、ジョーンはあらためてあいさつをした。

「あたし、ジョーン・アダムスって言います」

「じゃあ、ジョーン。僕の妻になってくれるかい？」

「はい、イアンさま」

期待と不安が入り交じるジョーンを守るように、イアンがそっとくちびるを重ねた。

ジョーン・アダムスはいくつもの試練を乗り越え、三年後、イアン・プライスと結婚することができた。仲睦まじい若夫婦に、初めは反対していたプライス家のひとびとも、孫の誕生を迎えるころには、すっかり丸くなった。

ひまさえあれば、庭園だけでなく、菜園を手入れしている若夫婦の姿を、見かけることができる。社交界に縁のないふたりだったが、だれが見てもとても幸せそうだった。

いっぼう、ライザ・エルダーも、三年後、若くてハンサムな郷土の紳士と結婚することができた。あるメイドに裏切られたとあくまでも本人は言っているのだが、その過去が影響してしまい、つねに使用人たちを疑っていた。ささいなことで責めるものだから、使用人たちが居着かず、おべっか使いの執事とメイド数人だけが残り、ひどく居心地の悪い家庭に、夫もよりつかない。

やがて別居をするのだが、周囲の目が冷たい。自分を悲劇のヒロインに仕立てるため、夫が暴力を振るうのが原因だと嘘を言いふらすも、裁判沙汰に発展してしまう。おまけに丸めこんだはずの執事が、真実を法廷で証言してしまい、ライザは泣く泣く離婚するしかなかった。

身も心も疲れ果てて実家にもどるも、体裁が悪すぎると両親や親戚たちになじられる。三日もしないうちに辺鄙な寒村の修道院へ、尼僧として閉じこめられてしまった。

こうして彼女は神の御元で孤独な一生を過ごすことになる。

作者より。作中にて今日の場合においては一部、考慮すべきととられる語句・文章があるかもしれませんが、あくまでも当時の時代背景らしさを表現するためです。決して意図的ではない旨をご理解願います。

文・早瀬千夏（はやせ・ちなつ）

<http://green.ashrose.net/>

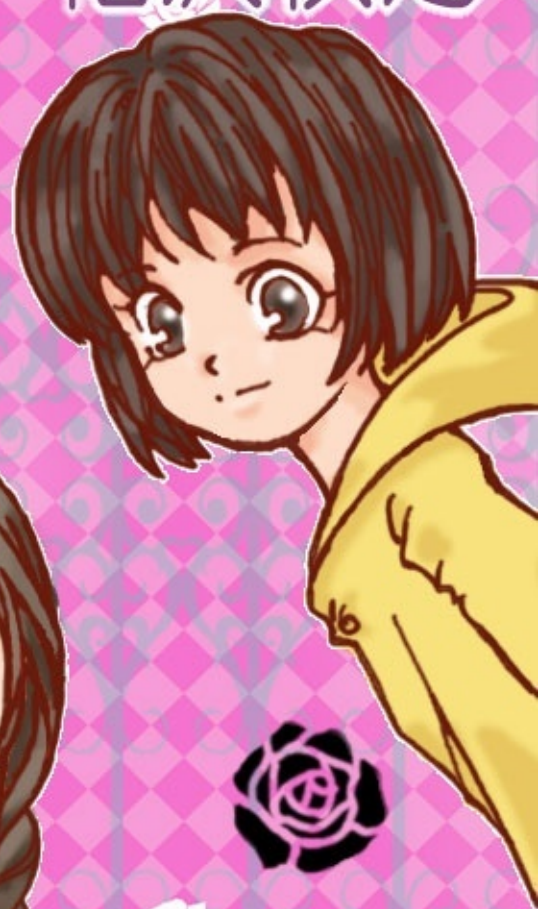
ヴィクトリア朝をメインに創作活動中。他ジャンルも時々書いています。シリアス&コメディ。日常があったり、オカルトっぽいのがあったり作風はいろいろです。

絵・女将（おかみ）

まだまだ未熟者ですので、どこまでできるか怪しいですが精一杯やりたいと思っています。どうぞよろしくお願いします！

魔女の戸棚

相沢秋乃



凍えそうな心を
抱えて帰宅した深雪。

双子の妹達が
双子の魔女に助けを
求める。

「深雪ちゃんがだいじんちゅ！」

現代青春抄

illustration あから

薔薇に囲まれた洋館には、二人の魔女が住んでいる。

それはあたしたちのことさ、と、双子の魔女は、ひひひと笑って言いました。

*

びしゃびしゃと、雨が降っていた。

傘の骨が折れているからなのか、降りしきる雨はいつの間にか、内側まで侵入してきていた。気が付くと、じっとりと袖が濡れていた。制服のスカートにもいくつものシミができていて、まだら模様になったひだひだが、重たく足にまとわり付いている。お気に入りのローファーも水が染みてしまっていて、つま先がじっとりと冷たい。白い靴下には泥のシミ。お下げにした黒い髪はべっとりとして、いつもよりもっと野暮ったく見えるに違いない。鞆もずっしり重かった。佐織とお揃いのストラップまで、しょんぼりと雨に濡れている。

はああ、とあたしはため息をついた。

なんだかもう、嫌になっちゃう。

あたしは落ち込んでいた。それはもう、どん底にまで。今日はいわゆる『厄日』というやつだったのだろう、朝から、何もかもが上手くいかなかった。朝食の時に見たテレビの占いは最悪だったし、バスがすごく混んでいて、お気に入りの傘の骨が折れてしまったし、数学の授業では当てられたし、ちゃんと解けたのに解答を間違えたし。そして。

佐織、やっぱり、怒ってるのかなあ。

もうひとつ、はああ、とため息をつく。

あたしが悪いわけじゃなくて、佐織が悪いわけでもなくて。佐織に何か嫌なことを言われたとか、そういうことでもなくて。ただ佐織のあの傷ついた表情が、あたしの心の奥底にこびりついて離れなかった。どうしてだろう、とあってしまう。どうして佐織じゃなくて、あたしなんだろう？ 野田くんの目は節穴だとしか思えない。どうしてあんなに可愛くて、気立ても良くて、心の底から野田くんのことを大好きな佐織じゃなくて、あたしなんかを選んだんだろう？ それも佐織に橋渡しを頼むなんて。生まれて初めてもらったラブレターだったけれど、嬉しいなんて思えなかった。

この手紙、預かってきた。

そう言った時の、佐織のあの、表情。

はあああ、と、止めどなくため息が漏れる。

これが真夏のよく晴れた日ならまだ良かった。ぽかぽかと暖かい春ならなお良かった。どうしてこんな冬の、寒くて冷たい雨の日なんかに、こんなことが起こるんだろう。気分はこれ以上ないほどに、今日の雨空にも負けないほどに、どんよりとした灰色だった。濡れたアスファルトに足がめり込まないのが不思議なくらい、身体が重い。

「深雪ちゃん！」

「深雪ちゃん！」

後ろからそっくり同じ二つの声が、あたしの名前を呼んだ。同時にぱしゃぱしゃと水を跳ね散らかしながら、二つの足音が駆けてくる。あたしは重いため息をついた。あれはあたしの妹の、双子の立てる物音だ。小学生の二人が帰るにはやや遅い時間だから、どこかに出かけていたのだろうか。

「おかえりー！」

「おかえりー！」

二人はあたしに激突する寸前で急ブレーキをかけて、元気いっばいの声で叫んだ。あたしはまた、ため息をついた。二人が今どのような格好をしているのか、見なくてもわかっていた。敬礼でもするように背筋を伸ばして、あたしを見上げているに違いない。

この双子を、あたしはまとめて『月夜』と呼んでいる。月子と夜子という名前の妹たちは、あたしより六つも年下で、名前のイメージとはかけ離れて騒々しい。普段は可愛いと思っても、今日は、この二人の騒々しさにつきあってあげられる気分じゃなかった。

でも、いつまでも無視してはいられない。他人のふりして逃げようにも、あいにくここから家までは一本道だし。それに既に立ち止まってしまっている。あたしはため息をついて、渋々振り返った。

「……」

傘を持ち上げて、視界を広げる。想像どおりの格好をした『月夜』の双子は、何がそんなに楽しいのか、満面の笑みを浮かべていた。

ああ、なんだか、八つ当たりをしてしまいそう。

「ただいま」

一言だけそう返事をして、あたしは再びきびすを返した。

『月夜』は全く悪くない。悪くはないのだけれど、今は顔を見たくない。

この二人はいつでもとても楽しそうで、あたしみたいにいちいちうじうじ悩んだりしないような気がする。二人はいつでも安定している。それは双子だからだろうか。頭の中を共有してでもいるかのような二人は、口に出さなくてもお互いの考えていることがわかっているんじゃないだろうか。悩みを口に出さなくてもわかってくれる相手がいるということは、この上なく心強いことに違いない。

「どうしたのー？」

「どうしたのー？」

二人はそう言って、あたしを両側から覗き込んだ。右から月子、左から夜子。口に出して相談なんて一切していなくても、二人の動きははっきり左右対称だった。

「……別に」

あたしのこの重い気持ちなんて、あんたたちにはわからない。この世にあたしの味方なんて誰もいないんじゃないか、と、ひがみっぽく思ってしまうような、こんなどろどろした重苦しい気持ちなんか。

「……」

「……」

あたしがすすすた歩いていくので、取り残された二人は黙って顔を見合わせた、のだろう。見なくたってわかる。たぶん目だけで何か相談もしただろう。

二人は何も言わないまま、再びあたしの両側に、同じタイミングで追いついた。

「何か悩みがあるんなら」

「魔女に助けてもらえばいいよ」

ひとつのフレーズを交互に言って、ねー、と言うように顔を見合わせる。あたしはため息をついた。もう何度目のため息かだなんて、数えたくもない。

魔女って？ と、普段のあたしなら、会話につきあってあげたはず。何しろあたしはひとりしかいないとはいえ、『月夜』より六つも年上なのだ。双子はあたしにとって宝物みたいに可愛い妹だ。時折手を焼かされるけれど、二人がいなくなることなんて考えることもできないくらいに、大切な、妹。

なのに、今日は。あたしは黙ってため息をついただけだった。二人は更に駆け寄ってきて、あたしの返

事がないことになんて一切構わず、そのさえずるような声を続けた。

「魔女は何でもできるんだよ」

「たまに、ちょっと、いじわるだけど」

「先に話してきてあげる」

「何でも解決してくれるんだよ」

え、と声を上げた時には、双子は盛大な足音を立てて、走り去っていくところだった。そっくり同じ、黄色の小さな傘と、黄色いレインコートと、黄色の長靴。灰色の景色の中に咲いたタンポポみたいにそこだけが明るい、そっくり同じ二つの背中も、止める間もなく走っていった。つんのめりそうな勢いで、みるみる小さくなっていく。

「……ちょっと、待って」

あたしはその背中を見送りながら、ひとり呟いた。魔女って。魔女って、まさか。

嫌な予感を肯定するように、二人は正面に見えている、雨に濡れた洋館の玄関に向かっていた。広い庭に続く階段を駆け上がって、凝った造りの門を体当たりするようにして開けて、二人の小さな背中が中に消える。あたしは口を開けて、そして閉じた。ちょっと、待って。冗談じゃない。魔女って、魔女って、まさか！

「たっだいまー！」

「おばあちゃん！」

「深雪ちゃんがー！」

「大ぴーんち！」

そう叫ぶ声は途中で途切れた。どうやら玄関の扉が遅ればせながら閉じたらしい。キィキィと鳴る門を見つめて、あたしは絶望的なため息をついた。ああ、もう。ああ、もう！

「何が魔女よ……」

しゃがみ込むか、逃げ出すか、少し迷った。

でも逃げるわけにはいかなかった。

だって、あそこはあたしの家なんだから。

*

薔薇に囲まれた洋館には、二人の魔女が住んでいる。

それはあたしたちのことさ、と、双子の魔女は、ひひひと笑って言いました。

*

あたしがもっと幼い頃……そう、今の双子と同じくらいに、幼かった頃のことだ。

あの頃の庭にも、今と同じように、たくさんの薔薇が植えられていた。今は冬だから咲いていないけれ

ど、薔薇の季節になればそりゃあ見事な大輪の薔薇が咲き誇るのだ。二階から見ると、庭中に薔薇色の絨毯が敷かれているように見えるくらいだ。ツタの生えた古ぼけた洋館と、植えられたたくさんの薔薇、そしてそっくりな双子のおばあさんとくれば、子供たちの間でいろいろな伝説が囁かれてもおかしくはない。あたしは幼い頃、自分の祖母たちが魔女だと信じて疑わなかった。友達もみんなそう言ったし、何しろ当の本人たちが、公言してはばからなかったのだ。

小さな子供に聞かれると、二人は悪戯っぽい笑みを浮かべて、その子の顔を覗き込む。

そうさ、よく知ってるね。

あたしたちは、魔女なんだよ。

甘いお菓子をあげようか。

綺麗な薔薇をあげようか。

いい子にすれば、いい魔法。

でもね、忘れちゃいけないよ。

暗くなっても帰らなかったり。

お母さんの言うことを、聞かなかったり。

悪口を言ったり、わがまを言ったり。

そういう悪い子を見つけたら。

そこで二人はそっくり同じ顔を見合わせて、そっくり同じ顔でにと笑って、子供を更に覗き込んで、こう言うのだ。

悪い子には、悪い魔法をね。

「馬鹿馬鹿しい……」

あたしはため息をついた。とっくの昔に、自分の祖母たちが、魔女なんかじゃないことはわかっている。だってあたしが子供の頃、二階の窓から、竹箒に乗って飛び降りた時にも、おばあちゃんたちは助けてなんかくれなかったのだ。お伽話にあるような不思議な魔法、あたしを綺麗なお姫様にしてくれたり、カボチャを馬車に変えてくれたり、なんて。そんなこと一切してくれなかった。あれはあたしを含めた近所の子供たちを『いい子』にしておくための方便で、ご近所の若いお母さんたちは、それを歓迎していたふしがある。夜なかなか寝なかったりする子は、よく脅かされたらしい。いい子にしてないと、双子のおばあちゃんたちに懲らしめてもらうんだから、なんて。効き目のほどは推して知るべし、だ。

魔女なんて、いないのだ。

悩みを解決してくれる魔女なんて、いないんだ。

あたしはのろのろと足を進めた。寒いし、冷たいし、早く暖かな家の中に入りたいけど。でも、あの双子たちの中に入るのは気が重い。そっくり同じ顔、そっくり同じ声、そっくり同じ仕草の人間が二人。それも、二セット。今は誰にも会いたくない気分なのに、倍の倍、疲れそうな気がする。

昔は。おばあちゃんたちを魔女だと信じて疑わなかった頃には、何か嫌なことがあるとすぐに、おばあ

ちゃんたちのところへ走っていったものだった。あたしは、おばあちゃんたちを何でもできるスーパーマンみたいに思っていた。おばあちゃんたちに解決できない問題なんて何もなかった。友達と喧嘩したりして、どん底の気分だった時にも、おばあちゃんたちに慰めてもらって、あの戸棚を開いてもらえば、すぐに憂鬱を忘れることができた。

戸棚。

そう、あの戸棚。暖炉のすぐ脇にある、白くペンキの塗られた、あの家と同じくらいに古い戸棚には、おばあちゃんたちの許しなしには手を触れてはいけないことになっている。子供の頃、あの戸棚は文字どおり、魔法の戸棚だった。あそこには、およそ小さな女の子の望み得る、ありとあらゆるものが入っていた。色とりどりの綺麗なボタン、ぴかぴか光るおはじき、ビロードのはぎれ、面白い本、美味しいお菓子、手触りのいい千代紙。おばあちゃんたちは遊ぶのがとっても上手で、お裁縫も上手で、あたしの小さな人形に、それはそれは素敵なドレスをいくつも作ってくれたものだった。

いつの間にあたしは、あの戸棚を開けてくれって、せがまなくなったんだろう。

いつの間にあたしは、おばあちゃんたちを全能の存在だと、信じられなくなったんだろう？

のろのろと歩いている内に、いつしか、家のすぐ前までたどり着いていた。たどり着いて、しまった。あたしは半開きになったままの門を見つめて、またひとつ、大きくため息をついた。

*

玄関の扉は、油を差されたばかりで、音もなく静かに開いた。

ただいまを言う気力もなく、あたしは黙って中に入り、黙って扉を閉めて、黙って靴を脱いだ。玄関は湿気に濡れて外と変わらないくらいに寒く、陰鬱な気分には拍車をかける。おまけに夕闇が迫ってきていた。ただでさえ灰色に曇って暗い空気が次第にその密度を増し始めて、漏れてくる居間の明かりがあたしを阻害しているような気分になる。

濡れて重くなった靴が、ごとん、と音を立てる。

脱いだ靴をしばし眺めて、あたしはため息をついた。

新聞紙、詰めておかなきゃ。

そう思うのは簡単だけど、今は、そのとおりに体を動かすのがとても億劫だった。どうでもいいや、とってしまう。濡れた体を拭く気にもなれない。このままベッドに潜り込んで寝てしまおうかな。そういうのをふて寝って言うのかな。でもこんな濡れた格好のままで眠ったら、余計に寒くなりそうだと、ぼんやりと考えていた時、唐突にぱちりと明かりがついた。

「帰ってたのかい」

座り込んだあたしの上に、柔らかな声が降ってくる。

あたしは眩しさに目をぱちぱちさせて、声のした方を振り仰いだ。そこには桜おばあちゃんが立っていた。あたしたちの祖母は二人いる。そっくり同じ顔で、そっくり同じ仕草で、そっくり同じ声の二人の、魔女。

桜おばあちゃんはあたしをまじまじと見た。あたしは反射的に首をすくめた。おばあちゃんたちは優しいが、躰にはとても厳しい。ただいまを言わずにいたら、叱られるに違いない。

「あ」

「おかえり」

あたしの言葉を遮るようにして、桜おばあちゃんの後ろから、梅おばあちゃんが顔を出した。『月夜』の姿は、どこにも見えない。

「なんて格好だい」

「濡れネズミじゃないか」

二人は口々にそう言って、さあさあ、とあたしの手を取って立ち上がらせた。おばあちゃんたちの指先は、あたしの冷えた手が痛むほどに温かい。

あたしはたじろいだ。でもおばあちゃんたちは、一切構わなかった。

「お風呂入れておいたから」

「とにかく温まるんだね」

「おやつも作っておいたから」

「温まったら、出ておいで」

「ゆっくり百まで数えるんだよ」

「数えるまで、出てくるんじゃないよ」

「早口言葉でごまかしちゃいけないよ」

さあさあ、さあさあ。

抵抗する間もない内に、お風呂場まで連れていかれてしまう。脱衣所に追いやられるように入り込んだあたしは、かすれた声で抗った。

「あの、」

「話は後！」

ぴしりと二人の言葉が重なる。

「着替えは持ってきてあげるから」

「とにかくあんたは入りなさい」

こういう時の二人には、抵抗したって無駄なのだ。

あたしははい、と呟いて、のろのろと服を脱ぎ始めた。佐織が哀しんでいるのに、佐織が野田くんをどんなに好きか知ってるのに、佐織を哀しませる原因になってしまったあたしが、のんびりお風呂に入って、温まったりしていいんだろうか。

またため息をひとつ、吐き出そうとして、ふと気づいた。

脱衣所の向こう、台所の方では、ほかほかするような、甘くて優しい匂いがしている。

*

おばあちゃんたちに逆らえないことを言い訳にして、あたしはお風呂の中で、ゆっくり百まで数えた。子供の頃はお湯が熱くてたまらなくて、十文字の早口言葉を十個数えて時間を早めたものだけど、大きくなったあたしはお湯の熱さを我慢できるようになったし、今日のお湯は熱すぎもせず、ぬるすぎもせず、楽に数えることができたのだ。ゆっくり温まって出てくると、清潔な着替えがちゃんと用意されていた。そして何と、上下揃ったスウェットは、手に取ると温かった。ストーブの前で温めておいたものを、あたしが出るの見計らって脱衣所に移しておいてくれたらしい。体をよく拭いて、ほかほかの服を身に着けると、

現金なことに少し元気が出てきてしまった。そして情けないことに空腹であることにも気づいた。なんてこと。あたしの体ったら、嫌になるほど健康だ。

「あがったら、こっちにおいで」

「おやつ準備ができていますから」

「おねえちゃん」

「お腹すいたよー」

桜・梅、月・夜の双子たちの声が、台所から口々に投げられる。あたしはどんな顔をして出ていけばいいのかちょっと悩んだが、意を決してえいっと戸を開けた。台所はほんわりと暖かく、そして明るかった。全てがきちんと整えられて、清潔で、正しい感じがする。

と、両脇からがしっと腕を掴まれた。

見下ろすと、物陰に隠れていた『月夜』が姿を見せて、あたしの両腕を両脇から掴んでいる。二人はにんまりと小悪魔的な笑顔を見せて、あたしを下から覗き込んだ。

「深雪ちゃん」

「今日のおやつは何だと思う？」

「当ててみてー」

「当ててみてー」

さあさあ、と急ぎ立てられて、あたしは台所の向こうにある、居間の方に連れていかれた。当ててみて、と、言われても。あたしはふんふんと匂いを嗅いだ。甘くて、優しい、いい匂いがする。この匂いは……

「わっかケーキ」

言う『月夜』はあたしのお腹の前にそれぞれの手を伸ばして、ぱちんと打ち合わせた。

「あたりー」

「あたりー」

二人の声が綺麗にハモる。

「でもそれだけじゃないんだよ」

「今日のおやつは特別なんだよ」

「あたしも手伝ったんだから」

「あたしも手伝ったんだから」

そして二人は、ねー、と顔を見合わせる。いつでも楽しそうでいいなあ、と思う気持ちは、さっきの雨の中で思ったひがみっぽい気分とは全く違っていた。双子の妹の楽しそうな様子が、あたしの気持ちまで明るくしてくれるみたいだ。

たどり着いた居間の一番大きなソファにぼすんと座らされた。目の前に置かれたガラスのテーブルの中央には、繊細な模様のレースがきちんと敷かれている。

「月子、これ取りに来て」

「はーい、おばあちゃん」

「夜子、これを深雪に渡しておくれ」

「はーい、おばあちゃん」

四人が口々に言い交わし、『月夜』が離れていく。あたしは自分ひとりだけ座っていることに普段とは違う居心地の悪さと、同じくらいの嬉しさを感じていた。今日はなんだか知らないけれど、『お客様扱い』されている。このような扱いをされるのは、誕生日の時だけなのに。

むき出しの足が冷えないように、お行儀が悪いとは思いつつもソファの上に持ち上げて両手で包んだ。体育座りをしている体勢になる。と、正面に、おばあちゃんたちの、あの、大きな戸棚が見えた。

あたしはその戸棚をじっと見つめた。普段から見慣れているからか、昔ほどの魅力を感じなくなったからなのか、いつもは空気のように目が素通りしてしまうのに、今日に限って目に入ったのは、さっき『月夜』に言われた『魔女』という言葉が懐かしかったからだろうか。白いペンキを丁寧に塗られた戸棚は、昔と変わらぬたたずまいで、どっしりと落ち着いて、そこにあった。

あの戸棚の中には、今は何が入ってるんだろう。

『月夜』は、あの戸棚を開けて、って、おばあちゃんたちにせがむことはあるんだろうか。

あたしはしばらく、ぼんやりと戸棚を見ていた。脳裏に湧き上がってくるのは、あの戸棚から出してもらったもので、いろいろなものを作った記憶だ。折り紙と、はさみと、のりと、ペンだけで作れる簡単な人形。おばあちゃんたちが作るととても可愛くなるのに、小さなあたしに作れたものは、泣きたくなるほど不格好な、ちっとも可愛くないただの紙切れに過ぎなかった。思わずべそをかいたあたしに、桜おばあちゃんは優しく言った。

『大丈夫、ちゃんと可愛くしてあげる』

そしておばあちゃんがあたしの人形にしたことは、本当に魔法だった。

はさみでちょっと切っただけにしか見えなかったのに、できたよ、と渡された人形は、信じられないくらい可愛くなっていったのだ。思わず目を見開いたあたしに、梅おばあちゃんが横からくれたのは、千代紙でできたたくさんの服。サイズも測ったみたいにぴったりで、あたしは歓声を上げた。それからずいぶん長い間、あの人形はあたしの宝物だった。おばあちゃんたちの作った二人の人形を友達にして、あたしの人形は空想で行けた限りの、たくさんの世界で遊んだ。

「どこ、行ったんだっけ……」

いつの間にか、遊ばなくなった。最後に見たのもいつだったか、はっきりとは思い出せない。最後には三人ともぼろぼろになっていたのは、確かなんだけど。

「おまちどおさまー」

「深雪ちゃん、これはいてー」

『月夜』の明るい声で我に返る。月子はあたしの目の前にケーキを置いていた。そして夜子はいつの間にかすぐ隣に来ていて、あたしの靴下を差し出していた。どっしりしたわかケーキはとても美味しそうで、粉砂糖がかかっていた。そしてオレンジ色の靴下は、もこもこで、とても暖かそうだった。

「ありがとう」

そう言って、あたしは冷えてきた足に靴下を履いた。「どういたしましてー」と明るく答えた夜子は、軽やかな足音を響かせて、台所に戻っていく。

靴下を履き終えて視線を戻したあたしは、月子がじっとあたしを見ているのに気づいた。

「深雪ちゃん」

月子はソファの横に座り込んだ体勢で、にっ、と笑った。

「魔女って、すごいでしょう」

「え……？」

聞き返した時には、月子はぱっと立ち上がって、夜子の後を追うように、台所に戻っていく。取り残されたあたしは今言われたことについて考えた。魔女って？　すごいって？　……何が？

「さあさあ、お茶にしようかね」

お盆を捧げた桜おばあちゃんが、ゆっくりと入ってくる。『月夜』は手ぶらで戻って来、あたしの不審な面もちを見て、左右対称の笑顔を見せた。

「少し元気が出たみたいだね」

「さっきはなんだか死にそうだったよ」

お茶の準備を着々と進めながら、おばあちゃんたちが口々に言った。あたしの目の前に、優美な形のカップがそっと置かれた。あたしは驚いた。これはおばあちゃんたちが大切にしている、年代物の茶器の一揃いだ。ややクリームがかかった地に鮮やかな深紅の花弁の散ったカップと、お揃いのソーサー。金色の縁取りがしてあって、形もとても華奢で、お客様がいらした時にしか使わない、はずなのに。

驚く間にも、その貴婦人のようなカップに、いい色と美味しそうな匂いの紅茶がなみなみと注がれる。あたしの一番好きな、アールグレイだ。昔読んだ本には、アールグレイはホットに向かないと書いてあったけれど、あたしは温かいアールグレイが一番好きだ。色も綺麗だし、香りがいい。あたしはなんだかうっとりした。ふんわり漂う芳香が頬の辺りをそっとくすぐる。

「お姉ちゃん、ケーキ、見て」

「今日のケーキは特別なんだよ」

『月夜』が嬉しそうに左右から言ってくる。あたしはそれで、自分が『お誕生日席』に座っているのにも気づいた。気づいたが、何も言わなかった。あんなに落ち込んでいたはずなのに、お風呂に入って、特別扱いされて、高級な茶器で一番好きなお茶を飲めて、美味しいケーキが食べられる……というだけのことで、悩みを忘れていたことに気づいたから。

そんな自分が、恥ずかしかったから。

「特別って……？」

恥ずかしさと後ろめたさを隠してあたしは訊ねた。佐織のあの傷ついた表情を無意識の内に思い出そうとしていた。あの時に感じた罪悪感を、こんな簡単なことで忘れてしまうことは、とてもひどいことのように思えたからだ。

でも。

あたしは『月夜』の言葉に興味を惹かれて、わっかケーキに目をやった。

わっかケーキは焼き上がりかわっかの形になっていることから、我が家でつけられた通称だ。五つに切られたケーキの内、一番大きな一切れがあたしの目の前に置かれている。こんがりときつね色に焼かれたケーキはふんわりと甘い香りを放っていて、上に振りかけられた粉砂糖の白さが眩しい。

ああ、でも。

ケーキを見るだけで嬉しくなってしまう、あたしは浅ましい人間だろうか。

と、そこへ、梅おばあちゃんが白くぼってり丸い形の器を手にして身を乗り出した。

「深雪、まだ食べないで」

「ちょっと手をどけてごらん」

桜おばあちゃんに言われて手をどけたあたしのケーキの脇に、梅おばあちゃんがスプーンで、白いふんわりしたクリームをこんもりと盛りつけた。あたしは目を見開いた。生クリームだ。信じられない。

あたしの目はたぶん輝いたのだろう。なんて正直なあたしの目。でも嬉しい。わっかケーキには生クリームが本当によく合うのだけれど、普段はこんなことは絶対はないのだ。ああ、でも、とあたしは混乱した。高校生にもなるとカロリーが気になるようになるわけで。太っちゃう。どうしよう。

「魔法、かけておいたから！」

「食べたらきっと元気が出るよ！」

口々に叫ぶ『月夜』は、心底楽しそうな顔をしている。思わず目を上げると、桜おばあちゃんも梅おばあちゃんもくすくす笑っている。その笑顔は、あたしが子供だった頃、魔女だということを肯定して笑った、あの時の笑顔と同じだ。

「深雪、お食べ」

「そしたらきっと、明るい気分になれるからね」

二人に促されてフォークを手に取りながら、あたしは聞かずにはいられなかった。

「魔法……？」

「そうだよ」

「あんたは信じないかもしれないけど」

「魔法なんて、誰にでも、簡単にかけられるんだよ」

おばあちゃんは口々にそう言って、自分のフォークを取り上げた。『月夜』は既にケーキに取りかかっている、口の周りが 二人はいつもケーキを食べるとそうになってしまうのだけど クリームでべたべたになっている。それを見て苦笑しながら、おばあちゃんたちはこう言った。

「寒い時にはお風呂に入って温まるとか」

「紅茶を、普段とは違うカップで飲んでみるとか」

「ケーキにクリームを添えてみるとか」

「お客様用のソファに座ってみるとか」

「髪にリボンを結んでみるとか」

「シャツにアイロンをかけてみるとか」

「お気に入りの服を着てみるとか」

「部屋の掃除をしてみるとか」

二人は口々にそう言って、同時に紅茶をこくりと飲んだ。

そして左右対称の笑みを見せる。

「……魔法なんて、誰にでも、簡単にかけられるんだよ」

空を飛ぶだけが魔法じゃない。病気を治すのだけが魔法じゃない。誰かに呪いをかけるのだけを、魔法と呼ぶんじゃないんだよ。

そう言ったのはどちらだったのか、あたしにはわからなかった。もしかしたら頭の中に直接響いてきたのかもしれない。あたしがそのことについて考えている内に、再び、二人の言葉が聞こえてきた。

「人間は心と体、両方揃ってできてるんだから」

「体が元気になれば、心も元気になるもんさ」

「そうして、魔女っていうのは」

二人はそこで言葉を切って、あたしを覗き込んで、ひひひ、と笑う。

「そういうことをよく知ってる人間のことを言うんだよ」

「おかわりー！」

『月夜』の元気な叫び声が聞こえる。おばあちゃんたちは苦笑して、だめだめ、と言った。

「晩御飯を入れるお腹を残しておいで」

「今夜のおかずはコロッケだよ」

「おおー！」

「やったー！」

『月夜』は顔を見合わせて、ぱちんと両手を打ち合わせる。本当に楽しそうだと、思いながら、あたしは

いつしか微笑んでいた。あたしの顔を見て、おばあちゃんたちは嬉しそうに笑った。その嬉しそうな様子に、あたしもいっそう嬉しくなる。

確かに魔女なのかもしれないな、と、あたしは思う。

確かに、おばあちゃんたちは、あたしに魔法をかけてくれたのかもしれない。

だってほら、もうずいぶん長いこと、ため息をついてない。ため息しか出てこないくらい空っぽだったさっきまでのあたしに、温かいもの、美味しいもの、優しい気持ちをいっぱい詰めてくれるおばあちゃんたちは、確かに『いい魔女』だ。きっと。

「さ、お食べ」

「美味しいよ」

二人に促され、あたしは手にしていたフォークをわっかケーキに突き刺した。

ケーキはとても、優しい味がした。

* * *

次の日の朝、出かける準備をするのには、少しだけ勇気が要った。

でも、大丈夫だと自分に言い聞かせた。佐織はあたしが野田くんのことを好きじゃないことはよく知っている。あたしにはどうしようもないことだということが一番よく知ってるのは、佐織だ。そして佐織は理不尽な仕打ちをする人じゃないのだ。

それに、あたしには、魔女のくれたお守りがついている。

鞆には、小さな薄っぺらの人形が入っている。おかっぱ頭の、おばあちゃんのはさみによって信じられないくらい可愛らしくなった、あたしが作ったあの人形だ。

どこに行ったかわからなくなっていた紙の人形。駄目でもともと、行方を訊ねてみたら、おばあちゃんたちは顔を見合わせて笑って、そしてあの白い戸棚から、取り出してきてくれたのだ。それもちゃんと三人揃っていた。おまけに破れかけていたところは、ちょっと見ただけじゃわからないくらいに治されていた。同じ形に切った紙を裏からぴったり貼り付けてあって、薄汚れてはいたけれど、昔と変わらずにそこにあった。

あたしはそれを栞にして、教科書に挟んでおいた。

ひとつ、佐織にあげようかな、と思うと、何となく嬉しくなってくる。昔話と一緒にプレゼントしたら、きっと面白がってくれると思うのだ。そして今度家に遊びに来た時には、おばあちゃんたちに頼んで、あの戸棚を開けてもらって、一緒に服を作ろう。

「行ってきます」

あたしは鞆とお弁当を持って、家を出る。

今日の空は、とてもよく晴れていた。

文・相沢秋乃（あいざわ・あきの）

<http://akitaro.moo.jp/>

子育ての合間に小説を書くのが何よりの楽しみです。サイトでは長編異世界ファンタジーがメイン。よろしくをお願いします。

絵・あから

<http://www16.ocn.ne.jp/~ukatsu/gauss/index.html>

あからと申します。

未熟な絵師ですが、参加させていただきありがとうございました。

「神話」に深く魅入られた男が辿る数奇な運命

——それは、人が足を踏み入れてはならない世界——

怪奇幻想譚

孤島に潜む影

紅侘助

紅下侘助

Ph'nglui mglw'nafh Gthulhu R'lyeh wgah'nagl fhtagn

虚構が現実を凌駕する。あるいは、作り事であるはずのものが現実世界を侵食していく。実際にはあり得ないそういったことが、確かに存在すると思うのです。

きっかけはネットサーフィンでした。H・P・Lを始祖とする『神話』群を扱ったサイトを渡り歩いているうちに、とあるファンサイトに辿り着いたのです。

そこには『神話』に関するありとあらゆる項目が整然と纏められており、「クロニクル」あるいは「エンサイクロペディア」とも言うべき様相を呈していました。

研究書を上梓したり論文を纏めたりする専門性はなくとも、その世界に強い関心を持つ私は、時が過ぎるのも忘れ画面に見入っていました。

それに気付いたのは、ほんの些細なことからでした。

ブラウザの画面サイズを変更しようとマウスを滑らせた時です。テキストも画像も何もない部分を白い矢印が横切る短い間に、一瞬だけポインタが指の形に変わり元に戻ったのです。隠しリンクだとピンと来ました。私は管理人の仕掛けた悪戯に応じるため慎重に画面を探り、ポインタを合わせると迷わずクリックしました。

なんと、飛んだ先にあったのは、

Miskatonic University

という文字列。

どうやら『神話』群に度々登場する大学のデータベースログイン画面の様です。正直半信半疑でした。サイトの管理人が凝った仕掛けを施しているのかと思いました。ファンサイトにはよくある「お遊び」です。私はそれを管理人の挑戦と受け止め、何とかログインしてやろうとIDとパスワードを探り始めました。

Dyer

Wilmarth

Shrwsbury

大学の歴代教授の名前や生没年、あるいは様々な禁断の書名や神格、はたまた知られている呪文の一節などを思いつくまま入力していくと、ある組み合わせによってログインすることに成功しました。

中を覗いて驚愕しました。決して一ファンの「お遊び」などではなかったのです。そこには大学がこれまで行ってきた『神話』に関するありとあらゆる業績が詰め込まれていました。一九三〇～三一年の南極探検や一九三五年のオーストラリアの遺跡調査などの詳細な記録や写真、論文の数々。中には国家機関が作成する公文書の体裁をとったものもあります。個人の作り物にしてはあまりにも出来過ぎている。私は翻訳サイトの力を借りながら、内容を具に読み込みました。

読み進めるうちに信じられないものに出くわしました。戦後しばらくして大学の遺跡調査隊が日本をも訪れていたという記録を発見したのです。

場所を具体的に示すことは避けますが、そこには、

此処ヨリ遙カ彼方ノ東海ニ樂園在リ

という伝承が今も生きる地域にある、小さな島でした。この島は大戦後のアメリカ占領時下、米軍により徹底的にマラリアの根絶が図られた史実がありますが、どうやら大学の調査隊はその作戦に同行して島に上陸を果たしていた様なのです。

この島には現在、本土からは中継地まで飛行機で三時間、乗り継ぎ便で一時間、さらに定期船を使えば十分で行くことが出来ます。観光地としても有名な島です。

H・P・Lが描いた『神話』において本邦が登場することはありません。しかし、この調査記録は、微に

入り細に入り、現実に存在する島の歴史的事実や地理的状况とあまりにも合致していたのです。

深く『神話』世界に魅せられた者としての血が騒ぎました。「実際に遺跡を目にしたい」と強く思いました。私はデータベースから遺跡に至る詳細な地図や資料をプリントアウトすると、旅行の手筈を整え機上の人となりました。

今思えば、この時の私は、邪なる神の御使いにして様々な名前を持つ「無貌のもの」の謀略に捉えられてしまっていたのかも知れません。

かつて多くの人間が、興味本位から禁断の知識に手を出して破滅させられたのと同じ様な罠に。

島に上陸し、宿を定めると、私は早速レンタルカヌーの手配をしました。山中にある遺跡までは、整備された道などありません。大半の行程は、川を遡ることではか辿り着けないのです。食料や水、コンパス、テントなど装備を固め、カヌー業者を通じて入山届を提出すると、私は地図に示された河口からカヌーを漕ぎ出しました。

生憎と引き潮の時間帯と重なっていたためか、カヌーはなかなか上流に進んでくれません。慣れないパドル捌きもそれに輪を掛け、油断するとついさっきまでいた場所に押し戻されてしまいます。結局、予定の行程を三時間もオーバーして当初の目的地である上陸地点に辿り着きました。

ここからは密林を徒歩で行かなければなりません。慎重に地図とコンパスを照らし合わせてルートを定めると、沢伝いにアタックを開始します。この時程、自分のメタボリックな身体を呪ったことはありません。バックパックと体重分の質量を重力に逆らわせて押し上げなければなりません。さらに足場の悪さも疲労に拍車を掛けます。冬場で動きは鈍っていますが、ブッシュには毒蛇も潜んでいるため、うっかりしたことは出来ません。

苔生したガレ場を乗り越え、数時間掛けて亀の歩みを進めると、ふいに風景が変わります。干上がった砂岩の平原です。本来ならば豊かな清水の流れる川の底なのです。

ここで突然アクシデントに見舞われました。いきなり篠突く雨に襲われたのです。見る見る足元に水が広がります。危険な状況です。砂岩の河床は、濡れると大変滑りやすくなります。重ねてあちこちにポットホールがあり、足を踏み込むと大怪我の怖れもあります。水の流れに足を掬われバランスを崩せば一溜まりもありません。

仕方なく岸辺に上がり、急遽手近にあった頑丈そうな岩棚の下で雨を凌ぐことにします。頭の上を滝の様な雨水が流れていきます。雨はなかなか止みませんでした。遺跡ポイントまではあと僅かの距離なのですが、ここで大きく足止めを喰らってしまいました。

日が落ちる前に移動を完了し、ビバークの準備をしなければなりません。南国とはいえ、高地の夜は冷え込みます。山を侮ることは出来ません。雨脚が弱まるタイミングを見計らって、私は思いきって最終目的地を目指すことにしました。

慎重に足を進め、何とかブッシュに入り込み遺跡ポイントを目指します。日は刻一刻と傾いていきます。地図上の距離はほんの数ミリであるのに、無限の時間が過ぎ去る様に感じました。

突然、視界が開けます。自然石を用いてはいますが、明らかに人工的な石組みが目に入り込みました。

その瞬間の気持ちは言葉で言い表すことが出来ません。

これまでの苦労など、なにもかも吹き飛ばしてしまいました。達成感が全身に広がります。しかし、余韻にひたっている時間はありません。私は安全そうな場所を見定め、テントの設営に入りました。

探索の足場を固め終える頃には、日はすっかり傾いていました。暗くなってからの移動は危険を伴いますが、念のためヘッドランプを灯し、ほんの少しだけ付近を散策することにしました。

持参した資料に導かれるままに進んだ私を迎えたのは、古びた石像の群れでした。異国風の人物像は、祈りを捧げる様な、あるいは不安に戦く様な表情を浮かべています。ひょっとすると邪神に対する供儀を表しているのかも知れません。海亀をモチーフとした石像は祭壇らしきものを取り囲む様に無数に配置されています。特筆すべきは、祭壇を守護するかの様に佇む、『神話』に登場する「深海に潜むもの」らしき像です。私は夢中で携帯電話に備え付けられたカメラのシャッターを切りました。最新鋭の機種ではないので防水やGPSといった高度な機能は備えていませんが、証拠画像を撮るには申し分ありません。

遅くなる前にテントに戻ろうとした時、物音が聞こえました。島には熊はいませんが、野生の猪が生息しています。出くわすと厄介です。様子を窺っていると、物音は次第にこちらに近付いてきます。

ふいにあり得ない感覚に囚われます。

海から離れた山中にいるにもかかわらず、強烈な潮の香りが漂ってきたのです。それとともに、ピシャリ……ピシャリといった音と、クフウシュルウグオオウ……といった、くぐもった音が聞こえます。

私が携帯電話をジップ付きのポリ袋に放り込み、ポケットにねじ込んでその場を離れようと踵を返したその時です。突然両脇から強い力で腕を掴まれました。水掻きとかぎ爪のあるヌラヌラとした手が、私を捕らえたのです。

ヘッドランプに照らし出されたその姿は、まさに「奴ら」そのものでした。私は声一つ上げることが出来ませんでした。まさかこんな所で実際に遭遇するなどとは思ってもよらなかったのです。「奴ら」は私を軽々と横倒しにし、地面に押さえつけます。その間にも辺りに一つまた一つと「奴ら」の気配が増えていきます。

「奴ら」は口々に何事か囁き、呼び合っていました。決して我々が使用する言語の文字にすることは出来ない、唸る様な、喘ぐ様な、獣とも人間とも付かぬ声が辺りに飛び交います。「ううふううんごぐるるういえ……」「もうごろううなっはううなふうう……」「こおほとうるるうう……」微かに聞き覚えのある文言に思えました。『神話』の中でも有名な連句の一節に思えたのです。

このままでは何をされるか分からない。「奴ら」の力を弱めると言われる、本物の「旧き印」など持ち合わせていないのです。生命の危険を感じ、私は必死に声を張り上げました。「ルルイエ・ウガフナグル・フタゲン！」

声は震えていました。それでも何度か叫ぶうち、私を押さえつけるかぎ爪と水掻きを備えた手の力が弱まるのを感じました。「奴ら」は明らかに動揺している様でした。やがて「奴ら」は「ろろういひいえへええ……」「ほううとあごおおんん……」と声を上げ出します。私は一か八かの思いでさらに「ルルイエ！ フタゲン！」と力強く叫びました。「奴ら」の粘液まみれの手が、少しずつ私の身体から離れます。

そこかしこから連句を詠唱する唸り声が上がりました。間違いありません。「あの」連句です。声は南洋の底に沈む古代都市とそこに眠る「外なる者」を讃え、輪唱の様に辺りに響き渡ります。罅の様な、押し寄せては引く波の様な音声の渦に翻弄されるうち、私は次第に自分の意識が変化していくのを感じました。理性では今すぐにでもここから逃げ出さねばと分かっているのですが、感情はいつまでもこの詠唱を聴いていたいと訴えています。これが、我々人間ではなく、本来唱えるべき存在が唱える言葉の力なので

しょうか。

陶然とする私の目の前に一つの影が迫りました。ヘッドランプの明かりに照らし出されたのは、「奴ら」の中でも少々異質な一体の貌でした。魚の様な眼をし、両生類的な顔つきですが、大多数に比べれば明らかに人間に近い形態をしています。

「奴」は私にぎこちないながらも日本語で話しかけてきました。「なかま……おまえ、なかま……か」私は咄嗟に頷きました。奴は醜く貌を歪め、口の端をつり上げ「微笑み」ました。「こい……ついて、あとに」奴は私を立ち上がらせると、私の肩に腕を回しどこかへ連れて行こうとします。私の理性は戦慄しながらも、身体は彼の言葉に従っていました。

祭壇の背後に回り、ブッシュを掻き分けて進むと程なくして泉の様な所に辿り着きました。濃密な海の匂いが鼻を突きます。山中に漂う潮の匂いの源はこの泉の様です。「奴」は泉の畔まで私を誘うと「いこう……るるいえ……ともに」と囁きます。泉は海まで続いているとでも言うのでしょうか。私は思わず「潜れない。無理だ」と主張しましたが、「奴」は意に介さない様子です。

「奴」はどこから取り出したのか木の椀を私に差し出しました。「のめ……これで、へいき」私は言われるまま椀を受け取り、口を近付けました。かつて嗅いだことのない様な強烈な異臭がします。一瞬躊躇したものの、私は思いきって液体を飲み干しました。この世のものとは思えない臭気とは裏腹に、味は淡水の様に全くの無味でした。

突然「奴」が私を抱え、泉に飛び込みました。私の身体は強い力で見る見る深みへと引き込まれていきます。溺れてしまう、と思ったのも束の間、私は何故か水中で普通に呼吸が出来ることに気付きました。どうやら先程飲まされた秘薬の影響のようです。周りを見回すと、ヘッドランプの明かりに照らされた大勢の「奴ら」が泉の底にある洞穴を目指す姿が映ります。水中にもかかわらず視界がぼやけないのも、きっと秘薬のお蔭なのでしょう。「我々」は洞穴に入り込み、遙か彼方を目指し始めました。

何時間潜行していたかは分かりません。気が付けば洞穴の出口らしき場所に辿り着きました。円形の視界の彼方に、なにやら巨大な影が垣間見えます。奇妙な角度で連結する巨石群が林立しています。ユークリッド幾何学を無視した、人間の作り得るものとは全く異なっている造形です。かの「古き存在」が仮の眠りを貪る「墓所」のある太古の都市なのでしょう。

私はもっと近付いてよく見ようと身をくねらせました。しかし、その瞬間、今まで何の問題もなかった私の身体が、空気を求めて悲鳴を上げ始めたのです。秘薬の効果が切れかかっている。私は絶叫しました。それを聞きつけ、「奴」が私の身体を支え、上へ上へと誘います。巨大な石柱群は次第に眼下に遠ざかっていきます。苦しさで残念さで私は身悶えました。

水面に上がるとほぼ同時に秘薬の効き目は切れてしまったようです。私は喘いで酸素を貪りました。激しく呼吸を繰り返していると、目の前の海面に「奴」が貌を覗かせました。「ざんねんだな……また……かえってこい」そう言うと「奴」は再び海中に姿を消しました。

一人残された私は波間に漂っていました。遠く島影が月の明かりに浮かび上がります。私は長袖シャツの前裾をズボンから引っ張り出し、海面で身を躍らせてシャツの中に空気を取り込み膨らませると、簡易のライフジャケットを作りました。取り敢えず潮の流れに身を任せるしかありません。

ふと、妻の顔が頭をよぎりました。こんな所でくたばったら、何と言って叱られるだろうか。私は苦笑しました。心の中でそっと詫言いました。

次に頭に浮かんだのは、両親のことでした。先立つ不孝を詫言ること無しに別れるのは寂しく思われました。ポケットを探ると防水のためにジップ付きのポリ袋に入れた携帯電話は無事でした。ひよっとする

と誰かがメールを見て救援を送ってくれるかもしれない。私は震える指でボタンを操作しましたが、現在地がはっきりしないため、無駄だろうと思い至り、すぐに諦めて止めてしまいました。

幸いなことに潮流は島に向かって流れている様でした。お蔭で私は夜明けには島の海岸に流れ着くことが出来ました。

これが私の南の島で経験した出来事の顛末です。無事生還できたのは運が良かったと言うほかありません。

ただ一つ気になるのは、自宅に戻ってから咳が止まらないことです。

声を出そうとしても喘ぐ様な声しか出せません。それに関係するのかは分かりませんが、このところ耳の下側が大きく膨らんできているのです。おたふく風邪は子供の頃にやっているので、免疫はあるはずで、熱も痛みもありません。ただ顔つきが日に日に変化していく様なのです。今朝は目覚めると枕にごっそりと抜けた髪の毛の束が絡まっていました。強いストレスのせいでしょうか。

何だか喉が渇きます。思いっきり塩辛い水が飲みたくて仕方がないのです。水道水など飲めたものではありません。塩水でないと渇きが収まらないのです。今はどこかの海辺に行き、波打ち際に顔を漬けて思いっきり海水を飲み干したい気分です。

久遠に伏したるもの死する事なく、怪異なる永劫の内には死すら終焉を迎えん

H・P・L

了

文/写真・紅侘助(くれない・わびすけ)

因州浪人の戯作屋にてしがたい掌篇書きにて候。主として怪談を指向するも、お馬鹿話からファンタジーまで、筆の向くまま気の向くままに。

twitter

<http://twitter.com/#!/beniwabisuke>

フォルトナは きみに微笑む

- For / tuna in Dice-Kingdom -



楽山やくら

illustration 重森まさみ

人々の生き死にも。
異色ファンタジー
ゲームの世界も。
すべてがゲームの世界から
なってきた。

[1] 城の外

右手にダイス。

左手に薬。

そうしていつも、わたしは振っていた。

コロコロと転がるダイスは、とまった数字を確認したとたん、消え失せる。

残るのは、冷たい結果だけ。毎日わたしの目に焼きつく、【0】の数字。

「ごめんね、おじいちゃん。わたし、今日もお薬をあげられないの……」

もう涙も出なかった。

日に日に弱ってゆくおじいちゃんを見ても。

それでも微笑む、おじいちゃんを見ても。

泣けなかった。

「トナ……運命を、恨むんじゃないぞ」

そう言い残し、とうとう死んでしまった、おじいちゃんを見ても。

わたしは、泣けなかった。

ただ哀しみと、なにもできなかった悔しさと 憎しみが、募るだけで。

だからわたしは、旅に出た。

もう一度 泣くために。

「なんてきれいな空なの……！」

ガタゴトと荷馬車に揺られながら、青く澄み渡った空を見あげた。わたしがどんな想いを抱えていても、瞳に映る空は変わらずに、はるか高みからわたしを見守ってくれている。

今は、そんなあたりまえのことがなんだかうれしい。

(まるでおじいちゃんみたいね)

普通の人ならきっと、ここで「フォルトナさまみたい」なんて思うのだろうけれど、わたしにはとても無理だった。なぜなら、わたしが普通じゃないからだ。

普通の人なら、思いつくはずがない。自分でもそう思うようなことを、これからやろうとしている。

「おや、どうしたんだい？ お嬢ちゃん。ひとりで含み笑いなんかして」

不意に、となりで綱を操るおじさんに指摘され、口もとがゆるんでいたことに初めて気づくわたし。そんなつもりはなかったのに、まるで悪巧みでもしていたみたいだと、今度は声に出して笑う。

「わたし、うれしいんです。都会って、わたしが想像していた以上に、とってもきれいでにぎやかな場所なんですもの！」

ごまかすための言葉でも、内容は本心だ。

藁を運ぶ荷馬車に乗せてもらい、生まれ育った田舎を出て初めてやってきたこの都会。聞きかじった噂話

から、あれこれと勝手に想像をめぐらせていたけれど、実物はそれよりもはるかにすばらしいものだった。

きちんと整備された道路の両側には立派な建物が並び、大勢の人々が行き交っている。

「都会は初めてなのかい？ それじゃあ人の多さに驚いただろう」

わたしの反応が面白かったのか、おじさんも笑いながら訊いてくる。

「ええ！ この通りを歩く人だけでも、こんなにいるなんて……わたしが住んでいた村の住人全員合わせても、全然足りないくらいだわ」

「まあしかし、その分悪い人も多いからね。お嬢ちゃんみたいに可愛い子は、攫われないように気をつけな
いといけないよ」

「え……やっぱり本当に、そういうことがあるんですか？」

おじさんの脅しのような言葉に、わたしは眉をひそめて横を見た そのときだった。

「わ……っ!？」

急に強い風が吹き、頭の上の麦藁帽子を飛ばされそうになったのだ。さいわい、あごにゴムをかけていたおかげで大丈夫だったけれど。

(飛ばされたら、困るのだわ)

この麦藁帽子は、おじいちゃんが亡くなる前に編んでくれたもの。目が悪くなってよく見えなくても、震える指先をとめることができなくても。わたしを強い日差しから守るために、一生懸命つくってくれたのだ。

絶対に失くしたくはないと、両手を帽子に残したまま、警戒してあたりを見まわすわたし。

その様子を見たおじさんは、目を細めて笑った。

「ハハ。ここいらは特に風が強いからな、そんなツバの広い帽子じゃあ大変だろう？」

「ええ、ゴムがあっても怖いわ。押さえつけても身体ごと飛ばされそうなもの。都会はどうしてこんなに風が強いのか？」

そのせいで、おじさんが言ったように、ツバの広い帽子をかぶりにくくなっているのだ。道行くたくさん
の着飾った女性たちを見ても、わたしのようにツバの広い帽子をかぶっている人はひとりもいなかった。

(わたし、とても場違いだわ)

思わず心のなかでつぶやいた。

着飾れない田舎娘のわたしは、せめてこの鼻ぺちな田舎顔だけでも隠そうという気持ちもあって、この帽子をかぶってきたのに。それで逆に目立ってしまうなんて……。

ただ、だからって帽子を脱ぐ度胸もないのが、わたしが田舎娘な証拠なのかもしれない。

おじさんは、そんなわたしの揺れる乙女心になんて気づかず、問いの答えだけをくれる。

「都会は と言うよりも、問題はこのあたりの地形にあるのさ。実はこの道の先に、高い山があってね。その山の存在と、山から海へ向かってゆるやかに傾斜していることが、この強風の原因らしいんだ」

言われてみれば、今通っている道もゆるやかなのぼりになっているようだった。

おじさんは続ける。

「特にここは風の通り道になっていて、建物で挟まれた道路を人だけでなく風も歩くというわけだ。 いや、歩くというより走るといったほうがいいかな」

「まあ……じゃあこれは、風の団体さんなのね！」

わたしは思わず手を叩く。

風は掴めない。だから寄せ集めるなんて、一見不可能なことのようには思えるけれど、こうやって通り道を限定してしまえば、風をうまく集めることができるのだ。

わたしにはそれが、なんだかとってもすてきなことのようには思えた。見えないものを、手も触れずに動か

す魔法みたいで。

「ハハ、まあそういうことだ。 おっと」

そんな会話のあいだにも、強い風が吹きつけてくる。前で荷馬車を牽く馬たちも、心なしか走りにくそうだった。わたしだって、本当なら目を見開いてもっと景色を見たいのに すてきだけれど、やっぱりこの風は強すぎると、わたしはひとり苦笑した。それから風を避けるようにして、顔を動かす。

すると目に入ったのは、後ろに積んである藁だ。飛ばされないよう大きな布をかぶせ縄でとめてあるのに、それでも隙間から抜け出した藁の一部が、風に乗って飛んでいた。そして、この風を生み出している景色のなかに、スッと溶けこんでゆく。

わたしはおじさんに気づかれぬよう、こっそりと肩をすくめた。

(嫌だわ。場違いなのは、わたしだけじゃないみたい)

藁を運ぶ荷馬車とこの景色は、まるで合っていないのだ。

「おじさん、この藁はなにに使うの？」

ふと気になって尋ねると、となりで巧みに綱を操るおじさんは、小さく苦笑する。

「燃やして動力にするのさ。燃えるものならなんでもいいが、藁がいちばん安いからね」

「そっか……すぐ灰になっちゃうのね」

おじさんが苦笑した理由がわかって、わたしは切なくなった。どんなに心をこめてつくっても、一瞬にして燃えてしまう命なのだ。

(まるで、運命、みたいだわ)

ダイスの決める一瞬で、命を奪われたおじいちゃんのことを思い出す。どうしても逆らえなかった、自分の弱さを思い出す。

ダイスの結果は、絶対だ。従わない者は、その後の運命を全部捨てたと見なされ、その人が存在した事実ごと世界から消されると、言われている。だから、あとにはなにも残らないのだ。あのときもし、そんなふうにならないうちにわたしが消えてしまっていたら、おじいちゃんを看病することもできなかつたらう。

(だから、わたしは)

ひざの上の両手を、ぎゅっと握りしめる。

「……おじいちゃん……」

運命を恨むなと言った。

でもそれは 無理だ。

「え？ なにか言ったかい？」

つぶやいたわたしの声は、風に邪魔されおじさんには届かなかったようだ。心配させまいと、わたしは首を左右に振る。

「ううん、なんでもないの。それより、お城が近づいてきたわ」

遠くからでもとんがった頭は見えていたのだけれど、今はもう少し、首まで見えている。

「そうだな。わしは途中から城とは別の方向に行くんだ。降りるかどうか、ダイスを振ってみなさい」

「はい」

わたしがそう返事をした瞬間、右手に現れるダイス。【0】と【1】しかないそれは、わたしがまだ子どもな証拠だった。【0】は『否定』、【1】は『肯定』。わたしは出た目に、従わなければならない。

右手を傾けて、ダイスを宙に放つ。わたしの足もとにコロコロと転がった、それは

「【1】よ」

つまり『降りろ』という合図だった。

「こっちは【6】だ。えーっと……」

おじさんも同じように自分のダイスを転がしていたようで、右手で綱を操る一方、左手では『運命手帖』を開いていた。【1】から【6】までのダイスと運命手帖は、おじさんが大人な証拠だ。ダイスが六面以上になると、もう『否定』『肯定』だけでは判断できなくなるから、ダイスから【0】が消える。そして、ダイスと一緒に詳しい内容が書かれた手帖が現れるようになるのだ。

その手帖に書かれている内容を確認しようと、おじさんは前を見ながら手帖も見る。荷馬車は変わらず前に進んでいるから、交互に、素早く。そして何度も。

その様子がとってもおかしくて、わたしはこらえきれずに肩を揺らした。

「こら、笑うな。えーっと、【6】は……『その角でトナちゃんを降ろす』だな」

「あら、よかった」

「本当にな。【1】でも出ていたら、わし自身が『悪い人』になるところだった」

にやりと笑ったおじさんが気になって、わたしはその先を問いかけてみる。

「【1】は……なんだったの？」

「『トナちゃんを降ろさず連れて帰る』」

「まあ！」

それでは完全に誘拐犯だ。わたしのダイスで【1】が出た以上、『降りようとするわたしを降ろさない』という展開になってしまうのだから。

ふたりして、声を立てて笑った。

そうしてひとしきり笑ったあと、

「まああれだ、やっぱり運命ってのは、それなりにうまくできているもんだな」

おじさんが告げた言葉に、顔ではまだ笑いながらも、ズキンと心が痛んだ。

「……うん、そうなのかわ」

今は、そんな答えしか持てない。ここまで楽しく送ってくれたおじさんの、機嫌を損ねるようなことは言いたくないから。

ダイスによって定められた『角』まで来ると、わたしは馬車からピョンと飛び降りた。それから何度もお礼を言って頭をさげ、走り去る荷馬車の後ろ姿に手を振り、次に現れるのは 手のなかの、ダイス。

ごく自然になにかをするときには必要ない。

頭をさげるとか、手を振るとか、無意識のうちにとってしまう行動は自由だ。

けれど「しよう」と思うと、それは現れる。

振らなければどこへも進めない。

なにもできない。

それは、運命を決めるもの。

わたしは地面に投げつけた。

少し弾みながら転がったそれは、小さな石ころにぶつかってとまる。

【1】だ。

「お城に、行かなきゃ……」

つぶやいたわたしは、顔をあげ前を向いた。

消えたダイスなんか、確認してあげない。

わたしはわたしの意思でお城に行くのだと、歩き出す一步一步に自然と力がこもる。

お城で悠々と暮らしているだろうダイス・キングに、一瞬でも早くわたしの怒りを聞かせたかった。

気がつくのと、走り出していた。

このダイス・キングダムには、国を動かしているダイス・キングがいる。逆に言えば、ダイス・キングがいるからこそ、ダイス・キングダムと呼ばれているのだろう。

わたしはそのダイス・キングにひとつの『お願い』を伝えるために、お城を目指していた。そのためだけに、たったひとりで田舎からやってきた。

その願いとは

「ダイスによって運命を決めるという仕組みを、やめてほしい」

そんな、切望。

(だって、ダイスなんかで行動を決められていなければ、おじいちゃんに薬をあげることも、自由にできたのに)

そしてもし、一度でも与えることができたら、おじいちゃんはこんなにも早く死ななかったかもしれない。

恨まないなんて、無理だ。いくら大好きなおじいちゃんの言うことでも、聞けない。わたしはダイスも運命も 運命の女神・フォルトナも憎かった。

「おまえの名前は、フォルトナさまから取ったんだよ」

そう言われても、今はうれしくない。

その女神さまが、どんなに美人でも。

人に慕われていても。

わたしにとっては

(でも、ダイス・キングならなんとかしてくれるかもしれないわ！)

それが、おじいちゃんを失ってひとりぼっちになったわたしの、唯一の希望だった。

そもそも運命を決めているのは、ダイス・キングではなくフォルトナさまなのだ。そのふたりにどんな縁があるのかはわからないけれど、ダイス・キングがフォルトナさまと手を切ってくれさえしたら。ダイスで運命を決められることも、なくなるかもしれない。

そうしたらダイス・キングはダイス・キングでなくなってしまうけれど……『王』に変わりはないのだから、きっと国はそのまま動いてゆけるだろう。平和なまま、もっと幸せに暮らせるだろう。

わたしはそう思っていた。

お城のなかでどんなことが起こっているのか 知りもせずに。

室内は、闇に覆われている。

自分の部屋にいるとき、私は何も見ないし、何もしないから、それで問題なかった。理由もなく灯りをつけるなど、燃料が勿体なくて出来ない。

部屋の最奥、更に暗い場所で椅子に腰掛け、私は目を瞑っていた。だが、寝ているのではない。ただ、時間が過ぎるのを、待っている。

「 トゥエン、今日も食べないのか? 」

ふと、遠くから人の声が聞こえた。すっかり聞き慣れた距離と台詞。それがくぐもった音なのは、分厚い扉を挟んでいるからだ。

「 食べないよ 」

いつもの事だから反射的に、私は大きめの音量で返した。そうしなければ、向こうまで届かない。

そして、声を掛けて来た相手であるユールも、いつも通り大袈裟なため息を吐く。扉越しでもそれがわかるくらいだ、余程盛大に吐いたのだろう。

(そのまま酸欠で倒れてしまえばいいのに)

と物騒な事を考える私を余所に、ユールは『いつも通り』を続ける。

「 ダイスを振るからな。 【 1 】 だ。入るぞ 」

前置きをしてから、鍵のない扉を開けた。

それは私にとって、許しがたい侵入だ。男が女の部屋に押し入る事自体がそもそも信じられないし、相手が大嫌いなユールというだけで、吐き気がする。

「 フォルトナ! 」

だから私は、ユールに対抗して叫んだ。傍らに控える、運命の女神の名を。

そう、私はこの部屋の中にひとりきりでいたのではなかった。フォルトナが傍に立っていたのだ。だが、この美しい彼女を目視する事が出来るのは、この城内でも私だけ。よって、私以外の人間がこの部屋を覗いたら、やはり私しかいないと証言する事だろう。

私に名を呼ばれたフォルトナは、私の目前まで移動して来ると、何も言わずに掌を傾けた。そこからぼろりと、小さなダイスが落ちる。そして少し床を転がった後、【 6 】 を上にして止まった。

どんなに暗くても、ダイスは光って見えるので目を見間違える事はない。もちろん運命手帖も同様に、左手に現れていたそれを確認すると、『ユールを無視して部屋を出て行く』という内容が示されていた。ユールを部屋から追い出すのではなく、私が出て行った方が早いという判断だ。

納得した私は、棺桶のように静かで心地いい椅子から立ち上がる。同時に私の長い黒髪も、椅子の背もたれからはらりと落ちた。

そして私と同化する。

私は闇を背負ったまま歩き出す。

「 お? なんだ、やる気か? 」

既に部屋の中央辺りまで入って来ていたユールは、何故か嬉しそうに拳を構えた。

短い金髪を全て後ろへと撫でつけているユールの髪型は、正直あまり似合っていない。私がユールを嫌いなのは、その髪型のせいもあった。

(真似をするには、まだ早いよ)

一瞥しただけで、ダイスの結果通りユールを無視し、その横を通り過ぎる。

しかしユールも黙ってはいなくて、

「 ちょっと待てよ! 」

掴まれた腕を咄嗟に振り払うと、その手がユールの顔に当たってしまった。

だがそれも無視して　ただ、歩いた。

脚にまとわりつく布を蹴りながら。

開いたままの、扉へと向かって。

「おい、トゥエンっ？」

何も聞こえない。

もし聞こえていたとしても。

それを認めても。

私はトゥエンという名前が嫌いだ。

だから返事をする義務はない。

その名前どころか、私は私の本当の名前でない物は、全部嫌いだった。

だが困った事に、私は自分の本当の名前を知らなかった。

「聞こえてるんだろ？　トゥエンっ！」

だから聞こえない。

何も、聞こえない。

「っ……フォルトナ！　いるならなんで、トゥエンの身体を気遣わないんだよっ」

堪えきれなくなったように、ユールが私の背中に叫んだ。

(反応なんか、してあげない)

それでもフォルトナが、後ろを振り返った気配がしたから。

「　気にしなくていい」

呟いて、私は歩き続ける。

(貴女は悪くないよ、フォルトナ)

間違えているのは、いつでも人間の方。

何故ならフォルトナは、ダイス・キングダムに住む全ての人のためを想って、私を自由にさせてくれているのだ。それなのに、ユールはどうしてフォルトナを責めるのか、私にはまるで理解出来なかった。

だからこそ、声は私をすり抜ける。

長い回廊は、前にだけ続いていた。

「どこへ、行こうか？」

フォルトナを安心させるために、私は少し笑ってみる。

向かう場所などない事を知っていながら。

歩いた。

自分のためではない理由を求めて。

(食事なんてくだらない)

私はそう思っていた。

とりあえず生きていける量さえとっていれば、問題ないと。

だから私はあまり食事をとらなかったし、そのためたまに倒れていた。ユールが私の食事を気にしてい

るのは、そのせいだ。

「いい加減、ちゃんと食べるよ！」

他の人は誰ひとり口を挟まないのに、ユールだけはいつもしつこく絡んできた。「自分は唯一の幼なじみなんだから、ちゃんとしなきゃ」などと、勝手に思っているのかもしれない。

実際、私とユールはこの城へ来る前から一緒にいたし、城内に他の知り合いがいないのも確かだった。だからこそ私も、面倒だとは思いつつも、無視は二回に一回程度にとどめていたのだ。

「食べてるよ？ 倒れたときに」

「それじゃあ遅いんだよ」

「そんな事言われても」

(私に食欲なんて、ないんだから)

口にすれば、ユールはますますしつこくなるだろう。わかっていたから言わなかった。

それに、食欲だけではない。私には睡眠欲もなかった。だから倒れるまで寝ない。睡眠なんて、くだらない。

自分の中に本来あるべき欲は、大抵そんな風に「なんて」と簡単に言い捨てられる程度の、些細な存在だった。

時間をやり過ごすためだけに歩き続ける私は、先程聞いたばかりの台詞を思い返す。

『っ……フォルトナ！ いるならなんで、トゥエンの身体を気遣わないんだよ』

馬鹿な事を言うユールに、私の口元は歪む。

そもそもフォルトナは、そんな私だからこそ、私だけに姿を見せたのだ。私を気遣っていないのではなく、私の意思を誰よりも尊重してくれている。ただそれだけの事。

「フォルトナは、悪くないからね」

城内を徘徊しながら、私はもう一度、フォルトナにのみ聞こえるように呟いた。心配そうに私を見てくれていたからだ。

(……変なの)

フォルトナに心配されるのはくすぐったくて嬉しいのに、ユールに心配されるのはウザったくて仕方がない。だから嫌いなのだ。

「お、トゥエン！ 丁度いい所に」

呼ばれた一瞬、私はついびくりと反応してしまった。だが、聞こえた声はユールの物ではなかったから、安心して立ち止まると目を向ける。

廊下の向こうから私を呼んだのは、ダイス・キング直属委員会の人だった。名前は知らない。

どう反応しようかと私が決める前に、素早く近づいて来たその人は先を続けた。

「キングが、これからダイスを振って欲しいと」

だから、大嫌いなのだ。ユールは少しも私を放っておいてくれないから。

私は『ただのユール』を無視出来ても、『キングのユール』を無視する事は出来ない。

「あ、あの……？」

私があからさまに顔を顰めたからか、直属委員会の方は戸惑った様子で一步退いた。

「仕方ない」と一つ息を吐いてから、私は視線でフォルトナにダイスを振らせる。

結果は、わかっている。見るまでもなく、私にはわかる。だが目が出ないと、先へは進めないから。

【12】が出た。

私は手帖を、確認しなかった。

「行きましょう」

唾然とするその人に言葉を投げて、再び歩き出す。

無言で後ろをついて来るフォルトナが、私の行動が『当たり』である事を示していた。

皆のために。

世界のために。

『私』という存在を目視してくれる、沢山の存在のために。

私はダイスを振る。

私以外誰も持ちえない、二十面体のダイス。

そうして振られたそれは、必ず、あらかじめ決められた数字を示した。

それが私の存在理由。

他には何も無い。

だから私は、『自分』には拘らなかった。

それにより、どんなに疲れても、仕方がない事だから。

仕事を終えた後、鈍い足取りで戻る自分の部屋。心配したユールが追って来ても、フォルトナの振るダイスで無視をするだけ。

(するだけ だったのに)

城外が騒がしかったから、私は思わず窓の外に視線を投げた。

すると、私よりも小さな女の子がひとり、城を守る警護隊と怒鳴り合っているのが見えたのだ。その子はかなりの田舎から来たのか、この辺ではまず見ないような大きなツバの麦藁帽子を被っていた。

「なんだ、あれ……」

ユールは私のすぐ傍まで追いつくと、その視線まで追って呟く。

私達は足を止めて、しばらく見入って 聞き入っていた。どうやら女の子は、ダイス・キングに会いに来たようだった。

「会って、言いたいことがあるのですっ。どうして会わせてもらえないのですか!？」

そんな必死な声が、こちらまで届いていた。

『ダイス・キングに会いたい』 それはかなり珍しい願いだ。

大抵の国民は、ダイスによって運命を司っているのはフォルトナだと信じている。ダイス・キングはただの象徴であり、運命には直接関与していないというのが、一般的な考え方だった。だから、フォルトナに祈りを捧げはしても、ダイス・キングに会いたいなどという者はほとんどいなかったのだ。

しかもわざわざお城にまで押し掛けるとは、余程キングに会いたいのだろう。

「あんたのファンなんじゃない？」

隣のユールをからかうように言ってやると、

「おまえ以外の、ファンはいらないよ」

ユールは大真面目な顔で答えた。

「あんたって」

私はそこで精一杯ためてから、

「ほんっっつとーに、馬鹿よね」

全力で言い切ってやる。

生まれてから今に至るまで、私はユールのファンになった事などない。キングのユールでもそれは変わらないし、これからもない。それは確実な事だ。

ユールは面白くなさそうに眉を寄せる。

「トゥエン。おまえ俺より二つも年下なんだから、いい加減『あんた』はやめるよっ」

「たった二つでしょ？ それとも何？ 『ダイス・キング様』と呼んで欲しい？」

私がそれを口にすると、今度は下唇を噛んで露骨に傷ついた顔を作った。

「俺が何故ダイス・キングに立候補したのか、わかってるんだろ？ それでよくそんな事が言えるな」
(あんただって、私のこの性格を知ってて、よくそんな事が言えるよ)

思いはしたが、あえて口には出さなかった。一度言い争いになると、止まらない事を知っていたからだ。代わりに、名前を呼ぶ。

「フォルトナ」

するとフォルトナは、自主的にダイスを振り、私がユールから離れるための運命を引き寄せてくれる。

フォルトナは、わかってくれているのだ。ユールが傍にいと、苛々してしまう私を。だからこそいつも、私が直接望まなくても、そういう選択肢を選んでくれる。私の苛々が国のためにならない事も、知っているからだ。

私がフォルトナを呼んだ事で、ダイスを振らせた事に気づいたのだろう。ユールはまだ沈んだ顔をしたまま、訊いてくる。

「……なんの目が出た？」

「【20】よ。あんたを無視するわ、ユール」

これ以上追い掛けて来ないように断ってから、私は部屋へと向かって歩き出した。また手帖を確認しなかったが、フォルトナは何も言わない。

(合ってるのね)

そう思ったのは、半分間違いだった。

部屋に戻ってから、フォルトナに袖を引かれてそれに気づいた。そうして確認した手帖の、【20】の項目には 私の想像を遥かに超える続きがあったのだ。

[3] 城の外

【 1 】

出た目に従って、わたしは必死に警護隊のお兄さんと交渉を続けていた。けれど、お兄さんのダイスの目はわたしを否定しているらしく、まったく話にならない。

「だからっ、ダイス・キングに会わせてくださいって、言っているのです！」

「だから、無理だって言っているだろう!？」

さっきから同じことを叫びあっている。

(どうしよう.....)

わたしもいい加減疲れてきた。空の色も、だんだんとオレンジがかってきている。早めに街のほうへ行って宿を探さないと、本当に暗くなってしまいそうだ。泊まることを決めてから来ればよかったと、今さら後悔した。

うつむくように、自分の手に目を落とす。

「.....もう一度、ダイスを振ってみます」

まだ交渉を続けるか、やめるか。

わたしの振る意思を嗅ぎつけて現れたダイスを、高く放り投げた。ダイスはお兄さんの足もとでとまり

【0】。

(ああ、やっぱり戻ろう)

わたしはやっと決心した。

「今日は、あきらめます。でもまた明日、来ますから！」

「何度来ても同じだ。民間人は城のなかには入れられない！」

(こっちは帰るって言っているのに.....っ)

相変わらず態度をゆるめないお兄さんに、無性に腹が立ったわたしは、言ってやった。

「でも運命は、ときとしてあなたを裏切りますよ！」

「なんだとオ、このガキっ」

それからわたしは、逃げるように走った。宿のある街のほうへと向かって。

明日、本当にあのお兄さんの運命が変わることを、祈りながら。

宿も、ダイスで決めた。

「泊まる？ 泊まらない？」

一軒一軒宿の前で振って行って、【1】が出た宿に泊まることにしたのだ。都会には悪い人も多いと、荷馬車のおじさんが言っていた。けどわたしには、宿の良し悪しを判断できる目がない。だからダイスの目に賭けた。

ダイスで決めて、もし嫌な目にあっても。

ダイスの 運命のせいにできるから。

「わたし、ずるいのだわ.....」

そうやって決めた宿の一階にある酒場で、わたしは夕食をとっていた。そんななか、つい愚痴がこぼれてしまったのは、ひとりで泊まりに来たわたしを心配した宿のマスターが、親身になって話を聞いてくれたからだ。

「ずるいって、なにがだい？」

わたしのつぶやきに反応して、マスターはひょいとわたしに顔を近づけた。周りのお客さんたちがお酒を飲みながら騒いでいるから、そうしなければ声がちゃんと届きそうになかったのだ。

もっとも、ここは酒場なのだから、場違いなのはわたしのほう。わかっていたから、わたしもマスターに顔を近づけて答えた。

「だってね、ダイスで全部決められるのは嫌だと思って、ダイス・キングに話をつけにきたくせに、結局は

わたしもダイスに頼っているのですもの」

そうしなければ、動けないから だけじゃない。そうしなければ、責任のすべてが自分にのしかかってくるからだ。

言葉は無事にマスターまで届いたようで、苦笑するように眉の端をさげると、
「トナちゃん、まだ十四歳だろ？ ずいぶんと難しいことを考えているんだねえ」

きょとんとした顔で、そう口にした。

だからわたしは、わたしがそう考えるに至った理由を説明する。

別にわたしが賢いからじゃない。

ただ運命に、操作されただけ。

わたしの希望を、裏切りつづけたダイスを。

ダイスに従いつづけたわたしを。

そして、運命を恨む、わたしを 。

わたしはおじいちゃんを失ってから初めて、他人に明かした。

するとマスターは、目を細めて告げる。

「でもトナちゃん。誰かを裏切った運命が、誰かを助けることもあるんだよ？」

「え？」

次にきょとんとした顔をつくったのは、わたしのほうだった。

「私は子どもの君を、正直宿には泊めたくないと思った。子どもひとりなんてまず来ないけど、お金を持っていないことが多いし、家出人もいるからね。あとで面倒な事態になることが多いんだ。でもダイスを振ってみたら、運命の女神は君を泊めろと言う。だから私はそれに従って君を泊めたし、こうして夕飯もふるまっているんだよ」

「あ……」

言われて納得する。

確かに普通は子どもだけで来たら、どの宿だって断るだろう。それでもわたしがこうして泊めてもらえたのは、おじいちゃんが遺してくれたお金を持っていたから だけじゃない。

「ありがとう、ございます……」

わたしは改めて頭を下げた。フォルトナさまにも、頭を下げたい気分だった。

おじいちゃんを見殺しにした憎しみと、わたしを助けてくれた感謝が、織り交ぜになってわたしの心を強く揺さぶる。

「わたし 」

どれを信じればいいのか？

(なにを)

この憎しみが正しかったのかどうかさえ、今はもうわからない。

あんなに嫌いだったのに。

あんなに憎んでいたのに。

(これはフォルトナさまの罪滅ぼし?)

わからない。

(気まぐれ?)

わからない。

(また、裏切られる?)

わからない。

わかるわけがない。

ただ、今無心でダイスを振ったら、容赦なく【0】が出るような気がして。

【1】を出したかった。

(あのときのように)

すべてを否定されるような気がして。

「わたし、怖い……」

つぶやくと、その恐怖を振り払うように、わたしは近くにあったコップを掴んだ。

「ちょっ、トナちゃんそれ……っ」

勢いに任せて、一気に飲みこむ。

「それお酒だよ!？」

初めての味と匂いに、くらくらする頭。それでも不味いことだけは、認識できていた。

(なあに、これ……)

「がっはっは、小さいのに酒をたしなむなんて、いい教育されてるな、お嬢ちゃん」

「ほーら、もっと飲めもっとー！」

周りの酔っぱらいおじさんたちが、陽気に絡んでくる。

(もっと、飲む?)

深く考えず、頭に浮かんだ問い。深く考えず、現れ手からこぼれ落ちたダイスは

「【0】だ。ほら、部屋に戻るよ？」

不意に頭の上のほうからそんな声が聞こえて、誰かがわたしの腕を掴んだ。

「なんだあ？ 坊主。お嬢ちゃんが振ったダイスの目でも、見えてるってえのか？」

水を差された酔っぱらいおじさんたちが、今度はその声の主に絡んでいく。

(誰……?)

覚えのない声と手に、すでにズキズキと痛みはじめている頭を、それでも無理やり動かして確認した。わたしの目に飛びこんできたのは、ハンチング帽を目深にかぶった男の子。歳はわたしより少し上くらいだろうか？ 帽子のせいで顔はよく見えないけれど、知らない子であることは確かだった。同時に、酒場にいること自体が不自然であることも確かだ。ここに泊まる予定のわたしはともかく。

でも彼は慣れているのか、酔っぱらいおじさんの絡みにも動じずに、

「うん、僕にはちゃんと見えるよ」

しっかりとそう答えてから、こちらを見た。

「違ってた？」

(ダイスの目?)

そんなの、こんなわたしのくらくら頭でも見ればわかる。

視線を下に落とすと、足もとでわたしに目視されるのを待っていたダイスは、確かに【0】を示していた。

「違って……ないです」

「じゃあ部屋に戻ろう」

「えっ？ あ」

もう一度促され、わたしはやっと我に戻る。

そう、このままここにいても、きっと酔っぱらいおじさんたちのおもちゃにされるだけなのだ。親切なマスターにも迷惑をかけてしまうかもしれない。そんなことになるくらいなら、彼の手を借りて部屋に戻ったほうが、正しい選択だろう。

どうせダイスの目には逆らえもしないくせに、一丁前にそこまで考えてから、わたしはうなずく。

彼はそれをちゃんと確認してから、

「よし、じゃあ立って」

と、わたしの身体を支えながら腕を引いてくれた。おかげでわたしは、ねずみ取りのような椅子から立ちあがることができた。

そうして、そのまま酒場をあとにしようとしたのだけれど

「待ちなさい。君、食事だけのお客さんだろう？」

わたしを案じてくれているのだろう、マスターが鋭い瞳で彼に問いかけた。

それでも彼はやっぱり動じることなく、足をとめると変わらない声音で答える。

「ああ、だからこの子を部屋まで送ったら帰るよ。心配しなくても」

その様子があまりにも堂々としていたからか、マスターは一瞬次の言葉を忘れたようで、声を出さないまま口をぱくぱくさせていた。それからわざとらしい咳をふたつして、

「そ、それじゃあ頼もうかな。こっちの酔っぱらいたちは私が静めておこう　あ、その子の部屋は、二階のいちばん奥だよ」

どうやら信じる気になったようだ。きっと彼がわたしと同じ『子ども』だからだろう。

これがもし大人だったら、わたしだってもう少し警戒する。けれどこの彼では、正直警戒のしようがないのだ。背はわたしより頭ひとつ分高いけれど、全体的にひょろりとしていて、わたしをさらって逃げるなんてとても無理なように思えた。

ふと、彼の顔をよく見ておこうと思い立ったわたしは、頭をあげる。あとで会ったときに改めてお礼を言おうとしたって、顔を忘れていたのでは話にならない。でもそうしているうちに、彼とばっちり目が合ってしまった。

「歩ける？」

いたずらっぽい瞳で問われ、意地で答える。

「……歩く」

「上等」

それでもやっぱり肩は借りて、わたしはヨロヨロと歩き出した。

「坊主！　送り狼になるなよ～」

後ろから、そんな声が飛んでくる。

「まったく、これだから大人は……」

彼のつぶやきが聞こえた。その言いかたが妙に大人びていておかしくて、わたしは思わず声をもらす。

「笑うなよ。誰のせいで言われてると思ってるんだ」

「ご、ごめんなさい……」

「そう真面目に謝られても困るけどさ」

「ご　　」

また謝りそうになって、わたしは自分の口もとを抑えた。

「何だ？　吐きたいのか？」

「違いますっ」

「アハハ」

今度は思い切り笑われた。

(ああ……違う意味でも頭が痛いのだわ)

「ほら、階段だよ。大丈夫か？　僕に力があれば、抱き上げたいくらいだけど」

まだ笑い顔のまま、告げた彼。

「大丈夫です……っ！」

わたしの顔が熱いのは、確実にお酒のせいじゃなかった。

彼と手すりの助けを借りて、一步一步ゆっくりとあがるわたし。それに呆れずつきあってくれた彼は、やっぱりやさしいのだろう。

考えてみれば、そもそも彼はただ単に、わたしの近くの席で食事をとっていただけなのだ。それなのに、わざわざ自分から声を発し、わたしがお酒を飲まされるのをとめてくれた。

もしあのままだったら、自分では『飲まない』と決めていても、周りから強制的に飲まされていたことだろう。ダイスで決まるのは自分の行動だけであって、他人から強制される行動までは決められないのだ。

ただ、そんなふうには不可抗力でダイスの決めた運命から外れてしまった場合は、そこから新たな運命が紡がれるだけで、罰はない。それは、運命に従わず消えてしまった場合と違って、証言者がいるから確実なことだった。

(でも、できるだけ裏切りたくはないの)

そのほうが、いざというときに、今度こそ望み通りの結果を出してもらえるかもしれない。 やっぱりわたしは、ずるいのだ。

階段をのぼりながらそんなことを考えていたわたしは、あてがわれた部屋の前につくと、すぐに深々と頭をさげた。

「なんだか巻きこんでしまったみたいで、ごめんなさい。送ってくださってありがとう」

すると彼は、わたしの素直な言葉に照れたのか、ひょいと視線を外した。

「いや……面白い話、聞かせて貰ったし」

「え？」

それからわたしと目を合わせなおして、にっこりと笑う。悪巧みをするような表情だ。

と、そう感じたのは、あながち間違いではなかったらしい。

「明日、ダイス・キングに会わせてやろうか？」

「本当っ!？」

次に彼から飛び出したのは、そんな誘いだった。きっと、わたしとマスターの話を盗み聞きしていたのだろう。

(面白い話って、あのことだったのね)

一拍遅れた納得をして、言葉を繋ぐ。

「あなた、お城のかたなのですか？」

「ああ、ダイス・キングとは知り合いだ」

「まあ！」

なんという偶然。まるでできすぎた物語のようだったけれど、わたしは自然と信じていた。わたしを助けてくれたこの人を、信じずにはいられなかった。

けれど。

「信じるかどうか、ダイスを振ってみてもいいよ？」

「え？」

そう告げられて、一瞬考えてしまったから。

わたしの右手に、出現するダイス。

(どうする?)

もし【0】が出てしまったら。

わたしは、信じることができなくなる。

強制的に、彼を疑わなければならないのだ。

手が、震えた。

「大丈夫だよ。僕は信じてる」

笑う彼の言葉を、わたしも信じたかった。

手からこぼれ落ちるダイスは

「ほら、【1】だ」

「どうして見えるのっ？」

さっきも言い当てていた。普通自分以外のダイスの目は、見えないはずなのに。ダイスの輪郭は見えていても、数字を判別することはできないのだ。それは運命手帖も同じ。

彼はまた笑うと、その問いには答えずに、

「明日の朝、迎えに来るよ」

それだけ告げ、まわれ右をして走って行ってしまった。

「待って！ 名前はっ？」

本当は追いかけたかった。けれど、お酒のせいでフラフラのわたしにはとても無理で。それだけ尋ねるので精一杯だったのだ。

それでも階段の前で、彼はこちらを振り返る。

「『フォル』っていうんだ。おやすみ、トナ！」

そう告げて手を振ると、帰っていった。

わたしはすぐに部屋のなかへと入り、窓から顔を出す。

「おやすみなさいフォル！ ありがとうっ」

玄関から出てきたフォルの後ろ姿に、わたしも手を振った。フォルは振り返らなかったけれど、きっと届いただろう。

そのあとのわたしは、明日のことを考える余裕もないほどすぐに、深い眠りへと落ちた。

初めての都会は、わたしが感じていたよりもずっと、わたしを疲れさせたようだった。

[4] 城の中

部屋に戻ると、ユールが私を捜していた。

「んっ？ トウエン……そんな格好でどこへ行ってたんだ？」

「あんたに答える義務はないでしょ」

横を通り過ぎようとした。私を、ユールは珍しく言葉で止める。

「『ブルークの抜け穴』を、使ったのか？」

「……！」

思わず振り返ってしまった。すると、フォルトナまで驚いた顔をしていて、私はつい笑ってしまう。

「なにがおかしい？」

眉間に皺を寄せたユールに、フォルトナは見えない。

「　　そうだよ」

それだけ答えると、私は部屋からユールを追い出した。

「おい、『そうだよ』ってなんだよっ？ トウ……フォル！」

扉越しに、ユールが叫ぶ。かつての名前を呼び、叩く。だが前と違ってこじ開けられないのは、私が真に拒絶している事をわかっているから、なのかもしれない。

「明日も、使うよ」

「な……っ」

最後の言葉を告げて、私は部屋の奥へと引っこんだ。これ以上ユールに話す事はない。ユールが本当に私を理解しているのなら、これで通じるだろう。

そう、思ったから。

実際はどうかわからないが、扉の向こうは静かになった。これ幸いと、いつもの椅子に深く腰掛ける。

暗い部屋と同じくらい、暗い私の心。

(本当に、これでよかった？)

私自身まだはっきりと決めたわけではないのに、目を向けるとフォルトナは微笑むから　　逆らえなかった。

きっとそれが、私の意思なのだろうから。

更に暗がりへ落ちるために、目を瞑った。やはり眠るためではなく、懐かしい人の顔を思い出すために。

あの人　　エルリスト＝ブルークを。

私は、ずっと不思議だった。

(ブルークは、どうして生きていけるの？)

それは目の見えない人だった。

目が見えないから、常に自分自身の意思だけで運命を切り開いている、凄い人。

親に捨てられた　　その事実だけで、既に生き苦しかった私は。神様に見捨てられた、ブルークに訊いてみたかったのだ。

「どうして、生きていられるの？」

(目が見えないのに、どうして希望を失わないの?)

ブルークの大好きなフォルトナ像の前で、無邪気に問い掛けた。

見上げたブルークの顔には、皺の多い穏やかな笑顔が浮かんでいた。茶色い髪を全て後ろに流しているため、ブルークの表情はいつでもよく見えた。まだ幼く、背の小さかった私からでも。

やがてブルークは、身を屈めて私を抱き締め、ゆっくりと言葉を刻んでいった。

「目が見えなくてもね。周りの皆が私の存在を認めてくれるから、生きていられるんだよ」

「えー? どういう事？」

首を傾げる私にも理解出来るように、易しく、優しく。

「自分ひとりだけじゃ、存在している事にならないからね。他に誰か人がいて、その人が目視し、そこに人がいるのだと信じてくれなければ、フォル、おまえだって存在出来ないんだ」

「……でも、私ここにいるよ？」

(必要ないかもしれないけど、いちゃってるんだよ?)

ブルークは目を細めて微笑む。

「うん、そうだね。でも、今おまえの網膜に映っている世界は、本当はおまえが都合よく創り出している世界なのかもしれない。だって、誰もおまえの眼球を通して世界を見る事は出来ないのだから、もしそうであったとしてもわからないだろう？」

(私の眼球は私だけの物だから、他の人は使えないって事?)

「そんな曖昧な世界の中で、おまえという存在を信じ、話し掛け、手を伸ばしてくれる人がいるという事は、本当に素晴らしい事なんだよ」

よく、わからなかった。

ただ、私という人間が本当に存在するためには、他の皆が必要なんだって事だけは、理解出来た。

私を捨てた両親ですら、『私』という存在を証明するためには、必要だったという事。

「じゃあ、存在してたから、私は捨てられたんだね。存在しないと捨てられないもんね」

否定して欲しいような、そうでないような。

自分でもよくわからない感情で告げたその言葉は、意外にもあっさりと肯定された。

「確かに、おまえの両親はおまえの存在を認めたからこそ捨てたし、フォルトナ様も、それを認めたのだろう」

告げるブルークの顔に、暗さは微塵もない。

「え……」

(私、フォルトナ様にも捨てられてたの?)

対する私には、絶望という言葉がぴったりだった。

「どうして、生きていられるの？」

最も問わねばならないのは、自分自身にだったのかもしれない。

しかし、泣き出す私の手を、ブルークはしっかりと握り締めて、

「だってね、おまえの両親は、おまえを捨てる前に、絶対ダイスを振ったはずだろう? そうしてその選択肢に従ったんだ。　　なあフォル? そのときフォルトナ様は、確かにおまえを裏切ったのかもしれない。けれど、その分きっとこれからのおまえを助けるよ」

そう、言い聞かせた。

「だから信じておいで。フォルトナ様も　　おまえの存在を信じてくれる皆を」

(この温かさを、くれる人達を?)

信じていれば、私は生きていけるの？

難しい事はわからなかった。

ただ生きていたかったから信じた。

それからの私は、ブルーク言葉通り、確実にフォルトナに救われていった。

自分を目視してくれる皆のために。

私の存在を認めてくれる、皆のために。

そう思ってダイスを振り続ける私の前に、突然現れた『フォルトナ』。

初めて目にしたとき、私は泣いた。とうとう幽霊に取り憑かれちゃったんだと思って、わんわん泣いていた。

そんな私を、フォルトナは後ろからただ見守るだけだった。

やがて泣き止んだ私は、気づいた。何もしない彼女に。そして勇気を出して顔を見て 目が離せなくなった。

ブルークが大切に祈りを捧げていた、あの美しい石像にそっくりだったから。

「本物の……フォルトナなの？」

初めて真っ直ぐ前に立ち、私がそう尋ねると、少し困ったように微笑んだまま、ゆっくりと頷いたフォルトナを覚えている。

「私を、助けてくれるの？」

「私を、生かしてくれるの？」

「私を 見ていてくれる？」

何度も頷いてくれた。

(フォルトナは、私を見捨てたんじゃなかった！)

それが証明されて、何よりも嬉しかった。

そうしてフォルトナの存在を認めた私の、ダイスは急速に進化していった。通常大人になるまでは【0】と【1】のダイスしか持てないはずだったが、十歳にも満たない私の手の中に、何と運命手帖が現れたのだ。ダイスも【1】から【6】までになった。

またそれだけでなく、私は知らないうちに自分の望む目を出せるようになっていたのだ。ブルークに指摘されるまでそれに気づかなかった私は、単に運がいいのだと思っていたが、そうではなかった。

「フォルトナはね、ダイス・キングダムに住む人々全員の味方なんだよ。だからフォルが人のためにダイスを振る限り、フォルトナだってフォルの味方をするだろう」

ブルークが私にそれを告げたのは、私が城へ向かう日の朝だった。

そう、私は城に呼ばれた。城では丁度、次のダイス・キングを探していたから。

ダイスによって国の運命を決める、このダイス・キングダム。冗談みたいな話だが、政治に関わる事も全て本当にダイスで決めているのだと、ブルークは教えてくれた。だから危ない橋など、渡れないのだと。

そのため城では、フォルトナを見る事の出来る、確実にいい目を出す人 国のためだけにダイスを振れる人を連れて来ては、キングに仕立てていたのだった。

しかし、いざキングになると、自分の出す目一つで国が動いてしまうその重圧に耐えられず、心身を病んでしまう人が多かったという。そのため、常時新しい人材を探し回っているものの、フォルトナを見る事の出来る人がそうそういるわけではない。それに、あまり頻繁に国王が替わっては国民も不安に思うだろうという事で、本来のダイス・キングとは別に、もうひとりのダイス・キングが立てられる事となったのだ。そうして呼び名が分けられた。

国民の前に立つ不変のキングを『ダイス・キング』とし、実際にダイスを振る本来のキングを、『トゥエ

ン』と呼んだ。二十面体ダイスを操るからというのが、その名前の由来らしい。

丁度十歳のとき、そのトゥエンとなった私。確かにその頃には、私のダイスも二十面体まで進化していた。出したい目を、外す事はなかった。

大人の言う通りの目を出し、国内平和に一役買った。その『大人の言う事』自体が間違っていないかなどと、気にする理由もなかった。ブルークが「大丈夫だ」と言ってくれたから、私にはそれで充分だったのだ。

それに、運命手帖に現れる選択肢の半分には、少しずつだがちゃんと私の意思も含まれていた。私を操る大人達は、私の機嫌を損ねないように、なるべくそちらの目を選んでくれた。

大切にされていた。本当に平和だった。

二年後 表のダイス・キングが亡くなるまでは。

彼を助けるための選択肢は、最初からなかった。病死だった。

途端に、城内は騒がしくなった。

「次のキングは誰？」

沢山の大人達が立候補した。その中に、ひとりだけ子供がいた。

「ユール？ あんた、何で……」

「ずっと城にいたの、気づかなかったろう？ だからだよ」

厭味くさい顔で微笑んだ、それがユールだった。

ユールは私と同様にブルークに拾われた子供で、ブルークの家で一緒に育った、言わば幼なじみだった。もっとも、そう仲がいいわけではなかったが。

どうやらユールは、私がトゥエンになったのと同時期に、ブルークの元を離れて城の警護隊として働いていたらしい。数えてみれば、その頃十二歳。警護隊の試験を受けられる最年少の年齢だった。

(犯人はブルークね)

ブルークは城に対し、何らかの影響力を持っているようだったのだ。だからユールが受かったのもおそらく、そんなブルークの口添えがあったからだろう。

ユール自身がそれに気づいていたのかはわからないが、警護隊だけではあきたらず、今度はキングになるろうという。しかも、意味不明な理由で。

「若すぎる！」

当然最初は、そう猛反対された。国民の期待と信頼を一身に背負わねばならないキングだ、子供ではとても務まらないと。それに私とて、ユールがキングになるのは嫌だった。近くにいれば煩わしく感じてしまう事を、わかっていたからだ。

だが

「若い方が、その分長く国民を騙せますよ」

ある日突然城にやってきて、告げたブルークの一声で決まってしまった。ブルークの言葉は、『何らかの影響』などという生易しい物ではなかったのだ。

後で知った事だが、ブルークはかつて私と同じように、ダイスを振るためだけにこの城の中にいたのだという。といっても、その当時はまだ呼び名が分けられておらず、ブルークはダイス・キングとして国民の前に姿を現していたらしい。

そんなブルークが、ダイス・キングを降りた理由。それは他のキング達と同様、心身を病んだためではないという。

そう、『目』だ。

原因不明の失明により、フォルトナやダイスを見る事が出来なくなったブルークは、自ら城を出たそうだ。しかし城の人々はまだ、ブルークの傍にフォルトナがいるのだと信じていた。ブルークの、何よりも

国民を想う心は、少しも変わっていなかったから。だからブルークが城から出た後でも、その意見は尊重されていたのだった。

その結果が、『これ』だ。

「ブルーク……貴方は一体何者なの？」

しかし、まだそんな過去なんて知らなかった私は、あの暗い部屋でブルークに問い掛けた。目の見えないブルークには、暗さなど初めから問題ではないようで、それでもちゃんとその顔は真っ直ぐに私の方を向いていた。

「ユールを選びなさい、フォル」

私の問いには答えず、ブルークはそう告げた。そして、

「いつか逃げ出したくなったら」

城の中庭にある、秘密の抜け道の事を教えてくれた。

「ブルーク……」

「私はいつでも、おまえたちの幸せを願っているよ」

「ブルーク……っ！」

ブルークは答えない。

私の問いには、答えてくれない。

くるりと背を向けて、まるで世界の全てを味方につけているかのように、何の躊躇いもなく、一步一步正確な足取りで私から離れてゆく。

「ブルーク！ 私やユールを拾ったのは、こんな風に城に送り込むためじゃないよね!？」

どうしてもそれだけは、訊きたかった。

そもそも、城に私の存在を伝えたのはブルークで、そのブルークは今、ユールをキングに仕立て上げようとしている。ただの孤児である私達が、ダイス・キングダムのトップに立とうとしているのだ。私がフォルトナを見る事が出来るようになったのも、きっかけはブルークの言葉だった。

(何故?)

ブルークの目的が、私にはわからない。

信じたいから余計に、わかりたくなかった。

でもそのままでは、前に進めない気がした。

返事を待って立ち尽くす私に、ブルークは

「おまえのフォルトナを、信じなさい」

そんな答えしか、くれなかった。

私はもやもやを抱えたままキングにユールを選び、今度は城内で一緒に生活するようになったのだった。

その頃は理解出来なかった答えも、今なら納得出来る。

誰が、どうして、どうなったのかなんて、言ってしまうと『どうでもいい話』なのだ。問題は、私がどう思うかという事。私を信じてくれるフォルトナを、信じられるかという事。

フォルトナは、優しい。

だからきっと、ブルークに何か裏があって私達を拾おうとしていたなら、そのときに止めたはず。ブルークがダイスを振ったとき、拾わない選択肢を選んでくれたはずなのだ。

だがブルークは、私達を拾った。拾って、温かい腕で育ててくれた。

(それが真に私達のためであったのだと、その運命を、信じられなくてどうする?)

それに、ブルークが教えてくれた抜け道は、確かに私達を支えていた。使うまでもなく、その存在だけで心が落ち着くのだ。

「いつ逃げてもいいんだ」と。

「いつも腕を広げて待っているよ」と。

遠くにいながらも、励まされているような気がして。

同時に私は、それを使うときが『最期』だとも思っていた。一度使ってしまったら、覚悟を決めなければならぬ。ここから逃げる事は、フォルトナやブルークを裏切る事と同意なのだ。

ユールもどうやら同じように思っていたらしい事は、さっきの反応でわかった。

(さあ、どう出る？ ユール)

そして、私を止めなかった、フォルトナ。

珍しく、明日という日が楽しみでならなかった。

[5] 城の外

わたしは小さい頃、あの【1】から【6】までのダイスと、運命手帖がとてもうらやましかった。

わたしたち子どものダイスは、【1】と【0】しかない、二択。

『やる』か『やらない』か。

『肯定』か『否定』か。

それしかないから、手帖はいらなかった。

「早く、大人になりたいなあ」

いつもそう、おじいちゃんに言っていた。言っていたのに、ダイスも手帖も貸してくれないおじいちゃんを、「ちょっといじわるだな」と思ってさえいた。

貸せないことも知らないわたしに、

「ダイスの本当の意味を理解しないと、大人になっても手帖を持つことはできないよ」

と、笑って教えてくれたおじいちゃん。

そう、大人になればみんな、【6】までのダイスや手帖を持てるという決まりはない。大体十八歳から二十歳くらいまでのあいだに、ダイスが進化して手帖が現れるようになっていられると言われていたけれど、それまでに持てない人は一生持つことができないそうなのだ。逆に、それ以前でもダイスの意味を理解できれば、ダイスはいくらかでも進化するという。

だからわたしは、ダイスの意味を必死になって考えていた。

どうしてダイスは、わたしたちに覚えてくれるのか。

ただの運試しじゃない。

確実にわたしたちの運命を、左右している。

「きっとフォルトナさまが、わたしたちを正しい道へと導くために、教えてくれているのね！」

そういう結論に達したわたしを、嘲笑うかのように。

病気で倒れたおじいちゃん。

薬をあげようとするわたし。

【0】しか出ない、ダイス。

ドンドンとドアを叩かれて、わたしは目を覚ました。すぐに枕が濡れていることに気づき、あわてて顔をぬぐう。

「は、はいっ!？」

時間を確認する余裕もなく返事をする、聞こえてきた声は、

「トナ？ フォルだけど……もしかしてまだ寝てた？」

(フォル？ もうそんな時間なんだっ)

「い、今準備するからっ、ちょっと待ってて！」

焦ってベッドから降りようとしたわたしは、シーツに足をとられて転げ落ちそうになる。

(うわぁ……っ)

でも声はあげなかった。今あげたらきっと、フォルが部屋のなかを覗いてしまうだろうから。寝起きのわたしの髪の毛は、クモの巣みたいに四方八方に広がっていて、とても見られたものじゃないのだ。

必死に手でシーツを掴み、床に落ちないように踏ん張る。

すると、フォルがさらに声をかけてきた。

「宿の主人が朝ご飯を用意してくれたっていうから、下の酒場で待ってる」

「う、うん、わかった！」

わたしの返事に、フォルの足音がゆっくりと遠ざかってゆく。それからやっと、わたしは手の力をゆるめ床に身体を預けた。少し音は出たけれど、ドアの前にはいなければきっと聞こえないだろう。

(……はぁ、びっくりした……)

昨夜の酔いがよほど響いたようだ。おじいちゃんと暮らしていて早起きに慣れていたわたしは、ひとりになってからもずっと早起きを通していたのに。時計を確認してみると、今はもう全然早くない時間だった。

せっかくダイス・キングに会える日なのにと、朝から自己嫌悪に陥りそうになる。それでもすぐに、目を覚ますよう激しく首を振って、気持ちを切り替えた。

「ようし！ 準備するぞーっ」

そうだ、『せっかく』なのだ。

せっかくだからこそ、伝えなくちゃ。

わたしは昨日、迷っていた。

フォルトナさまをこのまま恨んでいいのか、憎んでいいのか、迷っていた。

でも、今見ていた夢の気持ちも、本当。

わたしはずっとつらかった。

泣きたかった。

でも泣けなかったから、旅に出たのだ。

(とにかく、気持ちを伝えなきゃ！)

そのあとどうするかは、そのときになってから決めればいい。

ダイスを、振ればいいのか。

改めて決意したわたしは、急いで身支度を整えた。それからおじいちゃんの形見の麦藁帽子をかぶろうか迷って 結局はゴムに首を通し、帽子はかぶらずに頭の後ろに引っかけた。

(置いていくなんて、できないものね)

鏡の前で軽く確認をしてから、フォルが待っている下の酒場へと急ぐ。

「お待たせフォル！ ごめんなさい、遅くなって」

わたしが行くと、そこには昨日と同じハンチング帽をかぶったフォルと、マスターのふたりしかいなかった。昨夜は騒がしかった店内もずいぶん静かで、テーブルや椅子も整然と並べ直されていた。こうして見ると、酒場じゃなくて普通の食堂みたいだ。

後ろ向きに座っていたフォルが、振り返ってわたしを促す。

「いや、僕もちょっと早く来すぎたかもと思ってたから。さあほら、席に着いてよ」

「うん、ありがとう」

うなずきながら椅子に座ったわたしは、テーブルの上の料理がまったく減っていないことに気づいた。食べずに待っていてくれたのだろう。わたしはますます申しわけなくなる。

「じゃあマスター、いただきます」

告げたフォルにならって、せめてもの気持ちをこめてわたしも声をあげた。

「いただきますっ！」

「ハハ、朝から元気だねトナちゃん」

「それだけがとりえですからっ」

「ふ」

わたしは真面目に答えたつもりだったのに、ふたりには壮大に笑われてしまった。

朝食を終えたわたしたちは、ふたりでお城へと向かっていた。そのあいだにも、すっかり仲良くなったわたしたちの会話は尽きない。

「ねえトナ、どうしてその麦藁帽子を被らないの？」

頭の後ろにあるのが気になるのか、となりを歩くフォルが不思議そうに問いかけてきた。

「さっきまでは、建物の中だったから被らないのかと思ってたけど」

「だって、都会にはこんなツバの広い帽子をかぶっている人がいないのだもの。でも、おじいちゃんがつくってくれた大切なものだから、置いていくこともできなくて……」

「ふーん」

口ではそんな返事をしながらも、フォルは麦藁帽子を掴み上のほうに持ちあげると、ちょこんとわたしの頭にかぶせてくれた。

「じゃあ気にしないで、被ってればいいよ。大丈夫、トナには似合ってるから。他の人が被ってないのはさ、自分には似合わない事をちゃんと知ってるからじゃないのかな」

「そ、そうかな？」

(だったら、うれしいのだけど)

「あ！ フォルもその帽子似合ってるから、大丈夫だよ？」

「アハハ、そりゃどうも」

わりと本気で言ったのに、また笑われてしまった。

しかし、不意に表情を戻したフォルは、

「トナ、そのおじいさんの事で、まだフォルトナを憎んで？」

「.....今は、わからないわ。でもそのときはね、ひどくつらかったの。とても憎かった。どうしてわたしのダイスは二択しかないのって、嘆いたわ。だって薬をあげたくてもあげられないなんて 絶望、するでしょう？」

わたしが言葉を選びながら答えると、今度は苦笑したフォルが、

「同情は、するかな」

それだけ答えた。表情は、少し暗い。

(あれ.....?)

わたしになにか、彼が傷つくようなことを言ったかしら？

わからなかったから、とりあえず

「でもわたし、最近考えを改めたの」

「え？」

その表情を明るく変えたくて、言葉を繋いだ。

「【1】と【0】のままでもいいかなって」

「そりゃあまた、どうして？」

「だって、細かい選択肢のせいで、誘拐されかけたんですもの！」

そうして、わたしをこの都会へと連れてきてくれたおじいさんの選択肢のなかに、わたしを連れて帰るといふものがあったことを話した。

「六つの選択肢って、半分は自分の意思が含まれるのでしょうか？」

「そうだね.....君があんまり可愛いから、そのおじいさんは君を連れて帰りたかったのかもしれないなあ」

「そっ、それはわからないけれど。だからわたし、大雑把なままでもいいかなって」

ときどき、フォルはこちらが「どきっ」とする言葉を平気で口にする。今の話題で明るくなったのは、どちらかといえばわたしのほうかもしれなかった。

「ところでフォル」

「ん？」

「わたしたち、どうしてお城の裏のほうにまわっているの？」

そう、お城を囲む堀づたいに、道なき道を植物に邪魔されながら進んでいた。身を低く隠して、今は一列になっている。これじゃあまるで、悪いことでもするみたいだ。

そんなわたしの心配をよそに、フォルはけろりと口にする。

「そりゃあ、忍びこむためだよ」

「えっ!? だってフォル、ダイス・キングと知りあいなんでしょ？」

(知りあいだったら、普通に約束を取りつけられるんじゃないか.....?)

「知り合いだからって、簡単に会わせて貰える人じゃないんだよ。ダイス・キングっていったら、この王国の全ての事を、ダイス一つで決定してる凄い人なんだから」

「うわっ.....本当にそうだったのね」

「『うわっ』って何だよ」

「だって」

ダイス・キングというからには、きっとキングもダイスを使っているのだろうことは、予想していた。でもまさか、自分のことだけではなく、国のすべてを本当にダイスで決定しているなんて。

(思わないじゃない……！)

「もし変な目が出ちゃったら、どうするの？」

先を歩いていた、フォルの足がとまった。

「ごめんなさいっ、わたしまた変なことを言った？」

「いや……」

それからフォルは、ゆっくりとこちらを振り返る。

「心配しなくても、そんな事はあり得ないよ。ダイス・キングは慎重に選ばれてるからね」

「あら、代々王家が継いでいるのではないの？」

「君……田舎者だろうとは思ってたけど、相当だね」

「……………」

言われて、今度はわたしの動きがとまってしまった。

(さすがにへこむわ……)

「だってわたし、おじいちゃんが教えてくれたことしか、知らないのだから……」

早くに両親を事故で亡くしたわたしは、親がいないなら学校に通う権利はないと、通わせてもらえなかったのだ。だから、わたしの世界はおじいちゃんがすべて。読み書きも全部おじいちゃんが教えてくれたし、その他生活に必要なことは全部、教えてくれた。

ただ逆に言えば、直接わたしの生活に関係のないことは、あまり教えてもらえなかった。ダイス・キングがどんなふうに分められているかなんて、わたしが知らなくても生活には困らないから、知らなかったのだ。

わたしが沈みこむと、フォルは不意に頭をさげてきて、

「ごめん、言い過ぎたよ。フォルトナから取ったありきたりな名前同士、仲良く行こう」

右手を差し出してきた。

わたしは自然にその手を取り 迷わなかった今は、ダイスなんて現れない。

「本当、よく聞く名前同士なのだよ」

一度沈んだことも忘れて、笑った。

国中の人々から信頼される、運命の女神・フォルトナ。だからこの王国には、その名前から取った『フォル』や『トナ』といった名前の人々が、とても多かったのだ。

わたしは繋いだ右手を、上下に揺らす。

「改めて、よろしくお願ひしますっ」

「ああ、こちらこそ！ で」

「えっ？」

フォルはその手を強引に、右のほうへと引っ張った。おかげで、わたしたちの手は当然そびえ立つレンガの塀にぶつかり 沈む。

「えええっ？」

そしてぽっかりと、開いた。

「ここが秘密の入り口なんだ」

「すごいわ、フォル！」

思わず抱きつく。勢いで、そのまま穴のなかへとなだれこみ

「わわわっ」

ふたりして倒れこんだ、塀の内側には。

「 ! 」

人の足が、見えた。

(やばっ)

ゆっくりと顔をあげていくと、先に声が降ってくる。

「フォル……と、昨日の女の子か。もしやと思って来てみれば。一体なにをしているんだ？」

あまり怒った様子ではなく、その人は口にした。フォルよりも、もちろんわたしよりも年上らしいその人を見ると、フォルは身体を起こして、

「ほらトナ。こいつがダイス・キングだよ」

そんな乱暴な紹介をしながら、思い切り指を差した。

「えええっ？」

わたしはさっきとまったく同じ、間抜けな声を出してしまう。

(ダイス・キングって、こんなに若い!?)

てっきり大人がやっているものとばかり思っていたのに。目の前に立っているのは、わたしたちより年上といっても『子ども』には違いなかった。

そのダイス・キングの目には、わたしのことなど入っていないようで、まっすぐにフォルを見て問いかける。

「……どういうつもりだ？」

訊かれたフォルは、かすかに首を傾げて、

「トナをキングに会わせたかったから。だから連れて来たんだ」

「なにか文句ある？」とでも言うように答えた。とてもキングに対するものとは思えない態度だ。

(知りあいというか、ケンカ友だちなのかしら?)

わたしがそう考えたときだった。

ダイス・キングの口から、とんでもない言葉が飛び出したのは。

「フォル いや、トウエン。おまえ、ダイス・キングを辞めるつもりなのか？」

[6] 城の

ユールの言葉にかなり驚いた顔をして、トナがこちらを振り返った。

「トウエン？ それも、フォルの名前なの？ それに、ダイス・キングって……」

(そろそろ潮時ね)

私は苦笑しながら、被っていたハンチング帽を取り払う。抑えつけられていた長い黒髪は自由を取り戻し、風に揺れた。

「フォル……？」

口に手を当てたトナの代わりに、私が発する。

「『フォル』も『トウエン』も、確かに私の名前よ。どちらも 私の本当の名前ではないけど」

「え……っ？」

捨てられる前の名前を、私は知らないから。

啞然とした表情のトナに、私は微笑む事しか出来ない。

「ごめんね、トナ。騙したかったわけじゃないんだ。ただ、貴女に会って、話を聞いてみたかったから。男装すれば、城内でも私に気づける人はほとんどいない。だから抜け出すには楽だったんだよ。男の姿でいた方が、どこへ行くにしても絡まれにくいしね」

「……………」

動かないトナの体温が心配で、思わずトナの頬に手を伸ばした。私とその温かさを確認した瞬間、トナは我に返ったようだ。

「あの、こんなことを言うと失礼かもしれないけれど……」

「ん？」

今度は何故か、トナが苦笑する。

「わたし……フォルが女の子で、よかったわ！」

そうして私に、抱きついて来る。トナの麦藁帽子が、また頭の後ろへと戻った。

「だって男の子だったら、こうはできないのですものっ」

「トナ……」

全身に感じる、トナの温かさ。

これまで一度も、感じた事のなかった想い。

(ああ だからフォルトナは、許したのね)

私がそこへ行く事を。

そしてそれなら私は、真実を告げなければならない。腕の中のトナと、口を挟めずに佇んでいるユールに。

前へ、進むために。

「私ね、城内からトナを見掛けたとき、自分でも気づかないうちに、トナに会いたいと思っていたんだ。どうしてあんなにもダイス・キングに会いたがっているのか、気になった」

その些細な感情が、選択肢に現れていたのだ。トナを見掛けて部屋へ戻った後、フォルトナに促され確認した手帖。その選択肢の半分以上が、トナに会う内容であり、フォルトナが選んだ【20】は、『ユールを無視して部屋へ戻り、あの女の子に会いに行く。必要があれば助けよ』だった。

私は笑った。すぐに城内にある衣装部屋に忍びこむと、男の子用の服を拝借した。着替えて、髪をまとめて、ハンチング帽を被った。

そして部屋を出る前に、確認した。

「いいのね、フォルトナ」

フォルトナはいつもの表情で、私を見返した

「でもそれは、その子のためだったんだろう？ 実際はおまえ自身が、『ダイス・キング』であるのだし」

「えええっ？」

ユールのその言葉を聞いて、トナは奇声をあげながら私から離れた。物凄いスピードで。

(あらまあ)

さっきユールがちらりと口にした事を、もう忘れていたらしい。もしくは、ちゃんと理解出来ていなかったのか。

私は笑いながら、

「違うよ、ユール。私は『ダイス・キングのダイス』なんだ。ダイス・キングはやっぱりあんただよ。だから私は、ダイス・キングに会わせてあげようと思って行ったんじゃない。単に、そうまでしてダイス・キン

グに会いたいと思うトナの理由が、気になったんだ」

私が、それを、知りたかったから。

その感情は、『自分のため』以外の何物でもなかった。それを知った所で、『国のため』になる事は一つたりともない。私はそれに気づいていて、だからこそフォルトナに確認したのだ。「本当にいいのか」と。

自分の願いのためだけに、ダイスを振るとき　それが『ダイス・キングのダイス』としての最期である事を、知っていたから。

そのとききつと、フォルトナも見えなくなると、気づいていたから。

自分の願いを叶える、たった一度きりのチャンスは、そこから先の運命と引き替え。

私は『皆』と同じになるのだ。

(ダイスに従わなかったときみたいに、存在ごと消えないだけ、まだマシなのかもしれないけど)

私の口元は、自然と笑った。

「でもさっき、『キングに会わせてかったから』って、言ったじゃないか！」

しかしユールは、私のその理由に納得がいかないらしく、さっきまでトナがいた抱きつける程の位置まで来ると、私の胸倉を掴んだ。そして強く睨んでくる。一体何をそんなに腹立てているのか、私にはよくわからない。

私はダイスでなくなる事に、少しの未練もないのに。

ダイスがなくなる事に、少しの未練もないのに。

そんなユールに対し、どう動こうか考えていると、

「やめてっ、フォルに乱暴なことをしないで！」

私がダイスを振る前に、何とトナが彼の腕を外してくれた。支えを失った私は、よろりとその場に崩れる。

「なんだおまえ……わかってるだろ？　おまえ、フォルに騙されてたんだぞっ」

ユールは容赦なく吐き捨てるが、しかしトナも負けてはいなかった。私をユールの視線から遮るように、両手を伸ばして。

「フォルが女の子でもっ、キングでもっ、わたしにとっては恩人で、大事なお友だちだもの！」

「お友だちって、おまえなあ……」

呆れた様子ユールにも、トナは怯まない。

「あなたがなにに怒っているのかは、わからないけれど……今もしあなたがダイスを振ったら、きっとあなたの希望を裏切る目が出るわ。でもね、フォルはそれで幸せになれると思うのっ。わたしは昨日酒場で、それを教えてもらったの！」

「トナ……」

フォルトナが憎いと言っていたトナは。

哀しい思い出に、優しい想いを囚われていたトナは。

ちゃんと真実を、取り戻していた。

「なに言ってんだよ、おまえ……」

鼻で笑うユールの、前に私は出る。

「フォル？」

心配そうなトナの声が、くすぐったい。

「大丈夫よ」

少し振り返って、笑顔を作ってみた。反射したそれは、私に勇気をくれる。

「ユール。私は昨日、トナの話を聞いて、あんたとトナを会わせたいと思ったんだ。正確に言えば、ダイス・

キングと、だけどね。そのために、あんたもここに来るように仕向けた」

「だから、何故？」

「……あんたの口から、言って欲しかったんだよ。さっきトナの口から出たような事を、ね。そうしたらトナも、きっと信じると思って。でも、そんな必要なかったみたい」

それから私は、もう一度トナを振り返った。

「ねえトナ。貴女がおじいさんにあげようとしていた薬、人から貰った物だったんでしょ？」

「え、ええ……お金がなくて、お医者さんに診せられなかったの。そうしたらおじいちゃんの親戚だっている人が、薬をくれて……」

「その薬ね、おじいさんの病気に対しては毒だったんだって」

「え……？」

トナの動きが凍った。

「私、人のダイスの目が見えるって、言ったでしょ？ 本当は私が見えるんじゃない。私が見えてるフォルトナが、見てるの。私はそれを教えて貰ってるだけ」

「じゃあ、フォルトナさまが、そう言ったの……？」

今度は私が、容赦なく頷く。

「『誰かを裏切った運命が、誰かを助ける事もある』って、そういう事よ。ねえトナ。【0】しか出なかったダイスは、確かに貴女を裏切った。でもおじいさんは、それで幸せだったんだよ。孫に殺される事もなく、可能な限り長く、孫と一緒に過ごす事が出来たんだから」

「あ……」

トナの大きな瞳から、小さな涙が溢れ落ちる。

「……そうやって、フォルトナも泣いてた。誰かの気持ちを裏切っても、憎まれても。それ以上に、ひとりでも多くの人を助けたいから」

トナの話聞いて、「同情する」と言った私の言葉は。本当はトナではなく、フォルトナに向いていたのだ。

手を伸ばして、トナの涙を受け取る。

「そのフォルトナの涙がね　ダイスになって、こうして人の手の中に現れるの」

「……っ!？」

それは、フォルトナを見る者にしかわからない、真実。フォルトナは滅多に表情を変えない。だが確かにその瞳から、ダイスは生まれていた。人の運命を決める、ダイスが。

「わたし……わたしねっ、ずっと、泣けなかったの……っ」

嗚咽の混じる声で、トナは私にすがった。

「その理由をっ……知りたくて、旅に出たわ……」

そんなトナを、私は抱き締める。

フォルトナを、抱き締めた事はない。

子供の頃からずっと傍にいても。

触れる事の出来ない存在。

触れようとしても、すり抜ける存在。

それが、フォルトナだったから。

母親代わりにはなれても、温もりは与えて貰えなかった。

こんな風には。

「知らなかった……フォルトナさまが、代わりに泣いてくれていたなんて……っ」

「トナ……」

トナの温もり、トナの涙。

(何て温かいんだろう)

フォルトナは、これを私に、与えたかったのだ。

顔を上げて振り返った私の目に映るフォルトナは、既に大分透けていた。

うん、私はもう、大丈夫。

今度はトナと、トナが心配してくれる私のために、生きてみようと思う。

「トナ……自分を責めないでね？ トナは悪くない。誤解されやすいフォルトナの方に問題があるんだから」

「フォルったら……」

泣き声で笑った。

トナは十分に、強い。

「フォル、おまえ、城を出て行くのか？ どうするんだ、これから……」

「ユール……」

傍で全てを聞いていたユールは、啞然とした表情で呟いた。未練などない私をやっと理解してくれたのか、もう怒っている様子はない。

(これから？)

問われて 困る。

今まで一度も考えた事がなかった。そもそも、自分のために生きようとした事がないから。どうしていいのか、さっぱりわからないのだ。

「トナは？ トナはこれからどうするの？」

ふと、腕の中にいるトナに振ってみる。

やっと泣き止んできたトナは、少し首を傾げて、

「ダイス・キングには会えたし、泣けなかった理由もわかったし、ちゃんと泣けたし……そうね、今度はわたしのよう、フォルトナさまを信じきれずに悩んでいる人たちを、救えたらと思うわ。わたしには帰る家も待っている人もいないし……」

それを聞いて、私の目標も決まった。

「じゃあ私も、それについてく事にする！」

「なにいつ？」

「本当っ!？」

嫌そうな声をあげたのはユール。嬉しそうな声をあげたのはトナだ。

「私も、帰る家なんてないから」

ブルークが教えてくれたフォルトナを手放してしまった私は もう、あそこには帰れない。

「それならトナと一緒に旅をした方が、面白そうでしょ？」

「うれしい！ フォルっ」

「……………」

また抱きついて来るトナとは対照的に、ユールはこちらを強く睨んでいた。

「じゃあおまえ トナ！ ダイスを振ってみる。きっと【0】が出て、おまえは残念、俺は万歳だからなっ」

「何でそんな事を言うんだ……」

呆れる私を余所に、トナは素直にダイスを振っていた。私にはもう、出た目がわからない。だがその明

るい表情から、答えは明らかだった。

「あんたが残念、トナが万歳だってさ」

「わーい」

「くっそー！」

「そもそもさ、何で私が残ると、あんたが万歳なんだ？」

「だから、俺のファンはおまえひとりで充分だって、言ってるだろーっ」

「だから、私はあんたのファンじゃないとも、言ってるよね？」

「……っ、わかった、俺も一緒に行く！ これで俺も万歳だ！」

「待って、それじゃあ私が万歳じゃなくなるっ」

そう考えた瞬間、私の右手にもダイス、左手には手帖が。

(おっ)

フォルトナが見えなくなっても、まだ手帖は使えるらしい。ダイスは 六面体。だが今の私には、これで充分だ。

「フォル、一緒に振ってみましょ？」

そう促され、トナを見る。トナの手にも再び、ダイスの輪郭が現れていた。

「そうね」

「俺も振るぞ。絶対【1】を出すっ！」

私達は顔を合わせて笑い、そして同時に 大切なフォルトナの涙を、優しく地面へと返した。

(ちゃんとわかってるよ、フォルトナ)

貴女が私のために、トナと出逢わせた事。

これまでの私は、あまりに自分を見ていなかったから。

本当はユールの言う通りに、心配してくれていたんでしょ？

ときには私を、叱りたかったんでしょ？

(でも、出来なかったんだね)

私があまりにも、周りに一生懸命だったから。

皆のために、尽くしていたから。

(でも、見てられなかったんだね)

我慢して、我慢して。

いつも代わりに泣いてくれていた貴女は。

私を手放す事を、決意した貴女は。

それでも、笑っている。

涙を流しながらも、私に微笑んでいる。

いつもそれに支えられてきた私は、これから、貴女にそれを返そう。

幸せなときを刻み、誰よりも笑う事で。

貴女を幸せにしてあげるよ。

私ひとりでは、きっと無理だけど。

『私達』なら、やれる。

私はこの名前を、好きになれる。

貴女はそれを、わかっていたんだね。

さよなら、フォルトナ。

心の中で、また逢いましょう　　。

[了]

文・楽山やくら（らくやま・やくら）

<http://yakura.raindrop.jp/>

斜め大好きな雑食です。異世界や現代を舞台に、コメディやミステリを書いています。よろしくお願いいたします。

絵・重森まさみ（しげもり・まさみ） - イラスト特別提供 -

<http://pastmcafe.hariko.com/>

このたびは参加させて頂きまして、ありがとうございました。

この拙い絵で楽山やくらさんの世界を壊していないことを祈りつつ、絵の方も少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

あとがき

お待たせいたしました！ オリジナル短編小説誌「でんしょでしょ！」3号をお届けいたします。

創刊号・2号共々、ネット小説ファンの皆さま、および、読書好きな皆さまに、楽しんでいただけると嬉しいです。

本誌作成にあたって、作者さま、絵師さま、そして、校正担当のメンバーのみなさまには大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。
本当にありがとうございました。

「でんしょでしょ！」は5号まで発行する予定です。ご興味を持たれた方は、ぜひ下記サイトをご覧ください。

『でんしょでしょ！ 企画室』

<http://densyo.sblo.jp/>

【オリジナル小説誌】

でんしょでしょ！ vol.3

<http://p.booklog.jp/book/46430>

定価 無料

でんしょでしょ！ 作成企画室 (<http://densyo.sblo.jp/>)

作成責任者：なび (<http://wanavi.squares.net/>)

校正担当者：恵陽・なび・冬木洋子・村崎右近・柚希実（五十音順）

表紙イラスト：恵陽

初版：2012年3月

二版：2012年8月

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46430>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46430>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.